魔と人との物語

黒山 仁

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔と人との物語

【Nコード】

N5995G

【作者名】

黒山 仁

【あらすじ】

主人公の高校生、矢倉瑞希と幼馴染み兼親友の日下部龍也そんな2人がある日化け物に襲われ死んだと思ったら実は生きてて異世界に飛ばされていた。そんな2人が国を立ち上げ王になったりとハチヤメチャした日々を過ごす魔と人との物語【不定期返信】

第零話：プロローグ

今、自分の頭がおかしくなってしまった!?と思っている。

何故なら目の前に巨大な怪物がいる。体長二メートルほどで腕が丸太ほどの太さがある生き物に襲われそうなのだ!!

さて、何故こうなったかと言うと数時間前にさかのぼらなければならぬ。

朝いつものように学校へ向かっていた。

「あ〜〜ダルイ、眠たい学校行きたくない」

隣で愚痴を言っているのは、幼馴染み兼親友の日下部 龍也容姿は、はつきり言っていてカッコイイ、身長も高いし、引き締まった体そして良く整った顔だから良く女の子と付き合っていたりする。

「そんなのダメに決まっているだろ」

で今のが矢倉 瑞希容姿は、幼く見える顔（童顔）、背丈は、高くない体つきは、普通なので良く年下と間違えられる。（ちなみに男）

そんな2人が登校していた。

「だって瑞希が宿題見せてくれないから先講にまた嫌味いわる」

膨れっ面の龍也が僕に向かって言っている。

「やらないお前が悪い。それにいつもいつも僕に頼るな」

顔をしかめる僕

日常化した会話いつもと変わらない朝とこの2人は、思っていた。

この日からさかえめに日常と非日常が入れ代わる事を知らなかった。
いや知るよしもなかった。

第一話・日常の終わり

僕らが通っている学校は、おつしん楼進高校といって何処にでもあるごく普通の進学校だ。

毎日毎日同じことの繰り返しで正直退屈している。特にやりたいことなどなく毎日将来使うかどうかのわからないことへの勉強自暴自棄になりそうだ。

だから願ってしまた。「自分の世界が変わって退屈しない毎日」をだが現実には、そう甘くない実際世界は、何も変わらないどんなに願ったところで何も変わらない何も起こらないだから毎日勉強していい大学いっていい職場に就いて色褪いろあせた毎日を過ごすのだと考えていたし思っていた。

そんなこと考えてたら話しかけられているのにきずかなくなった。

「なあ瑞希ちゃん？ちゃんと話し聞いてる？さっきから話しかけるのに無視するのは酷くない」

「おい！！瑞希ちゃん言うな唯でさえ子供に見られるのに」

「あと”女の子”にも付け加えなきゃ」

「りゅ〜う〜や〜もう宿題見せてやらない」

「ええ！？わかった悪かった謝るから瑞希赦してくれこのとおり」

「わかった赦してやらなくもない」

「赦すか赦さないのかどっちなんだよ！」

少しの沈黙……2人が同時に吹き出して大笑いしているこの2人は、あまり性格が似ていないはたから見たら仲良くなならない、いや2人とも関わりをもたないそんな性格の2人が仲良くしている。ならなぜ仲良くなったのか？それは、……

数年前

2人がまだ小さい時たまたま瑞希が龍也の家の隣に引っ越してきたからだった。

龍也の家は、道場をやっているなんとか流古剣術などなどの古武術を改良した護身術を教えていた。

当時の瑞希は、体つきが悪く背も低かったためよく女の子に間違えられ両親は、共働きなので夜遅く帰ってくるため女の子と間違えられる瑞希を心配して、あることを思い付いた。

「隣の家の人に護身術を瑞希に教えてもらおう！」と言って、護身術を教えてもらっているうちに親同士の交流が増えて仲良くなりなし崩し的に瑞希と龍也が仲良くなった。

それ以外にも以外と微妙にそりがあつのも2人を仲良しから親友になるのを早くさせた要因だと思っている。

瑞希は、あまり体を動かすのは得意はないが頭がかなりいいそのため大人びていて現実的学校では、小・中学校ともに学年一位で高校入ってから最初のテストは、オール満点だから先生達からは、

「学校始まっていろいろの天才」と言われていた。かといって運動がダメではないするのが嫌で普通の人よりは、いいこれは、護身術を小さい時からやっていたおかげある。

内気で取っ付きにくいところがあるため人間関係は、広くない。

龍也は、体つきがかなりいい背も高いから運動神経がいい頭は、悪く勉強は苦手であるが自分の親から古流武術を叩きこまれたために

ケンカは、強い

気さくで話しかけやすい、裏表ない性格で人間関係が広い自由奔放すぎるのがキズだったりする。

そんなこんな考えていると授業が終わり放課後になっていた。

「瑞希！遊びに行こうぜ？」

いつの間にかいた龍也が話しかけた。龍也のクラスと瑞希のクラスはけっこう離れていてさっきホームルームが終わったばかりなのに隣にいた。

自分のクラスから何を急いで来たのは、しらないが少し息が荒いなど考えていて何も用事が無いから「別にいい」と返信をした。ついでに理由も聞いた。

「別にいいけど何で急に遊びに行こう何なんだ？」

「よくぞ聞いてくれた！！今日親父達が急に仕事が入ったからとかで飯作る暇がなかったらしくさっきお袋からメールで「適当に何か家にあるもの食べて過ごして」て来たんだけど……」

「何なんだ急に黙って何か深刻なことでもあるのか？」

「そうなんだ家に帰ってもまともに食える食べ物が無いんだ」

「それはかなりの深刻な問題だな」

瑞希の家の親も基本共働きなので家にいないそのためご飯などは、自分で作るか食べに行くかのどちらかのだが基本的に自分で作っている。食べに行く時は、家に食べ物があったく無いという時だけなのだがその辺の気持ちは、深くよく分かる。

「なあいつも思うのだがなぜに平日なのにこんなに人がたくさんいるんだ？」

「龍也そんなの近くに学校がたくさんあって交通機関がしつかりしているからに決まっているからだろ」

「そんなこと分かっているんだけどこれだけ人がたくさんいると愚痴の一つや二つ吐きたくなるわ」

確かに人がたくさんいる。平日なのに満員電車のように商店街の道には、人、人、人と人だらけで参ってしまう平日なのにこれだけ人がいると休日は、どれだけ人がいるんだと考えてしまう。

「まあたしかに愚痴の一つや二つ吐きたくなるわなこれだけ人がいると通ってこれば」

「だろゲーセン一つ行くのに一時間以上かけんバカらしくてしょうがない」

学校からにゲームセンターまでの距離は、空いたらたかが15分ていどで着く距離だから龍也は、けっこう苛立っていた。

「たしかにだけどいつものことだろ」

瑞希が龍也のことを宥^{なだ}めていた。

瑞希達の家近くには、ゲームセンターは、まったく無いや娯楽施設がないあるのは、何処にでもあるスーパーなどで大抵の日用品などは、そこに行けば揃^{そろ}うしそれ以外は、学校帰りにここによって行けばいい休日は休日て家の掃除や洗濯などが瑞希にはあるので休

日は来たことは、無い。だから休日に来てみたいと思っている。

「まあいい、瑞希とりあえず遊ぼう腹がすくまでゲームで発散だ」

「そうだね時間もけっこうたっちゃたしお腹がすくまでゲームに
さしむとしよう」

2人は、さっきたまったストレスを発散するためゲームに熱中して
いった。

【2時間後】

「あゝお腹減ったとてもう7時半すぎてるじゃんおゝい瑞希飯食
に行こう?」

「うん、分かったで今何時?」

「7時半だ2時間近くもゲーセンいたからだいぶ腹がすいたろ」

「ああかなりお腹空いた速く食べに行こう」

2人は、そう言ってゲームセンターを後にした。

近くのファミリーストラン サンシャインブ によって腹ごしら
えをした。

サンシャインブ を出る時にはもう9時を回っていた。

2人は、家に向かって歩いていった。

「だいぶ長いしたな瑞希本屋は、よってかなくていいのか？今からでも急げば閉まる前に本買えるぞ」

「龍也もういいんだ明日買えばいいしもう今日は夜遅いし」

「んじゃあささと帰るあんまり遅くなると明日起きれないし」

「それは、龍也だけだろ」

「うわひどい瑞希ちゃん」

「ちゃん付けするな龍也！！」

他愛ない会話

将来は、色褪せていると思うけどど親友とすごす”今”楽しい時間
この時づくにきづくべきだったのかも知れない周りがいつもと違う
ことをいつもより”静かすぎる”ことを

第三話：非日常の始まり

この世界には、モンスターや妖精など日本でいう妖怪や八百万の神様など存在が昔から語りずかれています。

なぜそんな意味不明な存在が語りずかれているのかを疑問に思わないだろうか？

例えば鬼は、一説によると里から離れて山で暮らす山男や大人里おおひとから離れて山で暮らす山男や大人おおひとが鬼だと考えられている。

だが本当にそうなのか？

鬼みたいな化け物的な存在は、いないのだろうか？

いや一存にいないとはいえないならどんな存在かこうとは、考えられないだろうか

モンスターや妖怪などは、本来この世界には、存在していなくてもっと別の次元まったく違う世界、異世界からやって来たのではないかと考えられないだろうかだが真実は、わからない誰にも……そして運命という歯車が回りだした。

角を生やした身長が二メートルほどの緑色の肌をした化け物がどっからともなく現れたのをさかえに……

9時37分化け物と会う数分前

2人は、話しながら帰路についていた。

「瑞希のクラスって明日の宿題何があったけ？同じ宿題があったら写させくれん？」

「なあ龍也少しは、宿題自分でやるうとわおもわないの？」

「俺の辞書に宿題と勉強をやるという文字はない！！」

龍也が拳を握って豪語している。

瑞希は、よく思っなぜこんなにバカなのに龍也と同じ学校に入れたということに疑問に思っている。

「バカなこと言っていないでたまには自分で宿題をするだからみしてやんない」

「そんな殺生な

頼む瑞希、明日宿題やってこなかったら先コウに今度の休みなしって言われるんだよ」

「なおさらダメじゃあないか！！それに宿題やらない自分のせいだからおとなしく帰ってささと宿題終わらせれば言われるいいことだろ」

「うう！？そ、そうなんだけどさー ブツブツ」

また小さい声で文句を言っている頭は、そこまで悪くないのに宿題や勉強をやらないからいつも成績が下から数えた方が早い（ちゃんと宿題と勉強やればこんなことにならない）と考えていたら龍也が話しかけてきた。

第三話：化け物との決着

「お．．み．．起．．．．．ろ」

「おい、瑞希早く起きろ！！」

誰、僕を呼んでるのは、早く起きなくちゃ学校に遅刻しちゃうでもあと少し寝ても大丈夫だから

「あ、あと．．．5分．．ね、寝かせて．．．5分たったら、起きる．．．．からお母さん」

「面白い寝言をありがとう、てそんなこと言っていないで早く起きろ」

「ん、んんんん．．あ、あれなんね龍也が僕のへらにいるろ」

瑞希は、まだ寝惚けている。これが本当の女の子でそれなり格好をしてたら襲いそうだった。

「はあ〜瑞希寝惚けてないで早く起きろさもないと瑞希を襲うぞ」

「つつつつつつありがとうございます！！お陰様でもうスッキリ目覚め．．ま．．し．．た．．．．．？」

瑞希は、いきよよく目覚めた。だが疑問に思うことがあった。

「龍也？」

「何だ瑞希、どうかしたか？」

「どうかしたかとかじゃなくてここ何処だよ!？」

「それは俺も知らんだが俺達は、あの時化け物に襲われていたのは、たしかだ。死んだ死んでないは、別として」

「そうだあの時の化け物は、何だったんだあんなの僕達の世界にいるはずがないのに」

初めて見る場所、化け物によって殺された感覚、襲われ時の恐怖が今頃瑞希を襲い瑞希は、パニックになり早口になって龍也を質問攻めにしていった。龍也は、瑞希を落ち着かせるために口をひらいた。

「それは解らないけど俺達は、生きてるそれはたしかだから落ち着け瑞希!! もう大丈夫だから」

「ご、ごめん取り乱したぞ、そうだよな僕も龍也も生きてる今は、それだけに感謝しよう」

龍也の慰めでパニックになった瑞希は、少し落ち着けることができた。もし瑞希1人だったら今頃半狂乱になっていたかもしれない。

「だけど本当にここは、何処だこんなところ俺達の家の近にないしあったら俺が知らないはずがない」

「うん、そうだねここ何処だろうまさか外国にいるのかな？」

冷静になった瑞希が龍也の疑問に同意した。今2人がいるのは、荒々しい岩が剥き出しになった荒野だった例えるならアメリカ映画にでてくる西部劇によくある場所だった。すぐ近くに石で出来た家があ

る町らしきものがある。人がいないのかその町のいたるところ家が崩れていたり倒壊している。その光景は、遠くからもみえるぐらいに廃れた町だった。

「んんん、人がいる気配は、ないなとりあえずそこら辺を探るか」

龍也は、立ち上がり近くに人がいるか探そうとしたが瑞希に呼び止められた。

「おい、龍也無闇に探し回らずにまずこの日射しをさいぎれる建物を探そう、もしあの時襲われた化け物みたいなやつがいたらまずここに居たらかつこの餌だし探してる途中に出会ったらあの時みたいに殺されかけるかもしれないからとりあえず武器になりそうなのと日射しをさいぎれる場所を中心に探すことにしようよ」

「そうだな俺ももうあんな思いしたくないしそれじゃああの町みたいなのに行くか」

「うん、龍也速く行こう」

「あつ！！瑞希此れから宜しくな頼れる頭脳」

「ああ頼れる肉体労働」

2人は、廃墟に向かって歩き出した。廃墟までの距離は意外と遠く着くまでには、真上にあった太陽は午後3時程になっていた。

「案外遠いもんだな途中からこれが蜃気楼だと思ったぐらいだぜ」

「ハア、ハア、ハア、本当に、とをかったハア、ハア、ハア、ハア、ハア」

「大丈夫か瑞希？」

「うん、大丈夫あと少し休んだら大丈夫だから」

廃墟までの距離が意外にも遠かった2人直ぐに着くと思つて少し速めに歩いていただけが歩けど歩けど目的地に着かずいつの間にか瑞希は、結構の量の体力を使つてしまった。

なら何故龍也は、余り疲れてないかと言うと龍也は両親に物心憑く前から自分の家の流派の日陰流古剣術ひかげを習いそれともなう体術と体力を付けることをしていたため普通の人以上に遥かに体力と筋力があるためこのくらいではバテない瑞希は普通の人以上に運動ができるだけで龍也みたいに化け物並みの体力はないそれ真上からによる日差しと足場の悪さに通常より体力を削いだのも原因である。

「にしても龍也は、相変わらず化け物並みの体力しているよね」

「はあ〜これが普通だろ〜かお前が体力無すぎなんだろ」

龍也の体力の基準は、自分の家族なので他人とは、少し常識がズレている。

（体力的なこと以外ならまともなのに）瑞希は、良く思った。

その会話から2人は余り喋らなかつた。2人は、顔には出していないがやはり精神的疲労と肉体的疲労でかなり滅入っているそれから日射しをさいぎる場所が見つかったのはそれから約2時間後ぐらいたった時だつて日は、もう沈みかけて綺麗なオレンジ色に染まつてきた。

「夕日は、綺麗だなこうしてゆっくり見ると今までできずかなかつたことに良くきずく用になるねえ〜此れからは、細かいことに目を向

けていこうかな 人生って最高!!」

「はあく、龍也バカなこと言ってないでさっさと現実に戻ってきて此れからのこと話そうよ」

2人は、何とか屋根が付いていて少しの間過ごせそうな建物を見つけて此れからのことを相談しようとしていた。

「別にいいじゃん感傷にひたつたてバチは、当たらないと思う」

「それはね、感傷じゃなくて現実逃避で言っただよそこんどこわかってる」

「うう!!ご殿しい一言でっつと、とりあえずどうする?もう少し休んだら探しに行くか?」

「いや夜は、探しに行かない方がいいと思うもし何かの不足の事態になったら土地勘がない僕らが不利になるから明日の朝から武器を探してから人を探したほうがいいと思う」

「それもそうだな今日は、色々ありすぎてけっこう疲れたしな明日に備えて早めに寝よう」

それから2人は、他愛もない話をして暗くなるまで過ごし辺りが見えなくなると2人揃って寝ることにした。

翌朝、陽が登り始めてきたころ

1人の外套がいとうを被った人が歩いていて、身長は百七十センチぐらいで腰には、剣を携えてある性別と年は、外套を深く被っているせいか解らないだがいくつもの修羅場越えてきたという雰囲気はただよっていた。だが普通の人と違う所があったそれは、背中に鳥のような羽が付いている事だ。瑞希達の世界には、あり得ないことだが時々動いているためにコスプレたぐいの類では、ないと主張しているように見える。外套の人らしき奴は、そのまま瑞希達がいる廃墟になった町に向かっていた。

廃墟になった町のほうでは、それから少したつて瑞希達は、武器になりそうな物を見つけていた。

「なあ、武器を見つけたのはいいがこんなボロイ奴でまともに戦えるのか？」

「それを工夫するのが龍也の腕の見せ所だろ」

瑞希と龍也は、朝起きたらまず周りに敵がいなかを確かめていた。確かめたら一人ずつ外に出て泊まった建物中心に円を描くように周りを散策していた。その結果近くの廃墟から両刃剣が二本（錆びれたやつ）と片刃の西洋剣が一本（今にも折れそう）と斧が一本（錆びれたやつ）がみつつかた生憎人と食料と水は、手に入らなかった。あつたには、あつたが空だったり干からびているのしか見つからなかった。その為瑞希達は、空腹に悩まされた。

グウウウウウウウウウ

「腹減ったな、瑞希このままだと空腹で餓死しちゃう」

「確かに洒落にならなくなってきた。早いとこ町か何か食べ物に巡られる場所に行かないと本当に……」

とりあえず2人ともいつまでも同じ所でとどつ待てるわけにわいかないのでこの場所を後にして2人で周りを散策しながら町か何所か人がいる所まで移動することにした。廃墟と貸した町を跡に2人は、歩き出した。

町から出て今のところ問題無く進んでいる。瑞希の手には、両刃剣を右手に持っていた。龍也は、同じく両刃剣を右手に持っていて背中に斧を背負っている。

「なかなか町は、見つからないな。何所にあんのかね。さつさと見つけて飯に有りつきたい今なら不味い飯でもうまく感じそう」

「それに僕も同意できるあの化け物に襲われた時にせっかく食べたご飯を吐いちゃったから胃の中がすからかんだよ」

2人は、適当に空腹感をまぎわらせる為に会話をしていた。その時周りを囲まれてることにきずいた。

「クソ！！腹が減っててこいつらの接近にきずかなかた」

「何だ、こんな生き物見たこと無いよ！！狼に似ているけど狼に角なんて生えてないし」

行き成り襲って来たのは、狼みたいだけど違う生物だった。狼みたいな骨格でも凄くやせ細っているとと言うより骨と皮だけで目が少

そしてすぐにその雄叫びをした奴が現れた。そいつは、身長が二メートル程で腕が丸太の様に太く頭から角が生えており緑色をした化け物だった。そいつを見た瞬間瑞希は、恐怖で動けなくなってしまった。

「瑞希、大丈夫か？少し下がってるこいつの相手は、俺がするから」

「大丈夫！！僕も戦うよ」

「駄目だ！！そんなに震えていてそれに恐怖ですくんだ足で戦いに挑んだらただの足手纏いになるだけだ！！」

「うう、わっかた少し下がってるでもやばくなたら助けにいく」

「ありがとう、瑞希」

龍也と化け物は、戦い始めた最初のときわはやや優勢でたたかっていた。それでも龍也が化け物の肩を切れば化け物も龍也の肩に当たるといった感じの拮抗状態で時間とともに龍也が押され始めた。大きく拮抗状態が崩れたのは、両刃剣が折れて斧に武器を変えたため押されている。龍也は、化け物の左拳の攻撃をよけまにあわなかった。右拳の攻撃を防御体制で向かえ打つが化け物の方が力が強い。ため龍也は、後ろに吹き飛ばされ背中から岩に激突して気を失った。

「ガハッ」

化け物は、龍也より瑞希を襲いに来た。瑞希は、恐怖で体が動かなくて脳の方は、いつもより冴えている感じがするため親友を助けに行けなかった。不甲斐無さと死への恐怖で動かない自分を恨んだ。だが化け物が近ずいて来るにつれて恐怖が心を支配した。

（化け物に殺される僕も龍也も殺される殺される殺される殺される）

「ひ、酷い龍也信じたのに」

「・・・・・・・・・・・・・・・・わははははははは」

2人は、お互いが無事に生きているのを確かめ合うように盛大に笑いあった。

それからしばらく2人は、笑い合い句切りがいいところで瑞希は、気になることを龍也に聞くことにした。

「なあ、龍也とところでここは、何所だそれにあの化け物どうなったんだ」

「詳しいところは、分からないしここが何所かはまだ聞いてない。でも助けってもらったのは、確かだ」

「うん、分かったところで助けてもらった人は、誰だそれに言葉は通じるのか？」

瑞希は、廃墟になった町で龍也が辺りを散策している時に色々考えていた。

言葉は、通じるか？

近くに町は、有るか？もしなっかたら・・・

食料をわけてもらえるか？

どうやって家に帰るか？などなど考えていた。

（言葉が通じるとしてここは、日本なのかそれともたまたまか？それに僕達を助けて何かいいことがあるのかもし売り飛ばしたりするなら軟禁するはず・・・・・・・・あああああ1人で悩んでもどうにもならないかとりあえず龍也と一緒に考えてみるか）と思考に更けていると龍也が口を開いた。

「ん〜何て言うか人では無い様な・・・ま、言葉は、通じるし助けたくれた奴なら今買い物に行っている確か名前は〜〜バ、バ・・・ベ・・・ジ・・・」
「ブラットだ」
「そうそう確かそんな名前・・・」
「って行き成り声かけんなビックリするだろうそれに部屋に入る時は、ノックするのが礼儀だろう」

「人の名前をすぐに忘れる奴に礼儀がどうか言われたくないなり
ユウヤ」

「ま、まあ〜細かい事は気にしないで」

今龍也と話しているのは、たぶん外に続くドアの近くで外套を被って立っている”ブラット”という名前の人らしき生き物だった。なぜ人らしき生き物かというと背中から鳥の翼が生えていたからだ。

（せ、背中から翼が生えている！！コスプレなのかな〜？わっ！動いた！！やっぱ背中から生えているんだ）
（思考の海にダイブしていると不意に話しかけられた。）

「おっと、雑談してる時じゃねえ初めましてだな俺の名前は、ブラット・コーラスって言うんだよろしくな」

（意外といい人そうだな何か信用してよさそう）

「あ！！、はいこちらこそ助けていただきありがとうございます。
僕の名前は、矢倉 瑞希といます」

「んん、お前さんの名前はヤグラなのか？」

「いえ、瑞希のほうです」

(あれね、こころって名前と苗字が逆なんだ)

「じゃあこれからお前さんのことをミズキと呼ぶな、俺は、名前を呼び捨てかさん付けで頼む他人行儀は余り好きじゃあねえんだ」

「分かりました。ブラットさん」

「よいしょと、改めて俺は、龍也 日下部よろしくなブラットのオッサン」

「お前は、改め無くていいし、まだオッサンって言う歳ではない」

「ち、分かったよブラットさん」

軽い挨拶をし、ブラットが「立ち話もなんだから」と言って3人は窓の近くに有るイスに座った。座ってすぐにブラットが外套を脱いで素顔があらわになった。その素顔は、鷹のような顔をしており、目は鋭くいかにも修羅場を何回も潜り抜けてきた感じがあり雰囲気も同じ感じだ手と足にいたっては、鉤爪があつたまさしくオカルト雑誌に出て来そうな鳥人間だった。瑞希は、かなり狼狽していた。龍也は、もう見たのか余り驚いていない。

そんなことを知ってか知らずかブラットが口を開いた。

「俺は、2、3聴きたいことがあるがいいか？」

「いいですよ」

瑞希は、できるだけ平静を装って答え、その後すぐにブラットが質問をしてきた。

「お前達は、何者なんだ？人間がこんな所にいるはずないし、それにミスキが”ギガント”を倒した力は何だ？」

2人は、少し固まってすぐに龍也が口を開いた。

「み、瑞希があん時の化け物を倒したのかよ！！」

「ああ、そつだ」

龍也が言ったことをブラットが肯定した。

その時瑞希は、まだ目をパチクリさせて

（あの時の化け物は、ギガントって言うんだ）と半分現実逃避をしていた。と、すぐに疑問に思ったことを口にした。

「ち、違います！！あの時の記憶は、龍也が吹き飛ばされてからすぐに無いんですから僕もあの後すぐやられた筈ですそれにあの時は、ブラットさんが助けてくれたんじゃないんですか！？」

「それは、違う俺は、ギガントの討伐を依頼されてきたんだ。依頼用紙に書かれた情報にあの町に居てその町と周辺に人がいないと書いてあったのに町には、居なくて人のいた形跡けいせきがあり周りを探したらこの町を出つていた後があつてもしかして思つて追いかけてきたら案の定お前達がギガントに襲われているわりユウヤは、気絶してるし、ミスキ腰を抜かして動けないで居ると思つたら急にミスキがほとんどの全種属性の魔法を使って倒したと思つたら急にを頭抑えて苦しみだしたら倒れて捨てていくのも何だから俺がここまで運んで来たつてわけだ」

「……………2人は、目を点にしているそれを逸早く理解した瑞

希が口を開いた。

「魔法、討伐、依頼それ何？」

「はあく魔法やモンスターの討伐依頼を知らないのか？」

2人はコクコクと機械人形みたいにならずいた。

「本当に知らないのかよお前ら本当にどっから来た？」

それを聴いて瑞希答え始めたこないだの夜の出来事をあの化け物、ギガントに襲われたこと

自分の出身国が日本ということなどなど

そして目覚めたらあの場所近くで倒れていたこと

最後にブラット（さん）に合うまでのことを話した。

「信じられないなその話が全部本当ならお前たちは、異世界から来たことになるな〜でもこの世界でニホンとかキカイとか聞いたことが無いからなそれに嘘ついてるように見えないし信じるか」

「ありがとうブラットさん」

「どつってことないさそれに怪我する覚悟で行ったのに無傷で帰ってこれたし、金もたくさんひたし良い取りみどりこちらこそお礼を言わないといけないんだからな」

「じゃあ言え」

「五月蠅いぞリユウヤー!!」

ブラットが殺気を放って龍也を威嚇している。

「すみません」

その殺気にきずいたのかすぐ誤っていた。そんな光景を眺めながら瑞希は、初めて心底から笑っていた。それにきずいた龍也とブラットも同じく心底から笑った。

少し話していると部屋に3人分の料理が運ばれてきた。3人は、その料理を食べ始めた。

「まあ、遠慮しないで食べる食べる」

ブラットがそう言って瑞希と龍也はかなり腹が減っていたためすぐに食べ始めた。

「うま、美味いよこの料理こんな料理食わせてくれてありがとうブラットさん」

「・・・本当に美味しいブラットさん、ありがとうございます」

龍也は、本当に美味しいのかお礼を言ってすぐにガツガツと食べている。

瑞希は、ちゃんとお礼を言ってゆっくりと食べ始めた。

3人が食べ終わるとブラットが話し始めた。

「お前達は、行くところが無いんだよなそれなら俺と付いて来いよ合わせたい人がいるしある程度強くなるまで面倒を見てやるぞ何かの縁だし」

「ほ、本当にいいんですか？」

「ああいいけどだしある程度強くなったら自分達で稼いでもらうかな」

「わかったありがとう僕達の色々な面倒を見てもらって」

「どつってことないさもう夜遅いから詳しくは、明日話そう」

「わっかた」

「了解」

ブラットは、そう言つと僕達に部屋のベットを無理やり進め自分はソファで寝始めた。2人は、頑固と動かないところに諦めて寝に行った。

「おやすみブラットさん」

「おやすみ〜」

「ああ、お前らおやすみ」

ブラットにおやすみを言った2人は、すぐさまベットに潜り夢の世界に旅立った。

第五話：説明

太陽が昇り町の人達が起きだし町が動きだす時間

瑞希は、外が活気だしたのと隣の部屋から匂う美味しそうな香りに釣られて目覚めた。

（ここ何所だっけ・・・）とまだ寝惚けた頭で考えていて少し冷たい空気を肺一杯に吸い込んだ。そのおかげで眠気も吹っ飛び頭も覚醒した。

（ああ、昨日ブラットさんに助けてもらってそのまま宿の部屋を遣わせてもらったんだ）と思考の海に浸っていると・・・

グウウウウウウウウウ

瑞希の腹の蟲が「腹減った」と主張している。

（とりあえず隣へ行ってご飯を食べさせてもらおう）と思い隣に続くドアを開けた。

ギイイイイイイ

と今にも壊れそうな音を上げて開いた。最初に目についたのは、美味しそうな湯気と匂いさせている朝食それをゆっくり食べている鳥人間ことブラットだった。

「おー！今日は、早いじゃねえかミスキ」

「おはようございます、ブラットさん」

豪快に挨拶したてきているブラットは、この宿まで瑞希を運んで来てくれた命の恩人だ。

ブラットの性格は、短い間しか接していないけどかなり豪快で浸し見やすくていざって時は、頼りになりそうそんな空気まっとうしている。そんな挨拶を交わしていると龍也が起きて来た。

「おはよう〜」

目を擦りながら眠たそうに龍也は、挨拶をしていた。

「おう、おはようさん2人とも、さっさと顔洗ってきて飯食おうぜ」

「「はい」」

瑞希と龍也は、ノロノロと洗面所に行き顔を洗って朝食摂るために席に着いた。それから3人は、朝食を食べ、それが終わるとブラットが瑞希達にこの世界ブラット達住む世界や魔法のこと大まかな歴史ブラット自身のことなどなど語ることにした。

「お前達にまず俺自身のことや魔法、人間との関係を話さなくてはならないな」

「え!!!この世界にも人間が居るの?」

瑞希は、驚いたように聞き返し、龍也は、難しいことは瑞希に任じて自分は、黙って話を聞くことに徹している。

「まあ落ち着けこれから順を追って説明するから!!!」

「むう〜分かった」

少し不満があるのか納得したよなしてないような顔でとりあえず真

剣な顔になってブラットの話を耳を傾ける。

「まずこの世界には、おおまかに分けて二つの種族がそれぞれ住んでいるその種族って言うのは、俺みたいな魔族とお前達みたいな外見をした人族ひとぞくがいる、で俺は魔族の中の鳥族たかの鷹型の魔族なんだここまでは、分かったか？」

2人は、うなずいた。

「よし、じゃあさらに進めるぞ俺達魔族と人族よおする人間はそれぞれ存在を懸けた戦いを昔から続けているんだが魔族の中にもお前達みたいな外見をした奴や擬態する奴らがいるだがくつきりと魔人と別れているだが人みたいな外見をした魔族をどう分けているかというところまで魔法がでてくる魔法には、それぞれ触媒型と詠唱型の二種類がある、で人間は、体内に魔力が有るか無いか有ったとしても体内魔力を操作できないから触媒となるもので魔力を得たりコントロールしたりしているその一方は、魔族は、魔力量には個人差があるが全員魔力を持っていてそのまま魔力をコントロールができるがその反面なぜか触媒を使った魔法は出来なくて出来るのはせいぜい魔力量の底上げしか出来ないそういうので魔か人かを分けている、でここまで説明したが何か質問とかないか？」

瑞希は、昨日ブラットが言っていた魔法の属性について聞こうと口をひらいた。

「昨日言ってた属性って何ですか？」

「ああ、属性ていうのはな読んで字のごとく体内魔力の色だな、色っていうのはな属性で5大元素の火、水、地、雷、風ともはや伝説になった光と闇があるあと付け足すなら属性は、大抵1人に付き一

色もしくはは、二色が限界だまあ二色もあれば天才だなそれと大抵二色有る奴は普通より魔力量が多い瑞希の場合は、七色だから化け物並みに魔力が有ると思うぞ」

「へ〜瑞希って魔法の才能が有ったんだな」

そこで龍也が称賛の声を挙げた。

「瑞希は、確かに魔法の才能が有るが魔法を使った事がないから魔法変換率はかなり高い俺は、魔法の専門家ではないから詳しいことが分からないがたぶん修行をして魔法を沢山使えば効率も良くなると思う」

「そうな何ですかじゃあやっぱり魔法が使えたほうが便利何ですか？」

「そりゃそうさ魔法が使えれば襲われた時に何かと対象できるし旅とかするのに何かと便利だ」

そうブラットは答えた。

「まあ、目的地に着くまでは、俺がもつと詳しく教えてやるから気にするな」

瑞希と龍也は、魔法のことと魔族と人間とのことは、ある程度理解した。そこまで話とブラットが真剣な顔になった。

「こつから話ことは、余り瑞希には、いい話じゃ無いんだがこの世界の一般常識だから話てな、たまに人間と人間の間で詠唱型が産まれるんだがそれを”異端児”と呼んでいる魔族からして観ればその

言葉は、礼儀知らずの戯け者扱いされるから禁句扱いされているあと詠唱型の人間は、同じ人間から魔族だと言われその子供と産んだ両親は、人間の裏切り者され例外なく例え王族だとしても皆殺されそれをかくまった者も一緒に殺される魔族は、殺すまではいかないが余りいい扱いはされない時には、俺見たいな例外があるがほとんどが煙たがっているだからもう魔族として生きるしか無いから余り自分は、人間だと言わないほうがいい」

瑞希は、疑問に思った魔法を使わなければいいのではと質問した。

「確かに魔法を使わなければ魔族としてバレないが国境さかいに有る検問所とかで魔法が触媒を使つてだせるかとか抜き打ちで村や町、都市とか普通にやるし最初は、交わしてもそのうち捕まって公開処刑になるかその場で殺されるかのどっちかだ」

「なら魔法が使えない奴はどうしているんだ？」

瑞希は疑問に思ったことを素直に聞いた。

「魔法は、もう日常生活に無くてはならない存在で火は、釜戸かまどに火を付けたりするし水は、飲み水を簡単に貯めたり地は、土を掘るのに使うし風は、船の帆に風を送つたり雷は、魚をシヨック死させて大量に捕つたりなど日常生活に無くてはならない存在なんだ、だから物心憑く前から魔法を教えるし魔法が使えなくても問答無用で殺されるから魔族が人間に混じって生活するのは、無理なんだ」

「へえ〜そうなんだじゃあ何で人は、触媒が無いと魔法が使えないの？」

「それは、うまく解つて無いんだある奴は、魂の違いや体の違いと

か人と魔族は、元は同じで進化の仮定で変わったとか言う奴らが居るが実際問題何も解つとらん」

それを聞くと瑞希は、下を向いてブツブツと言って何かを考えており考えがまとまったらアイコンタクトで

「次話していいよ」と送りそれにきずいたブラットは、次の話に移った。

「でだだいたいの話は、したから次の旅について話すな」

「うん、解つた」

それを聞いてブラットとは旅の目的地ちとだいたいの道のりを話始めた。

「まず目的地は、お前達に話ても解らないからいいとして道のりは、だいたい早くてたぶん五日位は、掛かるこの町から3つ先の町辺りだからな旅支度たびじたくは、きちんとしないとあと旅の途中で修行しながら行くからなお前達の格好は、周りから見たら目立つから服も変えるぞあと少ししたら買い物行くから準備しとけつてするもん無いかじやあ今から買い物行くから着いてこい」

ブラットは、2人にそう言ってそそくさを足早に部屋を後にした。

瑞希と龍也は、その後を着いて部屋をでていった。

店の扉がいきよいよく開いた。

「2人とも服選び終わったか？おう！！リュウヤ似合ってるじゃねえかミズキは、じゃかん服に着られているがもう少し大人びたら似合うんじゃないか」

店の扉を開けたとたんに豪快に瑞希と龍也の服の感想を述べて2人に「店を出る」と言っさつさと出ていった。

後ろでは、そんな光景に呆気にとられまた目をぱちくりさせていた瑞希達3人が店を出た時に出ていったことにきずき

「ありがとうございます」と大声で言っていた。

店を後にした3人は、この世界の商店街の大道りを歩いていたブラットからは、何も言われずただ前を歩いて行っているのだが2人は、初めて見る異世界の商店街だから食い入る様に見ていた。

それを見たブラットは、そんな2人を邪魔しないためにあえて黙って歩いていた。

この商店街は、余りこの世界では、大きくないだがこの町の中心部に向かって続いているからかなり賑やかになっているそれぞれの左右の道側には、店が建ち並んでいた。

例えば肉屋や魚屋、先ほどと違う服屋、武器が沢山並ぶ武器屋や旅の疲れを癒す宿屋だったり沢山並んでいるある程度歩いて行くとブラットが横道に入り賑やかな商店街とはおさばらをした。横道に入ると先ほどの賑やかさは、なく唯ジメジメした道が続いていた。

瑞希は、少し不安な顔していた。龍也は、こんな道慣れていると顔をしている。ブラットは、進みながらこれから行く所を話し出した。

「これが行く所はな、俺がこの町に来るときの馴染みの店なんだ」

そう話出したが瑞希は、何でわざわざ大道りから離れてこんなジメジメした横道を歩かないといけないのかそこを疑問に思

って口を開こうとしたらそれより早くブラットが口を開いた。

「わざわざこんな横道を使って馴染みの店に向かうかという余り知られてないが安くていい武器、防具が手に入るからだあとお前達の武器や防具が必要だろ」

「それは、解るんだがなぜすぐに武器、防具が要るんだそんなんそこらへんで売ってる安物でいいんじゃないんですか僕達は修行からだろうしあとまだ武器を買うは、解るんだけど何故防具までいるんですか？」

「それはだなくまず理由は、二つあるまず一つ目は、もしもの不測の事態があつたら防具があるのと無いのでは生存確率が変わってくるだからいい奴を装備すれば軽くて丈夫な防具だから機動性と防御性が上がるそしたらまだまだ生存率があがる二つ目は、昨日は、説明していなかったんだが野生の魔獣または、モンスターのことだそこら辺に野宿することは、旅をすれば誰でも一回は味わうんだがその野宿途中飯を作った時なんかはよく襲われるそれから対処するためだ」

「武器や防具を買う理由は、解つただけで魔獣と魔族のとの違いはなんなんだ？」

「まず魔族は、人型に近いまたは擬態それなりの知恵、文化、言葉などが発展した奴ら要するに簡単いうと魔物から進化したした魔物で魔物今は、ほとんどがモンスターと呼ばれる野性で知識や文化を持たない本能だけで生きている奴らをさす、モンスターは、それぞれランクがあつて弱い奴、要するに家畜やペットなど子供も出も簡単に倒せるFクラス、大人でもてこずるEクラス、ここまでが下級モンスターは、村や集落で対処できる、でこっから討伐依頼が来

る新前ハンターが一人で狩れるCランク、中級ハンターが一人で狩れるDランク、ここまでが中級モンスターで上級ハンターが一人で狩れるBクラス、上級ハンターが二〜四人でかれるAクラス、ここまでが上級モンスターでよく依頼されるのはC〜BクラスでAクラスは、たまに依頼されるでこの上の特上級モンスター小さなは町を一日以内に一匹で壊せる奴らで国の正規軍の中隊でぎりぎり倒せる特Aクラス、大隊でぎりぎり倒せるSクラス、旅団隊でぎりぎり倒せる特Sクラスで数十年に一回は、でてくるここまでが国一つで対処できるレベルでここからが数十各国足並みそろえる位ヤバイ国が一つ滅ぶまで力を持った特殊災害古代魔獣固体指定がいらそいつは、地方では神獣とか呼ばれていて千年に一度何かやって暴れだすか姿をただ観れるかのどちらかだ、だが滅多に暴れだしたりしないらしい魔獣だから知恵があるとかで」

ブラットは、魔物ことを詳しく話してくれた。

「ねえ何で特殊災害古代魔獣固体指定で固体で魔獣なの？」

「固体や魔獣なのは、わからんが種ではなく固体固体で生きているからとか言われている」

「へえ〜そうなんだ」

瑞希が声を上げながら納得しているとまたブラットが話し出した。

「ミズキとリュウヤが倒した一角狼はCでギガントは、Bだったんだぞちなみに俺のハンターランクは、上級クラスだぞ」

ブラットは瑞希が倒したギガントと龍也がほとんど倒した一角狼（角が生えた狼）のモンスターランクを教えてくれた。瑞希は、その

話を聞いていて気になることをブラットに訊いた。

「さっきから出て来るハンターってやってることは、大体解るんだけどその仕組みや討伐以外の依頼は無いの？」

「ハンターの仕組みは、まずハンターギルドの試験。規定の強さがあるか試される規定以下だといくらハンターになったとしても死ぬだけ迷惑、受かったとしても素行が悪いと資格の剥奪されるしハンターランクが低いといい依頼に在りつけないランクより高いと死ぬ可能性が出てくるから、ハンターランクは、三つあつて上から俺が居るクラスの上級、中級、新前と大きく分ければこんなもんで依頼は討伐以外に捕獲がある捕獲するのは食用だったり乗り物に使うたりするでモンスターはB、Cが軍が乗り物や戦闘に使う」

「モンスターも意外と倒すだけじゃないんだな」

龍也が今の話を聞いて話していた。そんなこんなを話していると目的地のブラット御用達の店へ入っていた。奥には店員がいてブラットはそのまま店員と話して「自分に合いそうな武器を選んで防具は、奥」の棚たらサイズ合う奴を選んでおけ」と言つて店員と奥に続く廊下へと消えていった。しばらくして瑞希は、軽くて丈夫そうなの飾りも無く少し長めの両刃剣で防具は、軽く機動性と通気性を重視した。龍也は長い片刃の西洋剣であと短いナイフを数本で防具なしだった。ブラットが奥から腰に巻くポーチと外套を持ってきた。

「この鞆は、魔法アイテムで物をたくさんつめても大丈夫な造りになってるから今買った奴と服を入れてまた大道りに出るぞ」

ブラット御用達の武器屋を跡にして大道りに戻り三人が入れるテン

トや三人分の十日分の食料、魔物避けの石など旅に必要な物買っていった。

買い物が終わって瑞希は、先ほど買った防具と剣を腰に携え、龍也も腰に剣、懐に数本のナイフといったスタイルでブラットと町の出口に向かった。出口に近くなると三人とも外套を被り目的地に向かい町を出て行った。

第七話：旅の始まりとブラットとの闘い

町を出て少したつて振り替えると町は、見えなくなっていた。それから二時間ぐらいたつて旅立って初めてのキャンプ場だった。

「この場所はな旅人や商人が魔物から身を守るために出来たんだ一人であるより沢山の奴らと居た方が安全と理由でなこれが出るまでは、夜寝ないで商人は、進んで行かんと駄目だしそのため高額でハンターに護衛頼まなければならぬからなで、商人が同じ道を使う旅人とかに話を持ち込み資金を集め実現させたつてわけだ」

ブラットは、赤裸々に語っていた。まだ陽が出ているがテントを張ることにした。周りには、瑞希達以外に商人の荷馬車が二つと旅人が使うテントが五つあった。

瑞希達のテントは、馬車のすぐ近くに張った。張り終わったらブラットが瑞希と龍也を呼んだ。

「今からお前達に特訓する」

「ブラットさん俺達どんな特訓をするんだ」

「それはな、まず二人がどれだけ使えるかを試してから決める」

ブラットは、そう言い瑞希達を連れてキャンプ場から少し離れている草原へと出た。

「お前らはまず町で買った武器で俺を殺す勢いで斬りかかってこいまあ、心配はいらないから素人に斬り殺されるほど俺も落ちぶれていないだから遠慮するな」

瑞希は、戸惑っている顔している。

（ホントに斬りかかっているのか？でもブラットさんは、ああ言っているしとりあえず思いつきりやる）と考えいた。

龍也は、少し真剣な顔と怒った顔が混じりあつた顔をしている。

（確かに実力を測るには、ある程度刃を交えるの一番だが・・・
ブラットさんは完全に俺をなめているあの時の闘いを視ていたなら
剣を抜く素振りを見せてもいいはずだそれに俺達の連携がいいのは
しっているはず

クソ！！完全になめているか自分の実力自信があるからだななめているならその剣を抜かしてやる）と意気込みをしていた。

「よし、準備できたか？」

「ああ、できた」

「こつちもできました」

「じゃあ始めるか！！」

ブラットのその一言で瑞希と龍也の力試しは、始まった。

最初に反応したのは、龍也だった。

普通の人より速いスピードで間合いをつめそこからのスピードに乗った抜刀をした。

だがヒラリと間合いの外側に逃げられた。龍也は、それから直ぐに

切り返し横に一閃、真上からの体重が乗った垂直下げ、下からの切り上げ、最後にスピードと体重を乗せ肩幅と片腕により間合いが延びた渾身の突き、だがブラットは、通常ならすでに死んでいるはずの攻撃を防御するのではなくすべて避けた。

（なかなか遣るな身体を魔法とかで強化されていたら今頃ふか深傷を負っていたかもしれない舐めてかかりすぎたかもしれをな）と龍也の評価を上げた。

龍也は、

（全部避けられた！？ば、ばかなありえね〜さすがに剣を抜くかと思っただのに俺とどれだけの差が有るんだよ・・・クソ！！）更に気合いを入れた。

瑞希は、そんな攻防をただただ見詰めていた。

（すごい・・・こんな攻防初めて見た凄すぎる！！だけどブラットさんは、龍也の連閃を全部避けているこんな鬨に僕が入っていいのかな？）と立ち尽くしていた。さっきと同じ様に龍也は、攻撃を繰り返していたがいつこうに当たらないのでブラットと距離を置いて瑞希の近くに来て小声で話し掛けていた。

そんな二人を観ていたブラットは、
（何か二人で仕掛けて来るな、さてどんな連携技を見せてくれるかな？）と考えながら二人を観ていた。

すると龍也は、話し合いが終わったらしく瑞希に何か確認を取るとまたブラットに向かって攻撃を仕掛けてきた。

最初の攻撃と違い肩や足など機動力を中心的に狙って来ていた。

肩を狙った突きからの刃の向きを変えた足を狙った切り下げなどの速さを重視した攻撃になっていた。

余り横に避ける暇を与えず剣を抜かせる暇も与えないそんな攻撃が続いた。

だが何故か後ろに避けやすかったので疑問に思ったブラットだったが直ぐに打開策有るわけでは、なかったので余り気にしなかった。少し長く連続攻撃をしている龍也には、疲労と焦りの色が顔に始

めていた。

ブラットは少し剣のスピードがおちたのにきずいてそろそろ龍也との距離を取ろうとしたら不意に龍也が笑っていた。静かに音なく笑っていてブラットは、何が可笑しいのか分からなかった。するとすぐ後ろに瑞希がいてブラットに向かって剣を振り下ろしていた。

ブラットは、間髪を容れずそれを避けて二人と距離を取った。

（やべ〜！！後少しきずくの遅かったら殺られてた〜！！それにリユウヤは、疲れたフリとかマジで騙された！！）と少し思い腰にある剣を（鞘着き）で抜いた。

（今も避けるか凄いなでも目標の剣を抜かせたからいいかやつとこつからが本番だな）と龍也は、意気込みをしている。

（凄すぎ今のどうやって避けたの！？しかも剣構えだしちゃったし！！）と焦っている瑞希がいた。それから先ほどと同じように瑞希と龍也の連携技をブラットは、剣で防いだり避けたりしていた。そんな攻防が続いていた。

それから一時間後・・・

瑞希は、疲れて倒れており龍也にもさすがに疲れ色が顔に出始めていた。

さらにそれから三十分後・・・

龍也も疲れて倒れていた。そんな二人を見てブラットが飲み物を二人に持って二人に渡すと喋りだした。

「二人ともご苦労様だいたいの実力は、わかったただが気なることがあるリュウヤは、何か剣術でも習っていたのか？」

「ああ、俺のいた世界の剣術だ他にも体術も身につけているがいかせん武器の形が違うから少しやりにくかった。」

「ほぐだから決めの際にフンテンポ遅れるわけだなら旅の途中に腕のいい鍛冶屋を知っているからその時に作ってもらえる様に頼んでやる」

「マジでありがとうブラットさん」

「おう、でだミズキは、体力が少しないから当分は、体力作りだ後他の街に魔術と魔法が得意な奴がいるからそいつにお前の魔法の特訓をもらおうリュウヤは、魔法の身体強化を教えてやる」

ブラットは、これからの話を軽く話三人でテントまで戻って行った。夜は、ブラットが作った早い晩御飯を食べた。明日は、朝早くから出発するから早めに寝ることにした。

第八話：武器都と鍛冶師と魔術師と

話は、とんで力試しから二日が経過していた。特に何もなく街に着いた。そして何もなかったかのように一夜を過ごして街を出た。

「次による街は、武器や防具が盛んに作られている街なんだからリュウヤの武器をそこで作ってもらおうかな」

「わかったけどかなり時間がかかるけどいいのか？」

「それは、大丈夫だ！この街の名前は、武器都グランデイスと呼ばれているなぜ武器と呼ばれるのはそのままの武器や防具作りが盛んなのと良質な鉄など鉱物が沢山とれるとかあるが一番の理由は、モンスターが沢山出るからなんだだから金が無くなりそうになったらモンスターを討伐して稼げばいいから心配するな」

ブラットにそう言われて歩くこと三日やはり何もこれと言った出来事も無くあつてもCクラス程度の角狼で今までの特訓成果で楽勝とはいえないが倒せるレベルまで上がっていた。

龍也は楽勝と言った感じだった。

そんなこんなで武器都グランデイスに到着した。ブラットに聞いた通り武器屋の数が凄かった。

「まず宿を取ってからそれからリュウヤの武器作りのための鍛冶屋に行つてリュウヤは、そのまま残つてミズキは、俺について来い」

「ブラットさんなんで僕は、ブラットさんに付いて行かないといけないの」

「それはだな。今までは、お前達に肉弾戦の戦い方や身体強化の魔法などしか教えてないんだリュウヤは、いいとしてミズキは、魔法の才能がある魔法なしでこれからっていこうと思えば出来るがリュウヤみたいに剣術の才能が有るわけではないからこれからのことを考えると覚えてて損は、無いんだからこの辺拠点に活動どうしている魔術師が居るからそいつに当分魔法を教えてもらおうと思ってるから」

瑞希は、返事をして宿に向かい宿に荷物を置いてそれから鍛冶屋に行った。

「おい！！バルドいるか」

ブラットが鍛冶屋に入って大きな声を上げたら中から背が小さいこつ男がでて来た。

「そんな大きい声出さんでも解るわ！！ブラット・コーラス」

「久し振りだなバルド」

「ああ、三年前じゃったか最後に会ったのはそれで何のようだまた剣を折ったとか言うんじゃないんだろっな？」

「ちがうちがう！！俺じゃないこいつの武器を作ってもらおうと思っただな」

「おお、きずかんかったワシの名前は、バルド・グラドンという見ての通りドワーフ族じゃ恩お主等の名前は何じゃ？」

「始めまして僕の名前は瑞希です種族は、……………たぶん人

「はあ〜そんなんオレのかつて・・・だ・・・ろ？」

「久し振りだなマルチダ」

「おお！！ブラット久し振りじゃないか」

酒を飲んで居たのは、マルチダと呼ばれた女の人だった。外見は、人形で髪が長く色は、金色で背が高くかなりの美人だが耳が尖っていることを除けば・・・

「で、そのカワイイお嬢ちゃんは、だ

「僕は、男だー」・・・お、おおすまないまさか男だとは、思わなかった」

瑞希がいきなり大きな声を出して怒っているのでマルチダは、目を丸くして謝った。

「すまないな、マルチダこいつは、外見が女ぽっいせいでよく女に間違われるからそれが嫌らしい」

「にしても男とは、最初は、ブラットが女を拐ってきたか結婚するかと思っただわ」

ニヤニヤしながらマルチダは、話していた。

「オレの名前は、マルチダ・ファーウエンよろしくなでお前さんの名前は？」

「こちらこよろしくさっきは、すみません怒鳴ってしまって僕の名前は、ミズキです」

「あれは、オレが悪かったから謝らなくていいでも男ね〜はつきり見えないわ」

マルチダにそう言われて膨れた瑞希を見ながら笑うブラットとマルチダ笑い終わったらブラットがマルチダに話し掛けた。

「くだらない話は、これぐらいにして頼みたいことがあるんだ」

「何だ、また一緒に任務を手伝ってくれって言っくんじゃないだろうねあなたの任務は、報酬と釣り合わないからやらないからな」

瑞希は、昔ブラットとマルチダの間に何があつたか少し気になつたがあえて気にしないことにした。

「ああ、そんなこともあつたなああの時は、あれほど危険だとは、思わんかつたんだ」

「何が思わんかつただ！まさか特A級モンスターと戦つて足止めしろなんて普通二人では、しないんだぞ！！後ちよつと援軍が遅かつたら今頃墓の中だつたんだ！！」

「だからあの時は、悪かつたつてまさか特A級モンスターだとは思わんかつたんだつてたかが盗賊討伐位にしか思わなかつたんだもし特A級を相手だとちゃんと聞いていたらもつと人集めてたわ」

「ああもういいあの時のお蔭で依頼が増えたと報酬も沢山もらったから少しは、水に流すよでだ依頼以外で頼みたいことがあるらしいけど何なんだ？」

昔話は、マルチダによって無理やり終わり話の本題に入った。

「ああ、忘れてたこいつにいやミズキ魔術を教えてやってくれないか俺じゃあ教えられないから」

「ほう、それは、任務の依頼か？」

「いや友として戦友としての頼みだ、別にこき使ってもいい死なない程度でやらないとここに居る内に使い者にならないからな」

「ふんわかった友として受けようただし才能が無かったら魔術は、教えないし逃げたら地獄の果てまで追いかけて教えてやる覚悟しろよミズキ！」

「は、はいお願いします！」

「よし、それじゃあブラット、ミズキが使える魔術と知識がどれくらいあるのか教えてくれ」

「ああ、ミズキが使える魔術は、身体強化系の魔術で知識は、魔族と人の違いと一般常識位なら知っている」

「はあ、それじゃあ素人と同じレベルじゃねえかマジで死ぬ気でやらないとミズキお前地獄を見るぞ……まあ、まずは、ミズキの潜在魔力量と魔力の色を調べるか」

マルチダがそう言いミズキの頭に手をのせて

「じつとしろよ」と言われた。するとマルチダの手が光出していき最後は、体から何か抜かれた感じがあった。

「ほう、かなり凄いのを拾って来たなブラット、ミズキの魔力量は、今のオレより多いし魔力の色は、八色きたか失われた闇と光伝説上の時とは、教えるのが楽しみだ」

「だろこんなにもあるとお前が凡人になるな」

「確かに自信なくすが潜在能力が高くて魔術の才能は、わからないぞ」

「それもそうだな」

「ああ、ところでミズキ魔術の修行は、明日からだから今日は、酒を飲んで行きな」

マルチダがそう言いお酒を頼んでいたブラットは、遠慮しないで軽く飲んでいった。ブラットの昔話を聞いたりしていたらいつのまにか陽が落ちておりマルチダと別れを言い酒場をブラットと一緒に出ていった。

途中龍也が居る鍛冶屋に行き龍也を拾って宿屋まで帰った。宿に着いたら晩御飯を食べみんな寝る頃になったらブラットが話し掛けてきた。

「リュウヤいい武器は、できそうか？」

「ああ、いい武器ができそうだがかなり時間がかかる」

「それは、心配なくていいからいい武器作ってもらえ」

「ありがとうブラットさん」

その後他愛もない会話をして今日一日が終わっていくのであった。

第九話：魔術と料理

武器都グランデイスに入ってから二日目の朝瑞希は、いつものように朝食を食べ終わっていた。

（今日から魔法の特訓か）と思っていた。するとブラットが

「そろそろ行くぞ」と言い宿を出って行った。

昨日と同じようにまず鍛冶屋によって、それからマルチダの所へ行った。昨日と違いちゃんとした家に着いた。ブラットは、家のドアを叩いた。すると直ぐにマルチダが出てきた。

「おはようブラット、ミズキ」

「よう、マルチダ」

「おはようございますマルチダさん」

「二人ともこんな所に立ってないで家に上がったら？」

マルチダは、瑞希達にそう言い家の中に入るよいにすすめてきた。

「いや、俺は、いいやらなきゃいかんことがあるからな」

「ふんそうじゃあ仕方無いなそれじゃあまたな・・・あ！！忘れてたブラット！ミズキは、家で当分住み込みで魔術教えるから迎えに来んくっていいぞ」

ブラットは、片手を上げ走って去って行った。

（可哀想に色んな意味で地獄を観るな、かんばれよミズキ！！生き返って・・・くる・・・かな？）と考えていた。

瑞希は、ブラットが去って行ってから直ぐにマルチダの家へ入った。マルチダの家は、汚い部屋と綺麗な部屋があった瑞希がマルチダに案内されて来た部屋は、書庫みたいな部屋で本棚が三つほどあるがそれに収まらない本が山のようにある部屋だった。

「すまんなもつと綺麗な部屋も在るんだが魔術を語るならこの部屋が一番いいんでな」

「まさか此所に有る本って全部魔術の本なんですか？」

「全部が全部魔術の本って訳ではないがほとんどが魔術に関する本だ」

マルチダは、そう説明し部屋を出て行った。少し待ったら飲み物を持って来てくれた。持って来て貰った飲み物を飲むと紅茶みたいな味がした。後で知ることになるのだがあの紅茶は、サクカと言う植物の葉からできた飲み物らしいハーブティーみたいな物だと思えばいい。

少し飲んだらマルチダが話始めた。

「まずは、魔術の色については、知っているよな？」

瑞希は、黙ってうなずいた。マルチダは、それを見て話し出した。

「色は、一般的に使われているのは、火、水、雷、土、風が使われているお前は、その五色と光、闇、時を持っている普通だったら異端者だが戦って生きたりするのは、便利だな次は、魔族間の魔術の種類だが三つある一つ目は、詠唱魔術二つ目は、具現化魔術三つ目は、精霊魔術と行った感じた詠唱は、魔族なら誰でもできるが具現化魔術は、訓練しないと上手く行かないから魔術師なら誰でも出来るまで最後の精霊魔術は、普通魔族だったら精霊と契約して初めて使えるだが例外もいるオレみたいなエルフやハイエルフだったら精霊と無条件で対話出来るから契約なしで精霊魔術を使えるでも精霊魔術を使えるのは、エルフ以外は、高位魔術師でも一握りしかない何故一握りしかないかと言うと魔力量が多くないと精霊を呼び出せないからだ精霊は、精界せいがいから呼び出す者なんだ精界は、この世界と重なっているもう一つの世界で次元が違うから普段は、見えないが大量の魔力を使って存在を一時保つためだ後は、精霊は、魔力が意思を持った者だから大部分の魔力は、精霊が出してくれるから後は、少しの魔力で精霊にどんなことをやって貰いたいか指示するだけだから出したら後は、普通に魔術をやるよりは、魔力を使う量は、少なくなるだが精霊魔術は、存在固定に時間がかかるからその際に殺られる場合があるあと精霊は、火、水、雷、土、風と自然型だから光、闇、時は、精霊魔術では出せないからその三色は、特別なんだ次に具現化魔術を詳しく説明すると頭の中で考えたこと想像したことがそのまま魔術として使える魔術だ例えば火色くわくの奴が頭の中で薪に火を付けたこと想像しその想像に魔力を流して実現化するのが具現化魔術でも此にも欠点がある臨機応変に考えたこと想像したことがそのままできるが上手く出来なかつたり馴れないと頭に負担がかかって頭痛がしたり倒れたり死んだりするし馴れていても想像中に邪魔されたら魔術を発動出来ないことがあるあと想像が鮮

明なほど威力が上がリ曖昧だと失敗や威力が落ちたりする最後に詠唱魔術は、詠唱魔術の中もう一つの無詠唱魔術がある無詠唱に出来る出来ない術がある出来るのは、身体強化系と低級魔術でそれ以上の中級、上級魔術は、短縮化までしか出来ない詠唱を発動させるには、スペルを唱えないと出来ない欠点は、発動まで早いと威力が無いのが問題で強い魔術を発動しようとするとはやはりスペルが長く唱えなきゃいけないから遅くなる具現化にもスペルみたいな奴があるがあれは、スペルでは無く想像しやすいようにするための補助だとりあえず魔術の種類は、ここまで次は、魔力についてだか昼しよう」

マルチダは、そう言い瑞希を連れて外に食べに行った。

昼食は、マルチダにブラットとどうやって知り合ったかとか旅の話やマルチダとブラットの昔話を聴いてゆっくり過ごしたあとまたマルチダの家に帰りまた書庫みたいな部屋にいき魔力について話始めた。

「魔力についてだが魔力は、体内に有る時と体外に有る時では、魔力質が違う体内に有る時は体外と違って魔力は、色は有るが体内で使うと個人差無く全てが身体強化しか出来ない体外で使うと色の種類で分かれる魔力は、体内だと色は、有るが使うと身体強化出来るでも体外だと色が出てしまって火色だと炎が出てしまうその特徴を生かして同じ色同士が魔力を吸って回復したり魔力の色や容量を正確に知るために魔力を吸う場合があるその魔法をドレインとサーチと言うこれは、低級魔術だからすぐ覚えられる……」

それから沢山の話をした。光と闇は、昔は、その色を持っていた人は居たが光と闇は、扱いが難しくよく暴走してそのたびに死んでいったそして光と闇の色を持つものは、居なくなつた。

時は、大昔の文献ぶんげんに残されただけで実際に有るか無いかは、解っていないから伝説になつた。

魔力を魔術に変換の効率が悪いと一の魔力を使う魔術を二や三使ってことを教えてもらった。
全てを話終えらるともう陽が落ちていた。

「よし、今日からミズキが家で過ごすから夕飯は、オレガ作るう」

マルチダそう言い夕飯の支度を始めた。

1時間後食卓には、豪華な料理が並んでいた。

「遠慮せずにたんと食べな」

マルチダに言われ瑞希は、料理を一口食べた・・・・・・・・瞬間意識が無くなった。

「あ、あれ何で倒れたんだ？」

マルチダは、瑞希をベットまで運び寝かした。

翌朝

瑞希は、何事も無かったように起きた。

（あれ？何時寝たんだ？・・・あ！思い出した！確かマルチダ

さんの料理を食べてから倒れたんだ……うう！！思い出した
だけで倒れそう……もうマルチダさんに料理を遣らせない様にし
ようこのまま食べ続けたら命がいくつ有ってもたりない（瑞希は、
固く固く心に誓った。

第十話：武器と防具

瑞希がマルチダと話してから数日瑞希は、マルチダの家で魔術の修行をしているそんな時龍也は、バルドと共に武具作りに励んでいた。

「なかなか難しいリユウヤお前さんが言うカタナと言う奴は」

バルドは、そう言いつつも楽しそうに刀作りをしている今作っているのは、試してみたいな物で未だに上手く出来ていない。

「やはり難しいの〜」

「そんなに難しいのか？」

「ああ、どっから持って来たかは、知らないがこの辺では、まず作られないなここの剣は、斬るんじゃなくて叩き切るたり断ち切る物だからな〜なかなか難しいのだ斬ると言う概念が無いからの」

バルドは、そう言いまた刀作りをし始めた。

刀作りは、最初よりは、かなり進んでいる。初めて作った奴は、刀から程遠い物だった。最近は、やっと刀の形になった。だが名刀の域まで達していないから妥協は、出来ないしバルドもリユウヤが満足する物を作ろうとしている。

2日後

試行錯誤の結果やつとのことので出来た試作刀は、思っていたよりいい出来であった。

「いい出来だろこれからちゃんとした素材で作るからさらにいい出来になるぞ」

「ああ、バルドのおっちゃん頼むよ期待して待ってるからさ」

「ああ、期待して待ってるんだな」

そんな会話を交わしバルドは、工房に行き龍也は、

庭でこの世界で初めて・久しぶりに触る刀で嬉しいのか刀を使って自分の家の流派の型を試していた。今まで毎日やっていたがやはり剣と刀では、違うのか剣よりかなりキレの有る動きをしていた。

時間が経つのも忘れていたのか昼食食べに工房から出てきたバルドに話し掛けられまで色々な型をしていた。

「のう、リュウヤお前さんの剣術は、かなり変わっているの〜やはりカタナとか言う剣を基本にした動きでも変だの」

バルドにそう言われ苦笑いをして誤魔化している龍也がいた。

龍也の家の流派は、はつきり言っただけで変わっている剣術を基本にしているが他にも槍術、弓術、暗殺術など他の流派の技を沢山取り入れている。そのため沢山の不可思議の型は、有るがやはり刀が基本なため刀がないと難しく剣では、出来なかった。そのため久しぶりに

色々な型をやってみたくなりやっていたら熱中してしまいバルドが近くに居るのにも気づかなかった。それからバルドと昼食を食べやはりバルドは、すぐに工房に行つてしまい龍也は、また型を繰り返ししていた。陽が落ちていてそろそろ帰る時間になったのでバルドに一言言つて帰ろうと思つて工房に向かった。

「バルドのおっちゃんもう帰るわ」

「・・・・・・・・・・」

バルドは、熱中していて話し掛けても返事がない。

（かなり熱中しているな静かに帰った方が良さそうだ）と考え工房を静かに出ていった。

帰り道は、さすがに何日も歩いてバルドの工房と宿を往復していると迷わなくなった。最初の頃は、道が入り組んでいて迷いそうになったりしたが今では、真つ直ぐ宿まで行ける。

宿に着く時には、すでに陽は、落ちていた。

宿に入り自分達の部屋へ向かったが誰も居なく暗かった。灯を点けてソファアに座つて待っているとブラットが帰つて来た。

「リュウヤ居るのか？居るなら飯食いに行くぞ」

ブラットにそう言われ急いで灯を消してブラットについて行った。

夕飯は、スープとパンと肉料理とサラダを食べた。

食べているとブラットが時々様子を見に行っている瑞希のことを話してきた。

「ミズキは、可哀想だな今頃逝っているかもしれんな」

「逝っているってそんなに辛い修行してるのか？」

「ああ、色んな意味で辛い日々を送っている。」

「ど、どんな修行してるんだ？」

「まゝ修行は、辛いんだけど飯がな不味いあいつが作るのは、あれは、殺人級だ」

「殺人級ってそのマルチダって人の料理を酷く言い過ぎなんじゃないんですか」

「いや、あの料理は、殺人級だ俺も食ったことはあるんだが見た目と味のギャップが凄い旨そうに見えるんだが一口食べたただけで気づいたら次の朝だったんだ他にも食べた奴が居るみたいだが酷い奴は、一週間目を覚まさなかったたり毎夜夢に出てきたりするんだ俺は、もうトラウマになった」

（ブラットさんがトラウマになるなんてどんな味がするんだ？瑞希大丈夫かな？）そんなたわいもない会話をし食べ終わったら部屋に戻りゆっくりしてから寝た。

三週間後

ブラットと龍也は、バルドの工房にいた。

「言われた奴は、全て作ったわ」

バルドがそう言い龍也は、早速武器や防具を確かめていた。

龍也が頼んだ武器は、刀が五本、刃渡りが一・七メートル程の長刀が一本、普通の長さの刀が二本、小太刀と短刀が一本づつ薙刀が一本、棒手裏剣が何百本と大量だった。

防具は、手甲と足甲が二つづつと他には、無く動きやすさ求めた作りになっている。

「にしても凄い量だな変わった武器が沢山あるし防具なんて腕と足しか無いじゃないか」

「こつちの方が動きやすいんだ」

「ふ〜ん、でだバルドいくらするんだ？」

「ま〜、此れだけの量だしな25500リニオンだな」

「25500リニオン!!!バルドそれは、高すぎる値段じゃないのか？」

「バカ言え!!!これ以上安く出来るか!材料費や作るための釜の燃料費だけで20000位したんだぞただでさえ最近は、物価が上がって辛いんだ本当だったら30000位請求したいくらいだわ」

「分かった、払う後で金持ってきて来るから」

ブラットは、そう言い肩を落としてブツブツ言っていた。

ちなみにお金の単位は、リニオンで銅貨一枚で1リニオン、銀貨は、銅貨百枚で一枚、金貨は、銀貨十枚で一枚だった。通常銅貨が30枚程有れば一般家庭は、一週間贅沢な暮らしができるほどのだ。

ブラットは、少し時間がたつとバルドの店を出ていった。龍也は、着いて行くところとしたら手で制され（着いて来なくていい）と言われた感じかしたから着いて行かなかった。

龍也は、バルドから丈夫な皮と布などをタダでもらい何か作り出した。

作っている途中にブラットは、帰ってきてバルドにお金の入った袋を渡していた。渡したら今日は、出掛けないのか椅子に腰掛け一瞬龍也の方を向いて直ぐにバルドの方を向き他愛もない会話をしていた。

三時間後

龍也が作っていた物が一つ出来たので軽い息抜きをしているとブラットが話し掛けてきた。

「リュウヤさつきから作っているのは、何だ？」

「ああ、これがこれはなバルドのおっちゃんが作ってくれた棒手裏剣をしまうためのポーチを作っていたんだいちいちあの袋から取り出すの面倒くさいしさ」

龍也は、そう言い棒手裏剣を先ほど作ったポーチにしまいだした。棒手裏剣は、以外にも沢山入り三十本程入った。以外にも沢山入ったのに感心して龍也は、またポーチを作り出した。

数時間後

先ほどのポーチが全部で三つ程作り他にも薙刀の刃を隠すやつや刀を差すための物などを作っていた。

陽は、落ちていたがそれも気にしないで作業をしていた。最終確認のために手甲と足甲を着け刀を差して抜刀などをして棒手裏剣を手早く出的に投げて使いやすさを確かめていた。

龍也は、少しやったら作業をやめ武器や防具を袋にしまい帰る準備をした。

準備をし終える頃には、ブラットとバルドが話しを止めバルドは、出掛ける準備をしていた。

「おし、飯食いに行くぞ今日は、リュウヤの武器が出来たからその祝いだ」

ブラットがそう言い酒場まで行った。酒場に着いてからは、ブラットとバルドは、酒を頼み飲んでいた。

「お前さんの頼んだカタナや武器は、初めて見る物ばかりで作るのが難しかったわい、でも久しぶりに手応えのある仕事だったの」

バルドは、そう言いながら酒を沢山飲んだ。

ブラットは、そのな会話を静かに聴いていた。

楽しい時間は、あっという間過ぎていきバルドと別れ宿に帰りブラットと龍也は、酒を飲んで沢山騒いだせいで疲れておりベッドに倒れ込むように寝てしまった。

第十一話：エルフの里

龍也の武器が出来る1ヶ月前ほどさかのぼる。

瑞希は、マルチダの殺人料理を食べた次の日の朝マルチダと外で朝食を取ってから街の外にいた。

「今からオレの生まれ故郷に行くから」

「は？・・・」

いきなりそう言いわれマルチダが瑞希の近くに寄って呪文を唱え始めた。

「我は、汝の力を借りる者、我は、汝の隣人で汝と共に歩む友である、汝今ここ現れ我に力を貸し、我の願いを聞き入れたまえ風を操り地を駆ける誇り高き者」

マルチダがそう唱えると空間が歪み歪んだ中から体が白銀の毛で覆われ背から透明がかった緑色の羽を生やした狼が出てきた。

狼出てきたら急に風がマルチダと瑞希の二人を包み込み二人を中に浮かせた。

浮かせた次の瞬間二人は、物凄いスピードで飛んで行った。景色は、流れるようであるで新幹線に乗っている気持ちになった。

数時間後

二人は、森の手前に降りた。

「ありがとう、ロン」

マルチダが礼を言うとロンと呼ばれた銀狼は、霞がかかったと思った

ら霧が晴れるように消えていった。

「ミズキ、今のが精霊でオレに力を貸してくれる人で言う契約精霊だ、精霊は、色んな型をした者もいて人型やさつき見た動物型などの形をした奴がいるんだ」

「そんなんですか」

そんな立ち話をしていた。

「それじゃあ今からこの森に入るぞ、オレから離れないように着いて来ないと道に迷うからな」

マルチダそう言い森の中へ入って行った。瑞希は、いそいでマルチダの後を追うように森の中に入った。

森の中は、木や草がぼうぼうに生えていた。

木は、天にも届かんとしているように高く沢山生えていて木の天辺が見えなくそのあまりにも高い木のせいで太陽の陽射しをさいぎっている。

瑞希は、そのせいで何度も木の根に引っ掛かって転けそうになっている。

「マルチダさん、まだ着かないんですか？」

「もうすぐ着くから」

マルチダは、そう言いつつ結構な距離を歩いている瑞希は、さつき見たような風景ばかりで「道に迷ったのでは？」と思ったがマルチダがどんどん先に進むので言おうにも言えなかった。

そんなこんな考えていると今まで日の光さえ届かなかった森を抜け

て日の光も辺り周り一面を綺麗な緑になっていた。瑞希は、さつきと違う森を見てなんか神秘的な場所だと思っていた。

「もう直ぐオレが住んでいた村が在るから」

マルチダは、そのまま森を歩いていった。三十分程歩いた所に大きな草原が在ってその一角に小規模な村が在った。村に近づくに釣れ話し声や夕飯の準備をしているのかいい匂いが漂ってきた。

村の門の近くまで行くと門の近くに居た武器を持った人が走って近寄ってきた。

「マチルダお帰り今度は、どんなようで帰ってきたんだ」

近寄ってきた人は、近くで見ると男性でマチルダにそう言い帰って来たのを歓迎していた。

「ただいま、久しぶりアイコスちなみに今日寄ったのは、こいつを修行させるためだ」

「ほう、お前が弟子をとるなんどんな心境の変化なんだ？」

「オレだって弟子位とるさただ今まで才能が有る奴に出会えなかっただけだ」

「ふーん、じゃあそいつは、そんなに才能が有るのか」

「ああ、こいつは、凄いぞオレを越える存在だ」

「おいおい、そんな嘘言うなよお前は、この里の”エルフ”で歴代一、二を争う位の才能が有りこの大陸で>エルフの大魔術師<と聞

「かれればお前の名前しか出ない位の有名なお前を超えるなんて無理だろ」

「その嘘が真実なんだ、嘘だと思うならこいつにドレインをやって確かめるといい、ミズキいいよな？」

瑞希は、黙って頷いた。するとアイコスと呼ばれた男は、半信半疑の顔をして瑞希の頭に手をのせてきた。のせた手は、鈍い光を発すると半信半疑だった顔が真剣な顔に変わった。

「これは！！驚いたまさかお前の魔力量を超えているなんてそれに属性が基本五色と他三色と来たか凄いなマジでこんな拾い物何処で見つけて来たんだ？」

「戦友からの頼みでな最初は、適当にやるか才能が無かったら断る気でいたんだがまさかオレ以上の才能が有るじゃないのかそしたらこいつを自分の手で育てやりたくなってな」

「まゝなんともお前らしい理由だなそれ、じゃあ始めまして俺の名前は、アイコス・プルティオールって言うんだよろしくな気軽にプルと呼んでくれこの村では、村でそう呼ばれているから」

「はい、こちらこそよろしくお願いします、僕の名前は、ミズキ・ヤグラと言います僕も気軽にミズキと呼んでください」

「ああ、分かったミズキ」

瑞希とアイコスは、握手をした。アイコスは、瑞希と握手を交わしたらまたマルチダに話し掛けた。

「事情は、分かったからミズキと中入って長老達に挨拶をしてこい

皆お前が帰って来たなら喜ぶぞ」

「ん、分かったじゃあ先行ってるわ、また後でなアイコス」

「じゃあな、ミズキもまた後で」

「さようならプル」

マルチダと瑞希は、村の門を越えたら村人達が近寄って来た。村人達は、マルチダが帰って来たのを喜んでいた。瑞希は、村人達にもみくちやにされていた。

マルチダと瑞希は、もみくちやにされながらも難とか目的地にたどり着いた。瑞希とアイコスは、握手をした。アイコスは、瑞希と握手を交わしたらまたマルチダに話し掛けた。

「事情は、分かったからミズキと中入って長老達に挨拶をしてこい皆お前が帰って来たなら喜ぶぞ」

「ん、分かったじゃあ先行ってるわ、また後でなアイコス」

「じゃあな、ミズキもまた後で」

「さようならプル」

マルチダと瑞希は、村の門を越えたら村人達が近寄って来た。村人達は、マルチダが帰って来たのを喜んでいた。瑞希は、村人達にもみくちやにされていた。

マルチダと瑞希は、もみくちやにされながらも難とか目的地にたどり着いた。目的地は、この村の長老の家らしいけど他の家と余り違いがなく普通の石造りの家だった。

マルチダその家のドアを乱暴にノック？した。

「そんな乱暴にドアを殴るな！！普通に叩かんかドアが壊れる開いとるから勝手に入れ」

家の中の人にそう言われマルチダは、ドア開け家の中に入って行った。

「長老お久しぶりです」

「何だか外が騒がしいと思ったらお前が帰って来たのかマルチダで後ろに居る其奴は、何だ？」

「オレの弟子だ、だが魔術初心者で直ぐにある程度使える様にしないといけないからここに連れてきた」

マルチダが長老と呼んだ人に瑞希との関係を説明した。アイコスはマルチダと同じ髪の色で顔は、整ってはつきり言って美形だった歳は、マルチダと同じ位に見えた。長老は、髪が短く髪の色は、銀色で見た目は、五十歳半ば位に見える。

「とりあえず……歓迎会の準備だな久しぶりの外界人だ皆お前やお前の弟子に興味を持っているだろうしな
しょうしょう遅れたが私の名前は、ルシア・バルバマンと言うこのエルフの里の長老でもある」

「僕の名前は、ミズキ・ヤグラと言います、暫くこの村に厄介に成りますがよろしくお願いします」

「そんな畏^{かしこ}まらなくてくれ私も久しぶりの外界人が村に来て嬉しい

のだ我々エルフは、他種族を避けて居る様に見えるが本当は、ここまで避けていないのだ感じぬかもしれんが我々は、この森の様な精霊が沢山姿を表す場所を荒らされ無いように古の契約いしえによって護らなくてはならないのでな精霊は、山の奥などの秘境に沢山現れるから人から遠ざかったり人が精霊を求めて来るので遠ざけたり悪い時は、攻撃して殺さなければならぬからなたまたまこの森に迷い込んでここにたどり着いた人やマルチダが連れてきたようにここに来て大丈夫だと思ふ者なら我々エルフは、歓迎するだからゆっくりして行きたまえここがミズキ・ヤグラの第二の故郷にならんことを」

「ありがと御座います、僕もこの村が本当の故郷のように思っています」
「そうか、私は、村人の手伝いをしなくてはならないためマルチダ、二人でこの家の客室を使って休むといいそれでは、失礼する」

長老のは、村人を手伝いをするために家を出て行った。マルチダは、瑞希と共に家の奥に入って部屋に入り。

「適当むづかに寛いでいる夜になったらなかなか眠らしてくれないから」
マルチダは、そう言い部屋に一つしかないベッドに入り直ぐに寝た。瑞希は、何もやることがないのでマルチダに言われた通りに寝るとききました。

夕暮れ時

「ふあ~~~~~・・・・・・良く寝た〜、マルチダさんは、・・・
まだ寝てるな」

(特にやること無いな) と思考の海にダイブしようとしたら部屋のドアが開いた。

「お!!!ミズキ起きてたのかマルチダは、……まだ寝てるか」

部屋に入って来たのは、アイコスだった。

「プルは、何しに来たの？」

「ああ、ミズキ達の歓迎会?の準備が出来たからなあれは、凄いいことになってるぞマルチダがミズキ以外に誰か連れて来た事なんて今まで無かったら村人全員が宴うたげだ何だって言っても始まって無いの騒いでるからな宴会とつり越して祭りだなあれは」

「は~~~~?」

アイコスは、そう言いながら苦笑いをしていた。

瑞希は、取り敢えず今この村では、歓迎会が祭りに変わったのに驚いた。

アイコスがマルチダを難とか起こして宴?の会場に向かった。

この村は、大きな広場(会場)を中心にして円状に村が出来ていて門の反対側に長老の家がある。広場の真ん中には、井戸が有ってこれで毎日水汲みをしている。長老の家の前には、高台が有って今長老が話している。

「と言う訳で帰って来たマルチダ・ファールウエンと新しき家族のミズキ・ヤグラに我々が家族と新しき家族に未来永劫精霊の加護が有らんことを」

長老がそう言っていると皆がお酒を注いだコップを天に掲げ

「……我らに精霊の加護が有らんことを」「……」

皆がそう言い宴が始まった。マルチダは、子供や大人達に自分が体験した話をしていた。

瑞希は、最初の方は、

「何処から来たの?」「、

「外の世界は、どうだった?」「、

「マルチダとは、どう知り合った?」など質問攻めにされていて何をどうしたら良いか考えていたらアイコスと長老に助けられた。

「にしても災難だなミズキは」

「確かに災難だなどうせあいつにろくな説明され無いで来させられたんだろ」

「はい、マルチダさんにここに行くなんて言われたのは、街の外で『故郷に行く』と言ったらいきなり精霊呼んで森の手前まで連れて来られましたよ」

「そうだろあいつは大雑把過ぎるあいつの無茶に何回付き合わせられたことか、危うく死にそうになったことだってある」

「プルお前が人のことは、言えんだろ小さい時は、い時は、マルチダと共に村の子供を束ねて悪戯ばっかかして私や両親に迷惑ばかりかけていたくせに」

「そんな自分の過去は、忘れた」

「そうかそうか」

アイコスと長老と瑞希は、話ながら時間は、ゆっくり流れていく・

宴は、終盤

子供連れの家族は、夫だけ残り母親と子供は、既に帰っている。アイコスと長老は、酒を何杯か飲んで顔が赤くなっている。瑞希は、余り酒が飲めないのが最初の一杯だけ飲んで止めている。マルチダは、かなりの量を飲んでた。マルチダの周りには、沢山の村人達が酔いつぶれていてそんな中一人で樽に入った酒を飲んでいる。

瑞希は、

（酒を浴びる様に飲むってああ言うことを言うんだらうな）と遠くから三人で見ていた。

そんなことを思っていると話がマルチダの”料理”に変わった。

「ミズキ、お前は、マルチダの料理食ったこと有るか？」

「は、一様ありますけどあの味は、もう思い出しただけで倒れそうですよ」

「そうか・・・お前も食べたのか」

「で、マルチダの料理の腕は、上がっていないかあれだけの被害を出してもこれ以上上がらんのか長老またあの地獄が始まりますよ」

「だ、大丈夫だプル今回は、ミズキがいるこないだ帰って来た時よりは、ましだと思う」

「ま、まさかマルチダさんこの村に帰って来ては、料理を作ってるんですか!？」

「そつだ、基本面倒くさいのが嫌いなくせに
『料理は、女のたしなみだ！』とか言つて料理をやり出すんだよ、
何時いつもは、女らしい所は、無いくせに料理は、女らしさを求めてる
んだなら普段から女らしくしとれつて話だ」

そう話しているとマルチダがアイコスの後ろに立っていた。
それに気づかないでアイコスは、酒の勢いで話している。

「そつだと思つだる長老もミズキもあいつには、女らしさが足りない、いや足らないんじゃないんだ！」

マルチダが真後ろに立つてにこやかに微笑んでいるが逆に怖い。

「あいつは、小さい頃から女らしく無かつた！毎日毎日森に言つては、何か分からん生き物らしき物を素手で捕まえてくるわなんだで」

マルチダは、微笑みが消え額に青筋を浮かべている。

「あれは、もう其処ら辺の男より男ばいじゃないや男の中の男

「へへ、オレは、男の中の男かアイコスは、オレことを”男の中の男”だと思つてるんだ今からオレが女らしさが有るところを見してやるよ”料理”で」え、あ、あれは、お前の話じゃなくててだな
「問答無用」た、助けてくれー、何でミズキと長老は、目をそらす、いやそらさないで」

アイコスは、マルチダに何処か連れて逝かれた。

長老は、それを見送つた後皆を解散させて瑞希と共に家へ帰つた。

アイコスが連れて逝かれた後アイコスの悲痛な叫び声が村中に響き渡った。

村が寝静まった頃

さすがに疲れたのかマルチダも長老の家に戻り布団の中に入って寝ていた。

そんな中、黒の外套を被った人が一人村の門を抜け何処かに向かっていた。向かっていた先は、村から少し離れた雑木林の中に有る小屋の隠し階段の向こうの地下室だった。地下室は、大人が百人近く入れそうな位広かった。地下室には、大きい机が有りその周りには、椅子が並べられていて会議室の様になっていた。

椅子には、何人か居ないが二十五人のハイエルフが座っていた。皆、

外套で顔を覆い被さっていて顔が良く見えない。中の者達は、ひそひそと会話をしていると扉が開いた。扉が開くと皆、会話を止め静かになった。

「遅れて申し訳ありません唯今報告に参りました」

すると一番奥にいる男が口を開いた。頭に被っている外套を取った。

「ご苦労だったアイコス・プルティオール報告を頼む」

「はい、今日我々の村に着いたマルチダ・ファーウエンとその弟子ミズキ・ヤグラについてですがマルチダ・ファーウエンについては、余り変わった様子は、有りませんが弟子のミズキ・ヤグラは、我等が始祖>深緑の賢者<ハバルト・アルク・エルフの魔力量を超えている可能性があります」

アイコスがそう言うのと地下室のハイエルフ達が話しだした。すると一人のハイエルフが口を開けた。

「そんな馬鹿な事がある筈がない！我等が始祖以上の潜在魔力量など」

そうハイエルフが言うのと他のハイエルフがまた口を開いた。

「そうだ我等が始祖は、初めて神靈精王しんれいせいおうと契約と誓いを交わし元々魔力量が多いだけの我々エルフ族の一部と精霊を融合しハイエルフとし他の者は、精霊と契約無しで行使出来る様に誓いを建てたのだぞそれに我等が始祖は、我々は、ハイエルフの倍は、在ったのだぞ」

「それが誠に言いにくいのですが通常感知出来る魔力量を超えてい

まして我が体内に眠る精霊に計らしたところ精霊は、我等が始祖の魔力量を超えていると感知したゆえ」

「そ、そんな馬鹿な!!」

現エルフ族の始祖>深緑の賢者<ハバルト・アルク・エルフが生きていた時代は、古く通常のエルフの何倍も長く生きるハイエルフも始祖を知っている者は、死に絶え知っている者は、彼等ハイエルフが死ぬ時彼等と混じった精霊が体を離れ他の産まれくるエルフと融合し直す精霊だけになった。

そのため中の精霊は、始祖が生きていた時代を知っているので精霊が始祖より魔力量が多いと言ったら多くなる。

「そっか精霊がそっ……」

アイコスがそう言うと皆が静かになったらまたアイコスが口を開いた。

「他にも報告が有りましたミズキ・ヤグラの属性は、か火色、す水色、らい雷色、ど土色、ふう風、あざ闇色、ひかり光色、とき時色と八色有ります」

「……なっ!!」「」「」「」

やはりそう言った瞬間皆がまた騒ぎ始め、先程発言したハイエルフが口を開いた。

「そんなこと有る訳がないだろう!」

「ですがこれも我と精霊が確かめた結果こう言っふうに出たんです!」

アイコスがそう言い返すと一番奥側の席のハイエルフが口を開いた。

「皆の衆騒ぐ出ない！今アイコスが言つた事は、精霊が示したとも言つたならばそれは、信じ難いが事実で有るだがいくら騒いだ所で彼の者にどうすることも出来ん我々は、傍観者で在り無理矢理彼の者を殺したりは、出来んならば我々は、彼の者が我々の敵また道を踏み外さんようマルチダ・ファーウエンに言うことしか無いのだ」

ハイエルフ達は、皆頷いた。

「でわ、此れにて精霊^{せいれいていかい}廷会を終わりとする、ルシア・バルバマン、アイコス・プルティオール彼の者の監視と見定め、マルチダ・ファーウエンに彼の者が道を踏み外さん様に伝えておくのだぞ」

そう言い一番奥の人物は、消え他の者も後を追うように消え行った。地下室に残つたのは、長老とアイコスだけだった。

第十二話：修行の日々

エルフの里に来てから約一ヶ月半・・・今日、瑞希とマルチダは、ブラットとリュウヤが居るグランデイスに帰ることになった。

瑞希は、今までの修行の成果も実りかなり強くなっていた。

だが瑞希は、昨日までの修行の日々（地獄の日々）を思い出していた。

歓迎会（宴）が有った次の日の朝

瑞希は、朝早くマルチダに連れられある場所に向かっていた。

「マルチダさん今から何処に行くんですか？」

「着けば解るから黙って着いてきな」

マルチダは、にやけながら言い。瑞希は、頭の上に”？”を浮かべながらマルチダに黙って着いて行った。

マルチダと瑞希は、エルフの里に来た時の様な森を進んで行くと・・・

急に森から抜け何とも言い得ない美し言葉に例え様の無い草原に出た。

「凄くいい景色だろミズキこの場所はな精霊達が沢山集まる所なんだ、この場所を守る為にエルフは、森の奥に暮らして居るんだ、だが此所が此だけの場所でもない此所は、精霊が多く具現化している為に時間軸が実際の時間と異なつて居るだから短期間の修行には、もってこいだし精霊が沢山居るから精霊魔術のコツが掴みやすい」

「ということは、此所で修行すると実際の時間で修行するよりも沢山修行出来て精霊魔術の上達も早くなるんですね」

「ああ、そうだある程度此所の説明したから今から修行している間住む所に行くぞ」

マルチダにそう言われ草原を歩いて行く。途中森が在ったが綺麗な黄緑色をしていた。瑞希達が通つて来た森は、黒みがかつた濃い緑色をしていてかなり精霊が居る森と居ない森てまは、違つのだと分かった。

歩いて数分

小川横に白壁で屋根が薄い青色で出来た家が在った。その家は、余り派手では、なく周りの風景と調和していた。

木や家、大空や大地がお互いを引き立てたその風景は、美しくそれと同じ位儂く見える一つの神秘的な絵画かいがの様だった。

瑞希は、その美しく儂い神秘的な風景にただ見いつていた。

.....

どれ位経ったのだろうか？

瑞希は、此所に来てから時間の感覚が曖昧になっていた。この状態で瑞希は、ふと考えた。

『自分は、何れだけ此所でこの風景を観ているのだろうか？・・・数分？、数時間？、何日？、何年？』

瑞希は、一瞬それとも永遠にこの景色に見いつている感覚に陥った。そんな事を考えているとマルチダが話し掛けてきた。

「凄く何かにとり憑かれた感じで見ているだろ昔のエルフが精霊と共に作った家なんだ詳しい事は、古すぎて解らないがなただ言えるのは、何処にでも有りそうな白い壁の家と周りの風景が今まで観てきたどんな物よりも”美しい”ってことだな」

マルチダは、そう言い家の中に入って行った。瑞希は、そそくさと着いて行った。

家の中は、思っていたより広く木の温もりがある優しい感じのする部屋だった。家には、部屋が2つあり一つは、居住スペースで台所あり、トイレやお風呂は、扉の向こうに纏めてあった。もう一つの部屋は、書庫の様でマルチダの家より遥かに多い量の本が保管されていた。

マルチダと瑞希は、荷物を置き書庫の様な部屋に入った。

「まずは、頭の中に詠唱魔術を叩き込んで貰う時間の心配は、いらないから、その時の差は、有るけどだいたい一ヶ月で一年間ぶんの修行が出来るから」

とマルチダは、言いさつそく修行が始まった。

初日〜一ヶ月後

瑞希は、だいたいの魔術の本は、読み終わり頭にも叩き込んだするとマルチダが

「次の段階に行くぞ」

と言い書庫の様な部屋から出て魔術効率（魔術を発動する時にどれだけ無駄な魔力を使わないかする事）を下げる為と詠唱破棄、詠唱簡略化の為にまずは、下級詠唱魔術の乱れ射ちをした。

それから半月後

下級詠唱魔術をある程度出来る様になった。魔術効率も最初の時より大分下がり今では、瞬時に発動出来る様になって今から中級詠唱魔術と同時進行で具現化魔術を習うことになった。

中級詠唱魔術は、習得するのは、思っていたより簡単で具現化魔術は、習得するのに少し時間が掛かった。

一月半後

上級詠唱魔術もある程度出来る様になったころ具現化魔術も様になっていた。

マルチダと瑞希は、荷物を置き書庫の様な部屋に入った。

「まずは、頭の中に詠唱魔術を叩き込んで貰う時間の心配は、いら

ないから、その時の差は、有るけどだいたい一ヶ月で一年間ぶんの修行が出来るから」

とマルチダは、言いさつそく修行が始まった。

初日〜一ヶ月後

瑞希は、だいたいの魔術の本は、読み終わり頭にも叩き込んだするとマルチダが

「次の段階に行くぞ」

と言い書庫の様な部屋から出て魔術効率（魔術を発動する時にどれだけ無駄な魔力を使わないかする事）を下げる為と詠唱破棄、詠唱簡略化の為に先ずは、下級詠唱魔術の乱れ射ちをした。

それから半月後

下級詠唱魔術をある程度出来る様になった。魔術効率も最初の時より大分下がり今では、瞬時に発動出来る様になって今から中級詠唱魔術と同時進行で具現化魔術を習うことになった。

中級詠唱魔術は、習得するのは、思っていたより簡単で具現化魔術は、習得するのに少し時間が掛かった。

一月半後

上級詠唱魔術もある程度出来る様になったところ具現化魔術も様になつていた。

マルチダと瑞希は、荷物を置き書庫の様な部屋に入った。

「まずは、頭の中に詠唱魔術を叩き込んで貰う時間の心配は、いらないから、その時の差は、有るけどだいたい一ヶ月で一年間ぶんの修行が出来るから」

とマルチダは、言いさっそく修行が始まった。

初日〜一ヶ月後

瑞希は、だいたいの魔術の本は、読み終わり頭にも叩き込んだするとマルチダが

「次の段階に行くぞ」

と言い書庫の様な部屋から出て魔術効率（魔術を発動する時にどれだけ無駄な魔力を使わないかする事）を下げる為と詠唱破棄、詠唱簡略化の為にまずは、下級詠唱魔術の乱れ射ちをした。

それから半月後

下級詠唱魔術をある程度出来る様になった。魔術効率も最初の時より大分下がりに今では、瞬時に発動出来る様になって今から中級詠唱魔術と同時進行で具現化魔術を習うことになった。

中級詠唱魔術は、習得するのは、思っていたより簡単で具現化魔術は、習得するのに少し時間が掛かった。

一月半後

上級詠唱魔術もある程度出来る様になったところ具現化魔術も様になったら最後の精霊魔術の方に入った。

精霊は、一体につき一人と契約する為、誰にも契約していない精霊を自力で見付けないと行けなかった。

幸い瑞希が修行している場所は、精霊が沢山居る所の為精霊を感知する力は、自然とついていた。

それから契約したのは、風の精霊二体と火、水、土、雷の精霊が一体づつ契約をした。ある程度魔術を出来る様になったら錬金術も教え貰った。

錬金術は、その物体を理解し分解最後に再構築する物でこれまた書庫の中にもって知識を叩き込んでいた。

瑞希が書庫にもって居る間にアイコスが来ていた。

「マルチダ久しぶりだな瑞希の調子は、どうだ」

「ああ、かなり良いよ今錬金術の勉強中だよ」

「な！！かなり速くないか？」

「そうだと教えるとな乾いた土が水を吸ってく様に覚えて行くんだよ今は、もう魔術のほとんど覚えさせたさすがに光と闇、時は、全くやって無いけどな」

「にしても反則的早さだな」

「確かに教えるのは、楽しいんだが天才と呼ばれた自分が凡人に感じる」

マルチダとアイコスは、軽い話をしてなかなか瑞希が部屋から出て

来ないのでアイコスは、帰ってしまった。

それからそんなこんなで残りが半分程になったころようやく錬金術も出来る様になり最終段階の魔術師に足りない魔術を使った体術をやることになった。

それから血を吐くような体作りだった。

残りの半分すべてを使った為かなり様になったそして瑞希が得意な武器は、弓矢と弓を錬金術で錬金した双剣を使うのと綱糸を使った戦方が得意だった。

取り合えずこの場所の修行を終える事にした。

瑞希は、今までの修行の日々を振り返るは、やめてマルチダと共にグランデイスに帰って行った。

第十三話：朝の出来事

グランデイスに帰って来た次の日の早朝

まだ街が動き出す前にマルチダと瑞希は、ブラットと龍也が泊まって居る宿に向かっていた。

今日は、ブラット会う予定らしい（マルチダが勝手に決めた）その為朝早くからすれ違わないように朝早くから家を出た。

宿に着いたらもう既に宿は、開いておりカウンターには、宿の従業員が立っていた。

「ブラットと言う鳥族の男が泊まって居るはずだ、オレは、そいつの知り合いだから部屋の場所教えて」

「あのすみません、お客様のお部屋を教えるのは、ちょっと・・・」

そう従業員が言うとマルチダは、従業員の首を引つ掴み瑞希から少し離れて何かを話していて従業員の手に何かを掴ませ従業員は、急いでポケットにしまつと満面な笑みで部屋の位置を話した。

部屋は、二階の一番奥の部屋から三番目の部屋だった最初に借りた部屋だ。

マルチダは、ドアが壊れんばかりに行き良い良く開け放った。

「おお、ブラット起きてるかー」

マルチダは、大きな声を出して部屋に入って行った。

「う……」

そんな時入って直ぐの部屋から声が聞こえた。

「う？」

「うるさーい！！」

耳を傾けたら大声が帰ってきた。マルチダは、そんな事気にしないで部屋の中に入って行った。

「やあ、ブラット久しぶりだな」

「ああ、久しぶりだなだがいま何時だと思ってるんだまだ日が上つてすぐだぞ非常識にも程がある」

「細かい事気にするな、だからお前は、玉が小さいだわ女々しいやつめ」

「誰でもこんな時間に起こされたら文句の一つ、二つ言いたくなるわ！！で、今度は、何の用だ？」

「あのな、ミズキに実戦経験をさせたいからギルドにでも登録させてモンスターでも狩ろうと思ってるその為にな、一様オレの弟子でもな」

「ああ、そういう事分かった良いぞでもあと少し待ってくれこっちはあと少しで用事がかたずくからどうせするなら纏めてやった方がいいしな」

「その用事とギルドに登録するのを纏めてやるって何の事だ？」

「ああ！？言って無かったけ？まあいいやミズキには、に連れがいてなそいつは、武器が必要だったからバルドの所に行って武器作ってたんだがあと少しで全部揃うからそんなとき纏めてやった方がいいかなっと思っただけな」

「ふうん、そう言う事が、分かったじゃあ出来たらオレン家に連絡くれ」

「ああ、そうする」

「じゃあ、帰るわ、またな」

マルチダそう言うのと瑞希を連れて出て行くことしたらブラットが声をかけてきた。

「マルチダ、ゆくつりしていかないのか」

「ああ、すぐにギルドに行く予定だったしダメだったらダメで別の用事する予定だったから」

「そうか、じゃあ仕方がないなまた今度」

マルチダは、今度は、片手を上げ、瑞希は、軽くお辞儀し出て行った。

そんな瑞希を見てブラットは、
（大分身に纏う雰囲気が変わったな）と思いながら二度寝するために部屋に戻って行った。

第十四話：ギルドと異変

朝、宿の食堂

いつもの様に食堂は、客で賑わっていた。その一角で朝食を取っている龍也とブラットが居た。

「ブラットさん、今日の明け方誰か来てなかった？」

「ああ、ミズキとその師匠のマルチダが来てたんだ、モグモグ、ミズキをギルドに登録して、ゴクン、ハンターにし手っ取り早く実戦積ませたいんだとでもどうせ登録するならお前も一緒にやった方が楽だからお前の武器が出来て準備が終わったら知らせることになったんであいつらは、あいつらで用事が有るからそのまま帰ったて訳」

「そうなんだ、でも一声かけてもいいんじゃない？」

「まゝあ、かなり急いでたって感じだから許してやんな」

そんな他愛もない会話をしてから

十日後

昨日、龍也の武器も出来て準備も整った為今日は、瑞希達と合流することになった。

合流する所は、ハンターが集まるハンターギルドと言う所で集まる事になっている。ギルドは、二階建てで一階は、酒場兼依頼、ハンター登録が出来て二階は、ランクがかなり高いモンスター討伐依頼等がある。

龍也とブラットは、一階酒場の隅の席にいた。今日は、瑞希と龍也のハンター登録をするためにギルドに来ていた。瑞希は、マルチダ

と一緒に居るのでブラットは、待ち合わせにこの場所を指定していた。約束の時間より早く来て二人を待っているとギルドに入ってきた二人組が入って来た。

二人組は、外套を被っていて顔は、良く見えないが仕切り首を動かしていた。その内一人が隅にいる龍也達を見つけると片方の人にかを言つてこつちに近付いてきた。

二人は、目の前まで来ると被っている外套を取った。

龍也から見ると二人の内一人は、瑞希だとすぐに解った。たがもう一人の女の人は、解らなかつた。

解る事は、かなりの美人だと言うこと……。

「待たせたな、ブラットでそつちに居るのがミズキの連れの確か……
・・・そうそうリュウヤだつたな」

そう言われ龍也は、頷いた。

「そうかあつてるんだな、じゃあ初めましてオレの名前は、マルチダ・ファーウエンつて言うんだ呼ぶときは、まゝあマルチダさんか何かで読んでくれればいいから」

「俺は、リュウヤよろしくマルチダさん」

軽い自己紹介を終えてギルドの依頼兼ハンター登録カウンターに向かつた。

ハンターは、いくつか決まり事がある一つ目は、依頼のクラスと自分のハンターランクがそれ以下だと受けられない何でそんな制度を取つて要るかと言うと依頼の金額に目が眩んだ若輩ハンターがモンスターに殺された事が沢山あったため。

二つ目は、ハンターギルドは、国の補助または、運営していたり街がある程度補助金を出しているため街、国からの召集命令がかけら

れたらハンターギルドに登録しているものは、その街に召集をかけた街に居る場合強制的に集められる。

他にも幾つか細かい決まり事が有るが一番重要なのは、今の二つである。

カウンターには、受付嬢がいた。

「こんにちは、今日は、何のご用ですか」

受付嬢は、事務的な挨拶をしてきた。

「今日は、この二人のハンター登録をして貰いに来た。」

ブラットが代表して言った。

「はい、分かりました、では、此方にお名前と少し指を切って血を指に浸けてこの紙のに押しして下さいませ」

そう言われ二人は、名前を書き渡されたナイフで軽く指を切ると言われたところに指を押し宛てた。

それを終わると受付嬢は、

「そちらの方は、ハンターですか？どちらとも上級ハンターならで新しくハンターになる方がハンターの力量が有ると判断した場合後日の試験を無くすことができますが」

そう言われたブラットとマルチダは、階級書を受付嬢に見せた。

「はい、確認しましたでは、お二方には、さきらの紙にサインと血で印鑑をお願いします」

すると先程瑞希達を書いた紙にブラットとマルチダは、書いていっ

た。受付嬢は、それを確認し奥から二枚の紙を持って来た。

「こちらは、ハンター証明書とその階級書です。その二枚を紛失しますと再発行にかなりの時間がかかります無くさない様にしてください」

そう言うと二枚の紙を渡してきた。紙は、それぞれのバックの中に入った。

「じゃあ、じゃんじゃん依頼受けて一気にランク上げてくか」

マルチダがそう言った。さっそく依頼を受けた。

内容は、Dクラスの角狼二十匹討伐任務だった。あと数匹多かったらもう一つでクンクアップする所だがそんな事を二人は、知っていないくそのままなし崩しにその依頼をこなすのであった。

角狼の討伐依頼は、そこまで時間が掛からなかった。

瑞希は、魔術を使わないで弓矢だけで軽くあしらう事が出来た。

龍也は、刀を手に入れた事で今までの違和感も無くなり身体強化魔術を使っていたため何時も以上に力が湧いてきていた。

ブラットとマルチダが加勢する隙さえ無く終わらせた。

それから二人は、どんどん討伐依頼をこなしていった。そしてメキメキ成長していきグランデイスでは、かなり有名になっていた。

龍也は、『変わった武器を使う剣士』で瑞希は、『魔錬術師』として

瑞希達がこの世界に来てから約4ヶ月、グランデイスに来てから約三ヶ月半経った瑞希と龍也は、ブラットとマルチダと同じランクの上級ハンターになっていた。

そんなある日ギルドや街にある噂が流れて来た。

『東の山の向こうの村がモンスターによって滅ぼされた』

と言う話だった。この世界で小さい村や町が滅んで逝くのは、珍しくもなく皆気にしていないが瑞希は、気になる事が有った。

最近この付近に居るモンスターが特に東の方が変な感じになっている。それは、かなり些細な事だがやはり瑞希は、気になった。

”東の山に居る筈がないモンスターが居る”からだ。もつと東にある山脈群に居るモンスターが討伐依頼に入っていた。たまに入ってくることは、有るが最近は、かなり多いとマルチダが二、三日前に言っていた。

でも瑞希がそんな事を考えても解る訳もなく今日も依頼をこなしギルドの一階酒場で夕飯を四人で食べていた。

「最近変じゃないか？東の山脈群に居るはずのモンスターが丘を越えてこちっの山まで来るのわ」

「そうですね、僕も変だと思ったんですよ、こないだ東の方に行っただんですけどつい最近までこの辺に居なかったモンスターがかなり増えて居ました」

「そうかなり変だな」

瑞希とマルチダは、何か引っ掛かる所があるのかそう言う会話をしていた。

龍也とブラットは、会話についていけず別の話しをしていた。

酒場は、いつもの様に賑わっていた。何も知らないで………

一方東の砦からその場所に向かって何者かが向かっていた。

くし喧騒に包まれていた。

「急いで行くぞ！何かヤバイ事が起こっているぞ！中央会議場に急げ！！」

そう誰かが言つと酒場に居る者達が波の様に出て行った。
瑞希達は、それを聞いて

「大変な事に為つたな」

ブラットが呟くとマルチダが答えた。

「そうだな、覚悟を決めないとな」

その言葉を合図に瑞希達も中央会議場に向かった。

第十六話：魔獣大進行

瑞希達が中央会議場に到着した。

中央会議場前には、仮設テントが建てられ其所でハンター証明書と階級書を見せてそこから階級事や傭兵団等に別けられている。

瑞希達も仮設受付で証明書と階級書を見せた。受付の人は、一番奥の会議室に行くよう言われた。龍也達も同じ場所を言われたらしく皆で行った。

中央会議場の中は、慌ただしく色々な人が行き来している。書類を沢山持った人、ハンターなのか武器をぶら下げて会議室にいく者、など沢山いた。

瑞希達は、大きな廊下を歩いていた。途中いくつもの部屋に続くドアがあった。

それから少し歩いたら一番奥の部屋に着いた。ブラットが扉を開いて入って行くその後を追うようにマルチダ 瑞希 龍也と中に入っていた。

中は、広く奥行きがある軽く百人は、入りそうだ。

その広い会議室には、既にほとんど席が埋まっている。その中に瑞希と龍也程の歳の人は、居なかった。

ブラットは、空いてる席を見付けると歩いて行った。マルチダは、ブラットの隣におり何か真剣な顔をして一言も話さないでいた。

瑞希と龍也は、後を付いて行く。その途中他のハンター達の話に耳を傾ける瑞希だった。

「おい、あのちっこい二人が最近有名な『変剣使い』と『魔錬術師』だ」

「あんなガキがか！世も末だな」

「それが凄いんだ、あいつらの戦っているところ見たことが有るんだが偶々Aクラスの討伐依頼でなかなか危険だろ」

「ああ」

「だからあそこの四人と俺と他に三人で行ったんだか俺達が手を出す前にあの二人が倒しちゃったんだあの時は、凄かった絶妙なコンビネーションで敵を圧倒してたからな」

そんな会話が聴こえて来た。他にもいくつか話している奴等は、居たが今回の出来事の有益な情報は、無く瑞希は、会話に耳を傾けるのを止めた。

瑞希達が席に付いて少し経つと瑞希達が入って来た入口とは別の入口から髭を生やし貫禄が有る人が入って来た。

「初めて会う人が居るから先ずは、自己紹介から、私の名前は、ロベルト・ラドクリフ僭越ながらこの街の市長をしている以後お見知り置きを、それでは、先ず諸君等に集まって貰ったのは、知っているとありますが東砦陥落ため緊急召集をかけました、陥落の報を受け急いで物見を遣りました所モンスター襲来のせいだと判明しました」

市長のロベルトがそう言った瞬間驚いた顔をしていた。少し静かな時が流れた。すると一人の男が机を叩いて立ち上がった。

「おい！！モンスターが東砦を陥落させたと言うことは、魔獣大進行か」

「恐らくそうですね東の山脈群から来たと考えられます」

「じゃあ、村が滅んだのも大進行のせいなのかよ」

「多分そうですね。東の山脈群とこの街の間にあの村は、有りましたから……そこで皆さんには、街の防衛をして貰いたいと思っています」

市長が言つと前の席の重装備をしている人が言った。

「防衛するよりも逃げた方がいいんじゃないか？大進行は、数が多
いと国の首都が半壊する可能性があるだ」

それを聴いた柄の悪い中年オヤジが声を荒あげた。

「おい、貴様怖じけずいたか！！この臆病者」

「な！誰が臆病者だ、お前は、知らんから大進行の恐ろしさが解らないんだ！！俺は、アルブット魔獣大進行に居たから良く解る！」

「アルブット……」

会議室が一気に静かになった……

アルブット魔獣大進行

五十三年前アルブットと言う大都市が世界地図の上から姿を消した。アルブットは、ライハルと言う国の城壁都市とまで呼ばれる街だった。アルブットは、三重の城壁、獅子の鬣ししのたてがみと呼ばれる城壁群に

守られた街で今まで人も魔族の進行も魔獣大進行も防いできた難攻不落城壁都市になっていった。

そんな栄光時は、都市の滅亡によってあっさり崩れだした。アルブットが出来てから五回目の魔獣大進行によって……。その日は、雨が降っていて余り視界がいいとは、言えなかった。アルブットの第一の城壁には、沢山の兵士やハンター、傭兵団等が居た。

昨夜、大進行がくるとの報告が有ったからだ。城壁の中は、また直ぐに追い帰せるだろうと……。だがその日は、いつもと違った。

モンスターの数がアルブットの歴史が始まって以来の大々魔獣大進行だった。第一城壁は、あっという間に破れ第二城壁も時間の問題だアルブットは、既に魔獣に囲まれて助けを呼ぶ事も逃げることも出来なくなってしまった。

難攻不落の城壁都市アルブットは、丸一日で魔獣達に陥落させられたのだ。生き残ったのは、城壁内部の地下に立て籠った者と運良く生き延びた者だけだった。アルブット陥落の報は、瞬く間に大陸じゆうに広まった。各国は、今まで難攻不落と言われた城壁都市アルブットが一日で陥落したことを何かの間違えだと思っていた。

そんな中、隣の魔族国家サリジア帝国が攻めてきた。サリジア帝国は、難攻不落のアルブットに向かったサリジア帝国は、アルブットに着くと皆目を伏せた。

サリジア帝国兵が見たのは、アルブット市民が魔獣に何の抵抗も出ずに殺されてった事を安易に想像出来た。サリジア帝国兵は、他にも命から生き延びた兵士が家族を無くし自殺した現場やたまたま迷っている者などがいた。

その余りに酷い惨場を見たサリジア帝国皇帝アラス・サリジア五世がライハル国との休戦を宣言し国に戻った。アラス皇帝は、国に戻った後、ライハル国と同盟を結びアルブットの復興にかなり貢献した。

これが後の魔獣大進行をかなり危険で油断出来ない事となり諸国にアルブット魔獣大進行　として知れ渡った。

そんな沈黙の中ロベルト市長は、口を開いた。

「確かに、下手をしたらアルブットの二の舞になるでしょうでも今から全ての市民を避難させる事は、出来ないでしょう、もし出来たとしても逃げる途中に追い付かれて殺られるでしょう」

そうロベルト市長が言つと重装備をした男が言ってきた。

「ならどうすれば良いんだこのまま神に祈りながら死ねって事か！
！」

「誰もそう言つて無いでしょう、少しは、落ち着きなさい！今逃げるのが駄目なら此所に立て籠るしか無いでしょう」

「だからそれじゃあアルブットの二の舞だろう！」

「だから、落ち着きなさい！アルブットとこの街は、違います、まずモンスター群に囲まれる前に国軍に救援要請、東以外の砦の駐屯軍を此所に呼び戻す、アルブット見たいに堅固な城壁が有る訳では無いが油断している訳では、無い既に先程の二つは、遣っている！あとは、国軍が来るまで持ちこたえれば良いんだ！！それには、あなたのアルブットでの経験が必要なんですだから協力してください」

市長は、重装備の男に頭を下げた。

「……わ、分かった、あんたは、負けたよ俺の経験が必要ならいくらでもくれてやるから市長さん頭を上げてくれ」

そう重装備な男は、言つと市長は、頭を上げた。そして重装備の男の名前を聞いた。

「俺の名は、アベル・ロツクンハルトだ」

そう言つて握手をした。これからグランデイス魔獣大進行防衛作戦会議が始まった。

第十七話：作戦と配置

偵察部隊の情報によると魔獣は、東砦の備蓄食料や人を貪るのに今は、夢中で直ぐには、やって来ない事が判ったが明日の昼頃には、此所に攻めてくる事が予測された。

アベル・ロツクンハルトが言うにはアルブットの城壁を破った原因の一つに上空にいる大量の飛行型モンスターによるもので弓兵が城壁の上にながれなかった為、城壁外の巨大モンスターに城壁門を破られた。だがアルブットの時と違って今回は、視界が良く晴れる為、気づかなかつたと言う事は、無さそうだが飛行型のモンスターは、厄介なので弓兵や魔術師、飛行型魔族による制空権獲得が勝敗を左右する。

モンスターは、人の都合は、関係無いから昼夜問わず攻めてくるので夜組と昼組と上手くサイクルさせる必要させなければならない。作戦内容は、先ず魔術師と弓兵と飛行部隊が制空権獲得し地上部隊は、大型魔獣を片付けて城壁門の破壊スピードを落とすあとは、籠城するだけと以外にシンプルな作戦だった。

アベルとロベルト市長の作戦会議は、直ぐに終わりそれを此所に居る皆に伝えたが反対する者は、いなかった。

「それでは、配置を言います。先ずモンスターが最初に着くであろう東側の地上部隊は、ブラットさんに率いて貰います。よろしいですか？」

「ああ、いいぜ、その代わりこいつを連れていく」

ブラットは、龍也の肩を叩いて言った。

「わかりました、では東側の飛行型魔獣殲滅隊は、
……！マルチダさんをお願いします」

「部隊なんて大層な者は、いらん。オレとミズキと弓兵が少し要ればいい」

「ですがそれでは、数が足り無いのでは？」

「いらん逆に邪魔だ。それに他の所に入れるなり温存したらいいだろ」

「分かりました」

ロベルト市長は、マルチダ言ったら聴かない事を悟り着々と部隊を配置していく。

「西は、駐屯軍に北の地上部隊は、傭兵団 アバンドギヤルドに飛行型魔獣殲滅隊は、傭兵団 チョウ に南は、地上部隊は、アマスさんに飛行型魔獣殲滅隊は、カシルさんに任せます中央は、アベルさんと私が引き受けます。以上です各部隊の人は、自分の持ち場へ言っして下さい他の者も割り振りしだい各持ち場へ配置させます皆さん頑張ってください」

そう言われ皆それぞれの持ち場に向かった。

東城壁に着いたがまだ日が登っていなく真っ暗だった。少し待つと東側防衛に割り振られたハンター達が来た。数は、地上部隊が三百

人、飛行型魔獣殲滅隊は、魔術師が十名、弓兵五十名全部で三百六十四名になったこれを更に半分が今から夜にかけて戦う事が出来る戦力だった。

他の防衛隊は、北の傭兵団達が二百人後半で西の駐屯軍が四百人、南は、三百五十人、中央は、温存部隊五百人を迅速に配置出来る様にしてている。

東防衛隊は、少しの見張りを立てて今から来る戦いに向けて仮眠を取っている。朝になり皆起き出し戦いに向けて準備や心の整理をしている。

今回の戦いで生きて帰れ無い者が多く居るだろう街に愛する家族や恋人に一生会えなくなるかもしれない自分が居なくなつて悲しむかも知れないだが自分が戦わなかつたらその愛する者達が目の前で死んだら後悔する。だから此所に居る者達は、戦おうとしている。ただの事故満足かもしれない残された人は、自分が死んで今までよりも辛い人生を歩むかもしれない、そんなの関係無いと言うかもしれないそれでも『生きていてほしい』、『幸せになつてほしい』と願ひ此所に来ている。

此所に居る者達は、愛する者を守るためや故郷を守るため等皆様々な信念を持っている。

皆、それぞれの配置に着いた。明日を愛する者と生きるため今回の戦いに挑む。

東の方角から森の木々や魔獣の咆哮が聞こえてきた。
見張り台に登っていた者が声を張り上げた。

「魔獣が来たぞーーーーー!!!」

と・・・・・・・・・・・・・・・・

「そうでもないさ迷いが有れば死ぬ確率が上がる。今の演説で皆の迷いが消え士気が上がったから良いんだよ」

「そうか？そう言うもんか」

「そう言うもんだ、そう言えば上の部隊の配置と指揮は、誰がやってるんだ？」

「ミズキに任せた、俺が遣るより適任だ」

「そうなのか」

またも見張り台の者から声が響いた。

「魔獣、接近中！まもなく此所に到着します！」

それを聞いたブラットは、マルチダに早く持ち場に着くよう言っ
て自分も地上部隊の指揮を始めた。

【城壁上部】

マルチダは、ブラットに言われ持ち場に着いていた。隣には、瑞希がいる。

「もうすぐだな」

マルチダが独り言のように瑞希に話し掛けた。瑞希は、ただ普通な
感じに返した。

「そうですね、僕達が頑張って殺らないと後ろの人々が死んでしまいますから張り切ってやり遂げましょう」

「ああ、さっさと終わらせて酒が飲みたい」

「そう言わず、勝ったら美味しい勝利酒ですよ」

「どのみちさっさと終わらせなきゃならんな、勝利の美酒の為に……オレが手前やるからミズキは、奥な」

「マジですか？」

「マジだ、精霊魔術と一緒に使えよ」

「分かりました」

瑞希は、頂垂れながら返事をして魔獣が来る前に魔術の準備をしました。

《我は、汝の力を借りる者、我は、汝との契りを交わした者である、汝今ここ現れ我に力を貸し、私の願いを聞き入れたまえ雷を操り豪傑なる者よ、水を操り知識なる者》

瑞希は、二体の精霊を呼び出した。精霊は、水の精霊と雷の精霊だった。

《我は、汝の力を借りる者、我は、汝の隣人で汝と共に歩む友である、汝今ここ現れ我に力を貸し、私の願いを聞き入れたまえ火を操り破主たる者、風を操り誇り高き者》

マルチダも呼び出した。精霊の数は、こちらも二体で火の精霊と風の精霊を呼び出していた。周りの魔術に詳しく無いギルドハンター達は、特に魔術師達は、驚愕していた。

まだマルチダなら二体同時召喚が出来ても可笑しくは、無いだつてマルチダは、特A級のモンスターをブラットたつた二人で足止めをしたのは、この街周辺のギルドハンターなら皆知っている英雄談的な物なのだそんな大魔術師に近いマルチダと肩を並べ大量の魔力や技術力がある精霊召喚を一体でも一国の宮廷魔術師になれるのにそれを同時に二体召喚する少年に驚愕してしまった。

皆が驚愕している間も魔獣やモンスターなど関係無しに向かつて来る。段々近づいてくる魔獣達の咆哮に意識を戻したハンター達は、急いで気を引き締め直した。

魔獣達が後少しで着くというところで瑞希が魔術を行使した。

《雷いかすぢの槍よ、千の刃となり雷の雨を降らせ、千雷槍雨せんらいそうりゅう》

瑞希がそう唱えると精霊で強化されたどう見ても千以上ある雷の槍の雨が飛行型魔獣達に降り注いだ。

飛行型魔獣は、今の魔術でかなりを落としたがまだまだ空に沢山の魔獣が飛んでいる。

瑞希の雷の矢が当たらなかつた飛行型魔獣達が一気に近づいて来る後少しで城壁にたどり着くというところで

《猛狂う風、灼熱の業火、敵を阻む壁となれ 業火風壁ごうかふうへき》

マルチダそう唱えたら空高くそびえ立つ炎の壁が迫つて来た魔獣を一掃した。

半分程の魔獣は、此所が危険と思つたのか感じたの知らないが別の

方へ行つた。

それを見た地上部隊は、半分近く居なくなつた魔獣達の群に向かつて突撃して行つた。それを確認した瑞希は、弓兵と魔術師に地上部隊の援護をするように指示した。

【日が傾きだした頃】

ようやく瑞希とマルチダの地上部隊に配慮が無い魔術の雨で東側の飛行型魔獣は、一掃したが地上にいる魔獣達は、数が減っていないように見える。日も暮れ出したのでブラットは、撤退をし始めた。ブラット達が城壁門を潜り終わると瑞希が魔術で土の城壁をもう一枚作つた。地上部隊は、いきなり出来た城壁に戸惑つたが先ずは、城壁とさつき出来きた城壁の間の魔獣をかたずけた。

日も完全に落ち月が登つて来たら魔獣達は、森へ帰って行つたが『警戒を怠るな』と中央から指示が出ていた。

一日目の被害は、東側地上部隊、二十三名が戦死した。どの防衛場所も似たような数の戦死者が出ていた。各ハンターや兵士達が散つていった者達に黙祷をしていた。こうして一日目が過ぎていった。

《火矢》

ただそれだけで唱え火で出来た矢を作り飛行型魔獣に飛ばした。

【地上】

その火矢が撃たれたのを見たブラットは、叫んだ。

「突撃——」

それを聞いた地上部隊は、おのおの武器を持って突撃していった。龍也も魔獣の群に突っ込んで行った。龍也は、最初一体目の魔獣を横一線に切り払い二体目の魔獣は、斜め下からの切り上げ三体目も軽く首を切り落とした。そんな要領で四体目、五体目と切り伏せていった。

魔獣の群の中枢に着く頃には、城壁門から城壁門を守る為に突撃した違う部隊が城壁門を守って居る。

空には、もう飛んでる魔獣は、もう居なく弓兵部隊は、地上部隊の援護をしているが此方まで援護は、こなかった。

龍也は、雑魚を切り捨て近くに居る大型魔獣に相對していた。

大型魔獣は、全長十メートル程の大きさでBクラスのモンスターだった。モンスターは、四本足で足の先には、鋭い爪が生え並び口にも鋭利な歯が生え揃っている。モンスターには、幹のような尻尾も生えている。

その太い尻尾を龍也目掛けて振り落としてきたのを避け尻尾を付け根から切り落とした。切り落とした先から血が吹き出した。モンスターは、絶叫し怒りを顕しながら龍也に向かって突進してきたがそれを横に避け首から上を切り落とした。モンスターの顔は、斬られた事にも気づか無く一瞬で死んだ。

首からは、血が噴水の様に吹き出して龍也の周りには、血の海が出来ていた。

龍也は、直ぐにまた別の目標に向かった。

【城壁周辺】

瑞希とマルチダは、飛行型魔獣を殺り終わると城壁門前に出て雑魚狩りをしていた。

「ああー、面倒臭い。何でオレがこんな雑魚ばかり殺らなきゃいけないんだ」

マルチダは、そう言いながら魔術と錬金術で作った剣で魔獣を真っ二つにしている。

「それは、一様マルチダさんが隊長をしているからですよ。隊長一人が全線に出たら誰が指揮するんですか」

瑞希もそう言いながらマルチダと同じく魔術と錬金術を使って弓矢を使ったり双剣にしたりして魔獣を倒している。

「そんなのミズキが指揮すればいいだろ」

「僕は、嫌ですよ。指揮なんて面倒臭い事」

そう言いながら二人は、どんどん魔獣を切り伏せていく城壁門前は、魔獣の死体の山がそこらじゅうに出来ている。

「ああー面倒臭い。ミズキ伝令、今城壁外に出てる奴等を中心に待避

指せるこいつら一気にかたずける」

「分かりました」

マルチダは、ミズキに城壁門守備部隊を城壁門内に待避させるために何処かへ行った。

マルチダは、皆が城壁門内部に待避したことを確認すると魔術を放った。

《風よ突風になり、火は、津波様に押し寄せろ 風火波》
ふうかなみ

火の波が魔獣達に押し寄せていった。魔獣生きたまま焼かれている火の波が治まる頃には、城壁門前には、生きた魔獣は、居なく先程まであつちこつちに有った死体の山も灰になっていた。

それでも魔獣達は、今の光景を見ても懲りずに突っ込んでくる。またマルチダは、同じ魔術を使って魔獣を焼却していった。

【魔獣の群中枢】

ブラットは、十三体目の大型魔獣を倒したところだ周りの仲間のハンター達を見ると皆、疲れた顔をしていた。

ブラットは、もう沢山の大型魔獣を倒したしこのまま続けても皆が死ぬだけと考え撤退しようと思いい城壁門前を見ると守備部隊が城壁内部に撤退していくのが見えた。皆が撤退を完了したら火の波が魔獣に押し寄せていた。幸い此所まで来なかったがまた別の魔獣達が突っ込んでいた。そしてまた火の波が押し寄せ魔獣を飲み込んでいった。

大分城壁門前の魔獣が少なくなったのを確認してブラットは、撤退させるために叫んだ。

「撤退――、今、目の前の敵は、諦めて城壁門内部まで退け――
――」

ブラットの声を聞いた突撃部隊は、撤退をし始めた。撤退していく人を見て魔獣は、行き良いよく攻めてくる。

城壁門前まで着くと瑞希とマルチダ率いている。守備部隊が援護をしブラット達を城壁門内に待避させた。

【城壁内部】

時刻は、昼頃になり今のところ東西南北どの城壁門も破られていないらしい瑞希とマルチダ、龍也は、昼食を食べていたブラットは、今城壁の外で魔獣達と戦っている。

「それにしてもなかなか数が減らないな」

「そりゃしょうがない、魔獣大進行のせいでこの辺のモンスターや魔獣が便乗して攻めて来ているからな」

龍也とマルチダは、そう話している。すると慌ただしく走って来たハンターがいた。

「おい！さっき国軍を呼びに行った奴が帰って来たんだ」

そう走って来たハンターが話すと一気に周りが静かになりそして火に油を注いだ様に一気に煩くなった。

「で、で国軍は、何時来るんだ!？」

「一万三千の軍勢で明日の朝には、こっちに到着するんだって！」

「うわしゃー！ー！これで終わるー！」

「やったー！ー！生きて帰れるぜ！家族にまた会える」

家族に会えると喜ぶ者、生きて帰れると喜ぶ者、皆を守れて喜ぶ者など皆、一様に喜んでいた。

「皆、嬉しそうですね」

と瑞希が言った。

「そりやそうだろ下手した死ぬかもしれないし、この街が滅んだかも知れないからな」

マルチダがそう言いなが食べ終わった容器を重ねて纏めている。国軍が来ると知った者達は、皆喜びあと少しで終わると思いながら戦っていた。士気は、上がり死人の数は、ある程度減った。

時間が経ち太陽が沈み始めた頃、魔獣の群に異変が有った。魔獣達が今までかなりの勢いで攻めて来ていたのに急に怯えて逃げ出したのだそれを不思議思ったブラットは、森の方を見詰めた。

すると森が急に爆発して火炎球が城壁に向かって跳んできた。それに気づいたマルチダと瑞希は、魔術で防壁を作り城壁を守った。

それは、一瞬の出来事だった。皆、何が起きたか分からないでいたがブラットは、直ぐに火炎球が跳んできた森を見詰めていた。

森は、まだ土煙がたつていて何が居るか解らなかったが時間が経つにつれて土煙が晴れてきた。

そこに居たのは、全長三十メートル程で体全体は、赤い鱗が並んで

おり、足は、大木の様に太く爪は、大きな鎌の様に鋭い、腕は、無くその代わり翼が腕の様に発達している。口には、剣の様な歯が並んでいてその生物は、誰がどう見てもドラゴンだった。

第二十話：ドラゴン

【ドラゴン】

空の帝王と呼ばれる程の戦闘力を持つ魔獣である。

ドラゴンは、一番弱い種でもBクラスと極めて危険な魔獣で各国は、そのドラゴンの子供を捕まえ調教したりしつて戦争時には、ドラゴンに乗り竜騎兵として活躍するが育て上げるのに時間が掛かるのと大量の資金があるのでいかに強力な戦闘力を持っていても小国や貧民国では、ドラゴンを保持していない。保持している大国などは、どれ程保持しているかで戦局が変わったり強さや豊かさが解つたりする。

【東城壁門】

皆、息をするのを忘れたかの様に東城壁門辺りは静まり返っていた。皆、ドラゴンの出現に驚いたのとその圧倒的な大きさに……。ドラゴンは、一拍おいて耳の鼓膜が破れんばかりの咆哮が皆を襲った。その危機にいち早く回復したブラットが指示を出した。

「中央に伝令！！東にドラゴンが出たと伝える！！Sクラス級で東に居るだけでは、持ちこたえれない！！あと出来るだけ多くの増援を寄越すこともだ！！」

ブラットの大声で我に戻ったハンター達は、急いで迎撃体勢に入っ
た。

【中央司令部】

中央司令部は、先程の咆哮を聴いて何が起こったのか分からないで
いた。

「一体何が起こった！」

ロベルト市長がそう叫んだので周りの人々の誰かが答えた。

「分かりません何処かの城壁門が破られたかもしれません」

すると急いで市長の前に現れた東城壁伝令役の若者だった。

「緊急事態です市長！東の方からSクラス級ドラゴンが出現しまし
た」

中央司令部が一瞬に凍った様に静かになったがいち早く回復したロ
ベルト市長がさらに詳しく聞いた。

「現在東城壁門防衛中の部隊が足止めをしていますますが数が足り無い
から急いで増援を頼むとのことです」

「分かった、出来るだけ早く増援を向かわせると伝えてくれ」

「分かりました！」

そう言い伝令役の若者は、東城壁門の方へ飛んでいった。
ロベルト市長は、深く溜め息をしてから指示をだした。

「急いで国軍にこの事を連絡しろ！あと兵を東城壁門に集める急いでだ！」

「……………はっ！」「……………」

部下達が返事をし国軍へ急いで飛んでいく者や忙しなく動いている者達がいる。

ロベルト市長は、唯祈った。戦う事が出来ないから居るか居ないか分からない自分が信じる神に……………。

【東城壁門】

最初の攻撃からドラゴンと東城壁のハンター達は、睨み合いが続いている。ハンターは、物音をたてないように配置に着いていた。

静寂は、時が止まった様に静かで他の城壁門から聞こえる戦いの音だけ、そんな静寂を破ったのは、ドラゴンだった。

大地を揺るがす様な咆哮と共にまた火炎球が跳んできた。それを魔術師が魔術の盾で弾く。ブラットは、火炎球が跳んできたと同時に駆け出していた。

近くまで来ると山の様に大きいそれでもブラットは、ドラゴンに斬りかかった。

だが予想以上に鱗が硬くてダメージが無い、ドラゴンは、像が蟻を潰すが如くブラットを踏み潰そうとした。ブラットは、それを避けドラゴンにまた斬りかかった。でも先程のと余り変わらずはた鱗に傷をつけるだけでたいしたダメージが無い。ドラゴンは、気にする

ことを辞め直つ直ぐ東城壁門へと向かつて行つた。

ドラゴンが近ずいて来るのを防ぐ様に土の壁が出てきた。ドラゴンは、少しの時間の足止めにはかならなかつた。だかその少しの間に地上部隊がバリスタ（巨弓）を準備し放つた。

硬い鱗に護られた背中には、弾かれたが腹や顔には、数本矢が刺さつた。ドラゴンは、矢が刺さつた痛み叫んだ。その隙にハンター達が近より戦斧や巨剣、ハンマーを使いドラゴンの腹を斬りかかったりブラットが傷付けた所に攻撃したり少し弱らせている。

ドラゴンは、近くに群がるハンマー達を焼き付くそうと火炎球を放とうとしたがマルチダの混合精霊魔術《空槌くうづち》空気を圧縮した塊がドラゴンの口に叩き落とされ火炎球が口の中で炸裂した。

下に居たハンター達は、ドラゴンが火炎球を放とうとしていたので顔周りから退避していた為、誰も巻き込まれなかつた。中からの攻撃の為ドラゴンには、予想以上にダメージがあつたと思われるが表面上のダメージは、無かつた。

龍也は、ドラゴンの翼を狙つて跳躍し付け根の所を太刀で一撃何度目かの斬撃で左の翼が斬り落とされた。翼は、轟音を立てながら地面に激突した。

ドラゴンの翼が生えていた所から噴水のように吹き出した。ドラゴンは、左の翼が無くなつたせいでバランスを崩し倒れた。地上部隊はその大きな隙を狙つて武器を振り落とされていたがドラゴンの纏つている雰囲気が変わつた。それに気づいたブラットと龍也、あと歴戦のハンター達で後のハンターは、そのまま突つ込んでしまった。

するとドラゴンの周りの地面が溶岩の様に溶けていった。周りに居たハンター達は、足元から溶けていき崩れる様に倒れ地面に触れた所から皮膚が蒸発して生きながら燃えていった。

辺り一面に肉が焼ける臭いと生きながら焼かれた人の呻き声が響いた。遠巻きに見ていた新米ハンターが余りにも酷い臭いと惨状を見て胃の内容物を吐き出していた。

そんな時にやっと東城壁門に辿り着いた援軍は、その光景を見て唾

然としていた。だがいつまでも唾然としている訳には、いかないの
で援軍の指揮をする事になったアベルが急いで今出ている地上部隊
と交代するために指示をだした。

「今出ている地上部隊を一度城壁門内に一度退避させる」

そう指示し、熟年ハンターが戦地に向かって行った。今出ているブ
ラットと龍也は、それを聴いて交代していった。ブラットは、アベ
ルにドラゴンの情報を簡潔に説明し城壁門に入って行った。
ドラゴンは、高熱を発しながら倒れた場所から動かなかつた。

【中央司令部】

ロベルト市長は、先程戻ってきた国軍との伝達係の男からの報告を
聴いていた。

「国軍は、二千程の兵を先行させ夜の内に到着するそうです。上将
軍からは、『夜まで持ちこたえてくれ』だそうです」

「そうか分かった」

そう言いロベルト市長は、現状確認をした。ドラゴンが現れてから
殆んど魔獣が四方に逃げて行ったがまだ一部の魔獣が残っていて
十分な数の援軍を東城壁門に送り出せないでいた。先にアベル率い
る援軍先見隊が行ったが持つかどうか分からないでいた。ロベルト
市長は、いくつも入って来る情報を聴きながら東に兵を回せないか
考えていた。

【東城壁門】

ドラゴンは、倒れた状態のまま動こうしなかった。熱は、かなりの広範囲に拡がっていてバリスタを撃つても矢が途中で溶けてしまい魔術は、確実にすぐ仕留められないため多用する事は、避けた。

日が傾きだした頃、ドラゴンに動きがあった。翼は、再生してないけど先程の戦いで付けた傷は、完治していた。ドラゴンは、そのまま立ち上がり突っ込んで来た。魔術師は、急いで壁を作り出したが直ぐに破られ待機していた地上部隊が巻き込まれた。

地上部隊は、急いで右翼、左翼に展開しドラゴンを囲み四方八方から攻撃を仕掛けた。ドラゴンは、尻尾を巧みに操り後方の敵を寄せ付けないでいた。たまにドラゴンの尻尾に当たり遠くに飛ばされる兵が居た。

瑞希も魔術の乱射による大量攻撃でドラゴンに火炎球を撃たせない様にしていた。マルチダも瑞希と同じ様な事をし、ブラットと龍也は、なんとかドラゴンの腹の下に潜り込んでダメージを与えていた。日が暮れ夜になっても壮絶な戦いは、続いていた。国軍は、二千は、夜に来て一緒に戦い日が上がる頃にドラゴンは、逃げて行った。

なんとか生き残った皆は、Sクラス級ドラゴンを撃退した喜び半分東城壁の部隊や魔獣に殺られた仲間達の被害に嘆いた。

昼頃には、残りの国軍もきてグランデイス周りの魔獣を駆除していた。

こうしてグランデイス魔獣大進行は、幕を下ろした。ハンターや街に住む多くの市民に傷を残し……………。

第二十一話：その後

あれから一月程経ち武器都グランデイスから離れ瑞希達は、目的地へ行くため商道を歩いていった。旅の仲間、マルチダが新しく加わった。マルチダ曰く『ミスギが此から何処までいくか観てみたい』そう言い着いてきた。マルチダは、家も売り払い荷物を持って来た。瑞希達も何か問題も無いため二つ返事で承諾した。瑞希は、空を見上げた。空は、何処までも蒼く綺麗であった。そんな空を見上げながら一月前のこと思い返していた。

【城壁外】

戦いから丸一日がたった。今は、皆で死んだ者達の為に墓を作ったり、墓穴を掘っていた。

この戦いで死んだ人は、ハンター、駐屯軍、国軍合わせて五百二十三人の者達が死んだだが奇跡的に市民には、死者が出なかった。やはり皆が必死に戦った成果だった。だが東砦の兵士や戦って死んだ者達の家族や仲間達に大きな爪痕を残していた。

ロベルト市長は、そんな中生き残った者達で墓を作る事を決めた。皆は、これに反対する者は、誰一人居なく自主的に参加していた。三日程で総ての墓が出来た。

ロベルト市長の考えで葬儀は、一斉に行われる事になった。その日は、静かに皆、悲しみに包まれながら過ぎていった。

【二週間後】

グランデイスには、防衛兵が少なくなった為、国軍の一部が残ることになった。

街は、悲しみから脱け出し今は、魔獣大進軍とドラゴンの撃退に成功でお祭り騒ぎになっていた。

瑞希達も相変わらずギルドの酒場に居た。マルチダとブラットがガバガバ酒を浴びる様に飲んでいるがバルド横に居るバルドは、そんな二人を見ながら飲んでいた。

瑞希は、この世界の人々は、かなり強い人々が居ると思いつの間にお祭りを見ていた。今酒場には、自分達しか居ないがいつの間にか酒を飲んだ龍也とブラット、マルチダの三人は、酔い潰れて今は、寝ていた。ハルドは、未だに少しずつ酒を飲んで何かを思い更けている。

お祭り騒ぎは、七日間昼夜問わず続いた。祭りが終わり瑞希達は、グランデイスを発つことにした。

瑞希達が発つた後、武器都グランデイスの大広場には、街のシンボルに此からなる巨大な慰霊碑が建てられる事になった。

『アベル・ロツクンハルト、カシル・ラングイット、バハムス・ラザ、・・・・・・・・・・』

そして慰霊碑には、死んだ者達の名前が刻まれた。

慰霊碑の最後には、その人達がどう言う人達なのかを後世に伝わる為にこう書かれた。

『この街を護り死を帰り見ずに愛する者達を護り抜いた英雄達』

唯それだけ書かれている慰霊碑は、この街が有る限り皆に大切にされていくであろう。

今回の戦いは、皆に大きな爪痕を残して逝った。だが街は、活気に未知溢れている。皆が悲しみ、心に大きな穴を開けて一生塞がらないかも知れない辛い思いを抱いて人生を歩んでいくのでは、無く明日へ希望を胸に抱いて前向きに歩いていく地面を見ずに大空を見ながら。それは、かなり凄い事なのかも知れない。

この世界では、当たり前前の様に人が死んで逝くそれは、変えようの無い運命なのかも知れない。だがそんな辛い運命の中で人は、前向きに歩いていく事を無意識な内に知ったのかもしれない。

死んだ者達は、帰って来ないならばその人の分まで自分達は、幸せになれば少しは、死んで逝った者達が救われると思いつながら笑顔で毎日毎日過ごしている。

人は、辛い事の後には、何が待っているのかは、知らないでもそれが幸せの明日に続いて居ると信じて此からも歩んでいく。

第二十二話：拾い物

【グランデイスから発って半月】

「たく、何時までこんな森に居ないといけないんだ！」

「そう言わない無いでくださいよ。マルチダさん、これも大事な依頼なんですから」

瑞希がマルチダを宥めていた。

そう瑞希達は、森の中に居る。たまたま寄った町のギルドで上級ハンターが居ない為に討伐依頼をうけた。

依頼内容は、森の奥に住んでいたはずのAクラスモンスターツインスネイクが町の近くに出没して被害にあっているための討伐なのだ。三日入っても見つからないでいてそれにマルチダが苛立っていた。取り敢えず四人は、二人づつに別れて探し回り夜になったらテントを建てた場所に戻ってくると決めて今森の奥に居る。

マルチダは、早く戻って酒を飲みたいと毎日言っていた。そんなマルチダを宥めながら瑞希は、どんどん森の奥に進んで行くするとマルチダが瑞希に向かって言った。

「ミスキ、此からも二手に別れるぞ、お前ならツインスネイクことき直ぐに倒せるだろ」

「倒した事は、一回有るから倒せると思いますけど」

「じゃあ、二手に別れるからな夜になったらテントに戻ってこいよ」

マルチダは、そう言い足早に森の奥を進んで行った。瑞希は、マルチダが見えなくなるまでその場に立ち続けマルチダと別の方へ向か

った。

一時間程歩いていると大きな洞窟を見つけた。瑞希は、モンスターが中にいそうと考え中に入って行った。

洞窟の中は、暗い為そこら辺に落ちていた木に火を点け松明の代わりにして進んで行く。洞窟は、以外に長くかなり歩き辛かった。地面は、洞窟内の湿気のせいで苔がびっしりと生えており滑りやすかった。

進んだ先には、大きなドーム状の場所に瑞希は、出た。かなり広く瑞希が持っている松明では、全体を照らせ無い程だった。真ん中程行くと大きなモンスターの白骨化した物があった。

(これは、でかいな何のモンスターだろう)

瑞希は、そう思いながら骨を見ていて何かがひかかっていた。そして(あ！ドラゴンに似ているそうかこれドラゴンの骨なんだ)

瑞希は、頭にひかかっていた物がとれてスツキリしていた。ふとドラゴンの骨の真ん中に鳥の巢の様な所に拳大の球体型の石ぽい何かがある所があった。瑞希は、何か気になってたので持ち帰る事にしてバツクの中に入れていた。

それから洞窟を探したが何も居なく元来た道を引き返していった。洞窟から出ると日が傾き始めていたので瑞希は、急いでみんなが居る所に向かった。

瑞希がテントにつく頃には、皆帰って来ておりブラットが焚き火で魚を焼いて夕食の準備をしていた。

「おう、ミスキ戻って来たか、ツインスネイクは、見付かったか？」
ブラットが魚を焼きながら聞いてきた。

「いや、途中洞窟があったから調べて見たけど何もなかった、そう言えばマルチダさんと龍也は、何処に居るの？」

「あの二人は、今テントの中で寝てる、マルチダは、途中角狼の群に遭遇して少し疲れて寝てる龍也も馴れない散策で疲れてこっちも寝てる、ミスキも疲れてるなら寝てもいいぞ飯が出来たら呼んでやるから」

「いいです、そこまで疲れてませんから」

「そうか」

瑞希は、そう言い焚き火の近くに有る丸太に腰を下ろした。

夕食は、三十分程で出来た。瑞希は、マルチダと龍也をお越し四人で夕食を食べ軽く雑談した後、交代で日の番をした。講して夜が更けていった。

【次の日の朝】

瑞希達は、朝食も食べ終わり今は、皆で散策していた。今日、散策している場所は、森の奥では無く村の近くを散策する事にした。すると村の近くの森の中に大きな穴があった。瑞希が火の球を作り落とすと何かに当たった音がした。すると地面が揺れ始め穴から頭が二つ有る蛇が出てきた。

「やっと見付けたぜ！」

マルチダがそう叫んだ。

「さっさと倒して旨い飯を食いに行くぞ」

ブラットもやっと見付けて喜んでいた。龍也は、何も言わないで刀

を抜いた。瑞希は、早速魔術の詠唱をしはじめた。
ツインスネイクを倒すのに時間は、余り要らなかった。瑞希とマル
チダによる魔術で直ぐに弱らせ龍也とブラットがそれぞれ頭を切り
落とした。

三十分程で狩り直ぐにギルドに直行した。討伐依頼の報酬を受けと
ると直ぐにマルチダが酒を頼み飲み出した。瑞希達三人は、そんな
マルチダを見て一つため息を吐き酒を飲み始めた。

夜まで飲んでギルドの宿泊施設に泊まり次の町へ向かった。

第二十三話：要塞都バグラムの一日目と孵化

【城塞都】

それは、今瑞希達が居る国の王都を守護する東西南北にある四つの都市の事である。城塞都は、それぞれ分厚い城壁に囲まれその周りをさらに四つの砦に守れている都市である。難攻不落では、無いもののかなり落としにくい構造になっている。

瑞希達は、その一角北の城塞都バグラムに来ていた。ブラット曰く、「目的地は、このバグラムを抜けたら直ぐ」だそうで誰に会うかも秘密だそうでは、王都に繋がる王道の手前の検問所で足止めを喰らっている。門番が言うには、今年は、豊作で王都に例年の倍近くの沢山の物が王都に流れて来ておりその際に密輸が増えている為、時間が掛かっても厳重に検査をするようにと王から命令されているため一人一人荷物とかも確りやるせいで列ができ最低でも三日間かかる。

検査の順番が書かれた紙をもらい瑞希達は、検問所近くの宿を借りた。王都付近の街や都市は、国軍に守られている為モンスターや魔獣の数が極端に少ないその為ギルドの依頼は、荷物運びや店番、これから出ていく商人の護衛など討伐系は、無かった。その為一度別れて好きにこの街を観光する事になった。

瑞希は、大通りを一人で歩いていた。左右のには、露店や店が並んでいる。

色んな店があり一階は、食べ物屋で二階から上が宿屋や武器屋等沢山あった。街の中心の噴水が有る大広場まで来ると大道芸をやっている者などが居た。瑞希は、大広場まで来るとまた元来た道を引き返した。すると偶々目を向けた先の脇道に廃れた魔道具店があり瑞希は、何かに引っ張られるように魔道具店に入った。

「いらしゃいませ〜」

店員の間延びしたやる気が無さそうな声が店に響いた。店は、独特の雰囲気を持つていた。棚に並んでいるのは、歪な形をした物も有れば普通の物もあった。

「何か探しているのかい？」

ビクッ！！

瑞希は、いきなり後ろから声をかけられてビクリしたが直ぐに応えた。

「いえ、偶々この店が見えて中が見たくなっただけ」

「へ、でいいの見付かりました」

「いや何かこれと言った物が無くて」

「そうですかでは、ごゆっくりと」

店員は、そう言うのとカウンターまで引っ込んでいった。それからかなりの時間瑞希は、その店に居たが商品を見ていたら日が暮れてきたのでそろそろ帰ると思い店を出た。

「ありがとうございます。またのお越しを御待ちしております」

瑞希が店を出た後……

（少し面白そうな人だなこれからこの世界が大きく変わるかもしれない）店員は、店の中でクスクスと小さな声で笑っていた。

そんな事は、知らず瑞希は、宿に向かっていた。まだ大通りには、

露店や店がやっていて昼の様に賑やかで瑞希は、軽く露店を見ながら歩いていった。

瑞希が思っていたより速く宿に着いた。宿泊客や外から来た客が沢山居る五月蠅い一階の食堂には、マルチダとブラットが酒を飲んでいた。

「また酒を飲んでいるんですか」

瑞希は、二人に近づき言ったら二人が振り向いた。

「おう、ミズキか速かったな」

「はい、余り良い物が見つからなかったものでそれより龍也は、まだ帰って来てないんですか」

「ああ、あいつは、まだ帰って来てないぞ多分まだ何処かをほつき歩いてるんじゃないか」

「そうですか、じゃあその内戻って来ますね。すみませうん」

瑞希が直ぐ近くい居た支給の女の子に声をかけた。支給の女の子は、直ぐに来て何なのか聞いた。

「何の様ですか？」

「注文良いですか？」

「はい！」

支給の女の子は、元気良く応えた。

「カシア酒一つと干し肉とパンとスープを一人前下さい」

瑞希がそう言うのとマルチダが追加の注文をした。

「後、麦酒ジョッキで二つと干し肉追加でもう三人前」

マルチダがそう言うのと支給の女の子は、注文を繰り返して聞いた。

「はい、カシア酒一つと麦酒がジョッキで二つ、干し肉が四人前とパンとスープが一人前ずつですね？」

「はい」

瑞希が承諾し支給の女の子は、調理場の奥に消えていった。料理が届く頃には、龍也も帰って来ており瑞希と同じカシア酒と川魚の丸焼きを頼んでいた。

それから他愛もないバカな会話をして笑ったりした。酒を飲み終わる頃には、もう深夜で四人は、部屋に帰った。男三人は、階段上がって直ぐの部屋でマルチダの部屋は、その右隣だった。

瑞希は、ベッドに入ったら直ぐに眠りに入った。眠ってから数時間後瑞希達がグッスリ眠って居るなか瑞希の袋の中から何かが出てきた。

第二十四話：要塞都バゲラムの二日目と二体のドラゴン

瑞希は、朝頭痛によって起きた。昨日飲み過ぎた酒のせいで二日酔いになりかなり目覚めの悪い朝になった。ふとベッドの中に何かが入っていると思い捲ってみると………

「な、なんじゃこりゃー………!」

瑞希の叫びは、宿中に響き渡り同じ部屋のブラットと龍也は、飛び起きた。

「ど、どうしたミズキ！何かあったか？」

ブラットがそう聞き瑞希は、ブラットの方を見て口を開いた。

「い、いや何て言うか？そのあのベッドの中にこんなのが居て………」

瑞希は、キョロキョロしながらもそう言い両手で抱えたのは、三センチ程の二匹の幼体のドラゴンだった。二匹は、それぞれ違う色をしていて一匹は、雪の様に白いドラゴンもう一匹は、闇よりも黒いドラゴンだ。二匹は、まだ目が覚めていないのか気持ち良さそうに眠っている。

「………」

長い沈黙の後、ブラットがやっと口を開いた。

「ミズキそれは、………何処で拾ってきたんだ？」

てられるのは、一部の限られた奴だけだからな」

「へへえ、そうなんですか」

【ドラゴンの孵化】

ドラゴンが孵化するには、大量の魔力が必要である。その為大量の魔力保持者が持っていないと孵化せずそのまま有る場合がよくある。

ドラゴンは、高位種になればなる程魔力が沢山居る。瑞希が今回孵化させたのは、ホワイトドラゴン、ブラックドラゴンで上から数えた方が早いぐらいの高位種であるが二匹は、どちらも元は、同じ母体から生まれ光色が闇色のどちらが多かったかで色が決まるこれは、まだ世間一般には、知られていない事実である。

そしてドラゴンは、魔力を与えてくれた生物の魔力の波長を読みそれを親として認識し、成体になるまで感情が解り合うことになる。

【宿の部屋（瑞希、ブラック、龍也が泊まってる）】少し経ち二匹のドラゴンは、起きた。

「キュルルルーーーー」

可愛らしい声を上げ背筋を伸ばしていた。

「お！起きたのかこのドラゴン」

龍也がそう言い頭を撫でようとした瞬間……

「いでててててて」

白いドラゴンに龍也は、指を噛まれた。龍也は、かなり痛そうにしていて半泣き状態で指を庇いながら擦っていた。

「起きたか。それでミズキそいつらの名前は、考えてあるのか？」

「うん、白いのが雪の様に白いからユキでこっちの黒いのが闇の様に黒いからヤミって名前にした」

「キュピィィ（ユキ）」

「キュルルル（ヤミ）」

瑞希は、そう言い二匹のドラゴンは、気に入ったのか嬉しそうに鳴いていた。

「じゃあ、そろそろ飯にするか」

ブラットは、ベッドから立ち上がると部屋の扉の方へ歩いて行った。瑞希は、とりあえずユキを頭の上に乗せヤミを懐に入れて龍也と共に一階食堂に向かった。

【一階食堂】

食堂を歩いているとかなりの視線が瑞希に向けられていた。やはり珍しいドラゴンを頭の上に乗せているとかなり目立つらしい。

ブラットは、食堂の奥の方に居て既にマルチダも来ていた。

「おはようございます。マルチダさん」

瑞希は、マルチダに声を掛けながら座った。瑞希が来たのに反応して口を開いたら

「おはよう、ミズキとここで朝、叫んでい、た、け、ど……」
「……何だそれミズキ？」

マルチダは、瑞希の頭の上のユキを指を指しながら聞いてきた。瑞希は、ユキと懐に居るヤミを机の上に置いて説明し出した。最初の内は、渋い顔で聞いていたが段々もとの顔に戻っていき最終的にユキとヤミを撫でてニヤニヤしていた。

「よし！大体は、分かった。だからこいつらちゃんと飼えよ」

マルチダは、ユキ、ヤミを撫でながら今だにニヤニヤしながら言った。それを見て龍也が

「何で俺の時は、噛んでマルチダさんの時は、噛まないんだ!？」

瑞希は、ああとした顔し言った。

「それは、何か龍也に触られるのが嫌だったんだよ」

「何でそんな事分かるんだよ!？」

「そんなの分かるんだから仕方がないじゃん!」

龍也が少し強く言うと瑞希が少し怒りながら返した。

「ああ、言つの忘れてたけどドラゴンが親と認めた生物は、成体になるまで意志や感情の疎通が出来るらしいだから瑞希が言ってることは、あながちユキとヤミの感じている事だな」

龍也は、そう言われ落胆し瑞希に軽く慰められる様に肩を叩かれた。朝食は、メニューには、無いが特別にユキとヤミの為に生肉を頼ませて貰った。他には、何事も無く食べ終わり。いつもと違う事は、瑞希の周りに居るユキとヤミに向けられる奇怪な視線だけだった。瑞希とマルチダは、宿の部屋に戻りブラットと龍也は、そのまま觀光に行った。

部屋に着くと直ぐにマルチダは、ユキとヤミを撫でている、かなり気に入ったらしい。瑞希は、そんな光景を眺めながらベッドに横たわって見ているといつの間にか寝ていた。

【夕方】

ブラットと龍也は、一緒に行動していたのか早めに部屋に帰ってきた。瑞希は、そんな部屋の扉が開く音で夢の世界から現実へ戻ってきた。

起き上がって見るとユキが腹の上に乗って居てヤミが右隣で蹲って寝ていた。二匹は、瑞希が起きると目を覚まし体を猫の様に擦り寄せてくるので頭を撫でてやると気持ち良さそうな感じが伝わってきた。

瑞希は、二匹を撫でながらブラットの方へ向いた。

「今日は、早いんですね」

「ああ、昨日の内にあらかた見たいの全部見て回ったからな。余り

良い物が見付から無かったからな。詰まらんから速く帰ってきた」

「ふん、そうなんですか。じゃあ、龍也も？」

瑞希が聞くと龍也は、直ぐに応えた。

「まあ、大体そんなところブラットさんには、さっき帰って来る途中に会って一緒に帰ってきた」

瑞希は、それを聞いて自分も昨日行った店に行きたくなつたが今は、ユキとヤミの事で頭が一杯だった。

その後は、昨日同じように酒を飲んで下らない話をしユキとヤミの為に生肉を沢山頼んで腹一杯食べさせた。また四人は、夜中まで酒を飲みマルチダ酔い潰れてブラットがマルチダを担いで部屋まで運び寝かした。

瑞希は、ユキとヤミと一緒に静かに眠りに着いた。

第二十五話：要塞都バゲラムの三日目とルノーノーツ到着

三日目の朝瑞希は、いつもより遅く起きた。時刻は、昼少し前でユキとヤミは、既に起きて部屋の中を歩き回っていた。

「おはよう……ユキ、……ヤミ」

「キュピイイ（ユキ）」

「キュルルル（ヤミ）」

二匹は、直ぐに返事をし瑞希の近くに来た。そんな二匹の頭を瑞希は、撫でながら今日、検問所を通る日だと考えていたら扉が開いた。

「おーミズキ起きたのか」

入って来たのは、食事を両手に持っているマルチダだった。

「おはようございます。マルチダさん……処で何で食べ物を持って来ているんですか？」

「ああ、これは、だな。ユキとヤミがなお前の側を離れようとし無
いから仕方なくこの部屋で昼でも食べようと思ったからな。わざわざ一階食堂から飯を持って来たんだ。お前の分も有るぞ」

「そうだったんですか。じゃあ、お言葉に甘えて貰います」

瑞希は、窓側に有るテーブルの上を軽くかたずけてマルチダから食べ物を買って並べたていった。

「マルチダさん」

「何だ」

瑞希がマルチダに声をかけたがマルチダは、返事をしながらユキとヤミに満面の笑みを向けながら生肉を与えている。

「ユキとヤミの事かなり可愛がっていますよね」

瑞希がそう言うとマルチダは、残りの生肉を全部ユキとヤミに与えて瑞希の方を見て真剣な顔になって語りだした。

「そりゃ可愛いに決まっているだろ。あのつぶらなあどけない瞳やあの小ささや汚れ一つ無い綺麗な白色と黒色、そして鳴き声 e t c . e t c .」

マルチダが真剣な顔から緩みきった顔になりユキとヤミの良いや可愛い所等マシンガン様に語りだした。瑞希のマルチダイメージは、がさつたけどカッコイイな女の人からユキとヤミの事になるとバカになると言うことが付け足された。

それからかなりの時間マルチダの語りのせいで頭が痛くなりそうな時にやっと帰って来たブラットと龍也のお陰で解放された。

「そろそろ俺達番になるから検問所に行くぞ」

ブラットが言いマルチダは、ユキとヤミを撫でて自分の荷物の準備をするために部屋へ戻っていった。

瑞希は、特にかたづけ物も無くパツパツと旅用の外套をはおりユキとヤミをどうやって連れて行くのかベッドに座っていたらユキが

瑞希の体を一生懸命登っていた。瑞希は、そんなユキを眺めていたら頭の上に乗ろうとして肩の所で頑張っていた。瑞希は、ユキを掴んで頭の上に乗せヤミを首辺りの服の中に首から上と前足が出るようにした。

【一階フロント】

ブラットと龍也は、既に用意が出来ており。三人は、部屋を出て一階のフロントが有る広間でマルチダを待っていた。

【三分後】

マルチダは、二階から降りてきた。

「待たせたな」

マルチダは、そう言いながらブラットにマルチダが使っていた部屋の鍵を投げ渡した。それをブラットが確認するとフロントに居る従業員に二つの部屋の鍵を渡し

「よし、揃ったな。それじゃあ行くぞ」

ブラットは、言いながら出口に向かい。マルチダは、瑞希の近くにまで来て頭の上に乗っているユキを撫でていた。

「はい」

「へい」

瑞希と龍也が返事をし、マルチダは、ユキを撫でるのを止め三人は、出口に向かつて歩いて行った。

瑞希は、検問所に来る途中色んな人に奇怪な目で見られていた。やはり頭の上と服の所にドラゴンを連れて居ると何かと目立っているらしい。瑞希は、今一気に留めず流れる様な歩みで検問所まで行った。

【検問所】

まだ順番が来ていないので検問所の中の待合室で順番が来るのを待っていた。ユキとヤミは、瑞希の頭と服から出ようしず窓の外の行き交う人を黙って眺めている。

扉が開き瑞希達の番が近いと検問所の番兵が伝えに来たので瑞希達は、直ぐに検査に向かった。瑞希の頭の上と服の中に居たユキとヤミが少しちらほら聞かれたが特に困った事もなく検査員から通過許可書を貰い門に向かった。門番に通過許可書を見せて門を通して貰った。

門を潜ると地平線の彼方まで続く草原が広がっており一本の幅十メートル程の道が黄緑色の草原に真っ直ぐ続いている。その先に少し小さく街が見えまたその街の左奥側に王都が見えていた。

「この道を真っ直ぐ進んで次の街が有る。そこが目的地だ」

ブラットは、そう言い歩いて行った。マルチダは、先程のブラットの言った言葉に何かひかかったのか歩きながら思考の海にダイブしていた。

日が沈みかけ夜になる前に目的地の街、ルノーノーツに着いた。

第二十六話：公爵家

【アビアル第三大陸】

今瑞希達がいる大陸で今この世界では、二十三大陸発見されており第一大陸から中心に幾つもの二十三大陸がある。大陸には、魔族と人族が居り日々戦い続けている。今の二十三大陸中二大陸づつ魔族だけの大陸と人族だけの大陸がある。

【グラコニアス帝王魔国】

瑞希達がいる国でアビアル第三大陸の魔族側の国であり約千五百年近く続く大国であり今は、アルサ・クラシバルが治めている。

アビアル第三大陸には、魔族側と人族側の小、中、大国合わせて二百三十七ヶ国の国が点在している。

アビアル第三大陸の五大国と呼ばれる五つの強大な国がある。五大国は、魔国三大国のガリアス国、サリアナ魔族国、グラコニアス帝王魔国で人国二大国は、神聖アメリカ共和国、ラファニア王国の全五国がアビアル第三大陸五大国でこの五国を中心に他の魔族国と人族国が付き従い戦争している。

【ルノーノーツ】

瑞希達の目的地でグラコニアス帝王魔国の王都ビノテンと四つの要塞都との間にある元四大公爵に治めていた街で今は、二大公爵の一つアスク・クラシバル公爵が治めている。クラシバル公爵は、四大公爵がある時代から続く由緒正しい家系でありグラコニアス帝王魔国の現魔王アルサ・グラコニアスの実弟で王族である。

【ルノーノーツ】

ブラットは、瑞希達三人を連れ真つ直ぐ迷うこと無く何処かに向かっていた。街は、賑やかで北の要塞都バグラム程では、無いがそれなりに賑やかだった。街の人は、外から来た人に余り興味は、無いが瑞希が頭の上に乗っているユキと服から顔と前足を出しているヤミは、かなり気になっていた。瑞希は、そんな視線に慣れたのか気にし無いでブラットの後を歩いている。

龍也は、色んな物が珍しいのかキョロキョロ周りを見ている。マルチダは、今だにブツブツ言いながら思考の海にダイブしている。ユキとヤミは、産まれて間もない為、見る物全てが珍しく龍也見たいにキョロキョロしている。皆が色々な行動を取っていた時、街人の一人がブラットに話し掛けて来た。

「よう、ブラット帰って来たのか！」

その人は、少し大きめな声で言った。

「ああ、さつき着いた所なんだ」

ブラットは、久しぶりに会えた飲み仲間に来て嬉しそうにしてい

る。

「そうかじゃあ今から一杯やらないか？」

「嫌、先に寄らないと行けない所があるからさ行けねえわ。まあ、当分この街に居るからその時に」

「ああ、分かったまた今度お前の土産話を肴に飲もうな」

ブラットは、片手を上げた。ブラットの飲み街は、賑やかで北の要塞都バグラム程では、無いがそれなりに賑やかだった。街の人は、外から来た人に余り興味は、無いが瑞希が頭の上に乗っているユキと服から顔と前足を出しているヤミは、かなり気になっていた。瑞希は、そんな視線に慣れたのか気にし無いでブラットの後を歩いている。

龍也は、色んな物が珍しいのかキョロキョロ周りを見ている。

マルチダは、今だにブツブツ言いながら思考の海にダイブしている。ユキとヤミは、産まれて間もない為、見る物全てが珍しく龍也見たいにキョロキョロしている。

皆が色々な行動を取っていた時、街人の一人がブラットに話し掛けて来た。

「よう、ブラット帰って来たのか！」

その人は、少し大きめな声で言った。

「ああ、さつき着いた所なんだ」

ブラットは、久しぶりに会えた飲み仲間に来て嬉しそうにしている。

「そうかじゃあ今から一杯やらないか？」

「嫌、先に寄らないと行けない所があるからさ行けねえわ。まあ、
当分この街に居るからその時に」

「ああ、分かったまた今度お前の土産話を肴に飲もうな」

ブラットは、片手を上げた。ブラットの飲み仲間も片手を上げ近くの酒場に入って言った。

「すまん。少し時間くつちまった」

「いえ、別に気にしませんよ」

瑞希は、ブラットにそう返しブラットは、それに軽く礼をしまた歩いて行った。

日が完全に落ちた頃にブラットの言う目的地に着いた。

その場所は、二大公爵の一人アスク・クラシバル公爵の館だった。マルチダは、それを見て

「やはりな」と誰にも聞こえない程の小さい声で呟いた。

館の手前の門の両脇には、館を守る公爵の私兵が居るがブラットの顔を確認すると何事も無いように四人を通した。

瑞希達四人は、門を抜け中庭を横切っている。中庭では、十何人の私兵が訓練をしていたがブラットを見て手を動かすのを止めて声を掛けようとしたが瑞希達を見て声を掛けるのを止め遠巻きに眺めている。

そんな中庭を抜け館の正面玄関に着いた。やはり此所にも私兵が居て門とは、違い止められた。

「何だ」

ブラットは、短く言った。

「此所は、アスク・クラシバル公爵の館。貴様何用か!？」

右側に居る私兵にそう言われたブラットは、呆れた顔になり答えた。

「クラシバル公爵の私兵隊長は、クラシバル公爵近衛隊長の顔も憶えられないのかな」

ブラットが皮肉と棘の有る言葉で返した。

「クツクツ、久しぶりだなブラット何日ぶりだ」

私兵隊長と呼ばれた者は、笑いながら言った。

「さうあ、余り憶えていないな」

「そんな事よりブラット、後ろの三人は、誰誰？」

左側に居た私兵が話を割って話した。声からして女の人である事は、分かる。

「ああ、後ろの三人の内二人は、ちょっと訳有りでなで最後の一人が」

ブラットが紹介しようとしたらマルチダが外套のフードを外してブラットの言葉に割って入った。

「オレ名は、マルチダ・ファーウエン魔術師でこいつの師匠だ」

マルチダが言うと二人は、その名を聞いて驚いた顔をした。

「マルチダ・ファーウエンってあの武器都に居てこのバカと二人で特Aモンスター足止めをした！」

左側の女私兵が大きな声で言った。

「ああ、そうだが」

マルチダは、少し引きながらその事を肯定するといきなり手を繋がれ

「私あなたのファンなんです！！」

マルチダは、ドン引きしながら他の三人に助けを求めた。

「ああ、こいつも魔術師でなたまにお前の話を聞かせて興味を前から持ってたんだがあの話をしたらこんな風になってな・・・」

ブラットは、申し訳なさそうに頬をかきながら言った。

龍也は、自分には、どうしようも無い的な感じで目を合わせない様
にしている。

瑞希は、深くため息した後マルチダを助ける為に自分もフードを取
った。

「初めまして、マルチダさんの弟子の瑞希 矢倉と言います。よろ
しく」

続いて龍也も自分名を言った。

「俺の名前は、龍也・日下部って言うんだ」

瑞希がそう言うと女私兵は、マルチダから手を離し瑞希の方を向いた。

「すみません、取り乱してしまい見苦しい処を見せて、私の名前は、エブア・アスタロツテと言います。一樣、公爵家魔術師私兵隊に居させて貰っています。」

エブア・アスタロツテと名乗った人は、軽くお辞儀をし被り物を取った。

外見は、人形で特に変わったところは、無い。

「俺の名前は、カシバ・バルバだ。さっきブラットが言った公爵家私兵隊長の任に就いている。よろしくなミスキ、リュイヤ」

「よろしく」

「よろしくな」

瑞希と龍也がエブアとカシバと握手をしてエブアがおもむろに口を開いた。

「ところでミスキ……さん？」

「あ！瑞希でいいです。で何でしょうか？」

「その……頭の上に乗って居るのって本物ですよね」

「ああ！忘れてました。頭の上に乗って居る白いドラゴンは、ユキで服から顔を出している黒いドラゴンは、ヤミって言います」

「キュピィィ（ユキ）」

「キュルルル（ヤミ）」

二匹が自分の存在をアピールするように鳴いた。

「おい、ブラットお前の新しい仲間？は、かなり愉快だな」

ブラットは、カシバにそう言われまとも苦笑いをしたブラットだった。

それから四人は、エブアとカシバに質問攻めに合いおもむろにブラットが公爵様に会いに行かなきゃならないと無理矢理会話を打ち切り今は、公爵が居る部屋へ向かって居る。

館の中は、沢山の部屋が有り必要最低限の装飾がしてあり公爵の美的センスの良さが伺える。

そして沢山有る部屋の一つで止まるとブラットは、ノックをした。

コンコン

と木のいい音が鳴り中から入室の許可を聞いたブラットは、扉を開け入って行った。

「お久しぶりです。公爵様」

ブラットが軽く礼をすると残りの三人も釣られてお辞儀をした。

「そう頭を下げなくていいブラットとお連れの方。初めまして私の

名前は、アスク・クラシバルと言う今は、公爵と言う位に就いている」

クラシバル公爵がそう言うと四人は、頭を上げた。それを見たクラシバル公爵は、四人に座るように促し付き人に全員分のお茶を出すように言った。

「ブラット近衛隊長久しぶりだね。今回は、どう言うことが起こったんだね。そして三人の客人の説明も」

ブラットは、そう言われ瑞希と龍也とマルチダの説明をし瑞希と龍也の異世界から来た等を説明した。マルチダも初めて聞く所も有るが余り気にしないで聞いていた。

【五時間後】

瑞希達の話を終え一息着いたクラシバル公爵は、口を開いた。

「俄に信じられないがその事を抜いても君達に行く所が無いなら行き先が決まるまで此所に居るといい居る間色々やってもらうがね」

瑞希達は、クラシバル公爵に言われ喜び、クラシバル公爵は、ブラットにアイコンタクトでこの事を狙った過信犯だと聞いた。ブラットは、クラシバル公爵にそうだと返し公爵はため息を吐いた。

「今日は、もう夜が遅いからブラット近衛隊長に部屋を案内を頼み今日は、寝るといい。明日館の者達に紹介すから」

クラシバル公爵は、そう言い瑞希達四人を退出するのを見送り椅子

に座り三人に着いて考えた。

（あの三人が吉と出るか凶と出るか）そう軽く考えた後バカらしくなりクラシバル公爵も寝るために寝室に向かった。

第二十七話：公爵家の朝と魔術師隊

瑞希は、一人朝目覚めた。やはり寝馴れない布団と場所、あと公爵家の館に居るとい緊張で余り疲れは、余り取れなかった。瑞希は、近くで寝ているユキとヤミを一撫でし朝の空気を堪能していた。そんなまったりした時間を過ごして居るとドアがノックされた。

「おい！ミズキ起きてるか？」

ブラットが起こしに来たらしい。

「はい、起きてますけど」

「じゃあ、急いで着替えてきてくれ」

「はい」

瑞希は、寝間着から急いでいつもの格好になりユキを頭の上にヤミを服の中に入れて部屋から出た。

「よし、来たな。ミズキこれから残りの二人を起こしに行くからな、ミズキは、マルチダを起こして来てくれ。起こしたらリュイヤの部屋の前で待つてるからなるべく早く連れてきてくれ」

ブラットは、そう言い急いで龍也の部屋に向かった。瑞希は、ブラットに言われた通りにマルチダを起こしに行ったがマルチダは、すでに起きていていつもの格好だった。

「マルチダさん、ブラットさんが読んでいるんで着いてきてくださ

い

「へいへい、・・・フアアアア」

マルチダは、欠伸混じりで返事をし瑞希に着いて行った。龍也の部屋の前は、すでにブラットと龍也が待つて居て龍也は、今にも立つて寝そうな感じだった。

「全員揃ったな」

ブラットは、そう言い歩きだし後の三人は、ブラットに着いて行くある程度歩いた後、横幅四メートル程の大きな扉がありブラットは、少し止まって開けた。

中には、百人程の公爵家私兵が居た。

一番奥の席には、クラシバル公爵と公爵の妻が右側にそしてその二人から産まれただろう女の子が左側に座っていた。

公爵家族が座っている席の手前には、机が四列あり机の両側には、公爵家私兵が座っていた。一番右側の机の奥の右に昨日会ったカシバが座っており右から三番目の机の右側の席が空いておりそこがブラットの席だと何となく分かった。

瑞希達三人は、ブラットの後に続きクラシバル公爵の目の前まで来た。

ブラットは、いきなり頭を下げ後ろに居た瑞希、龍也、マルチダの三人も急いで頭を下げた。

それを見た公爵は、手で頭を上げる様に指示をだしブラット達四人は、頭を上げた。

そして公爵が立ったので四人は、皆に公爵が見える様に脇に移動した。

「昨日近衛隊長のブラットが帰ってきた。その時ある事情により

三人の者を新しくこの館に住ませる事になった。まず左から順に名前を言っ て貰おう」

クラシバル公爵は、言いはなった。一番左に居たマルチダは、皆に分からない様に眉を寄せ名前を言った。

「名前は、マルチダ・ファーウエンだ。これからよろしくな」

マルチダは、簡潔にそう言った。

「俺の名前は、リュイヤ・ヒカベ、よろしく」

龍也もフレンドリーに挨拶をした。

「僕の名前は、ミスキ・ヤグラと言います。これからよろしくお願ひします。ちなみにマルチダさんの弟子です」

三人は、名前を言った。最後までクラシバル公爵は、聞くとブラット達四人を席に座るように促した。

瑞希とマルチダは、一番左側の席で龍也は、ブラットの隣に座った。クラシバル公爵は、全員座ったのを確認すると

「今日は、まだ来ていない奴等が居るがとりあえず堅苦しいのは、無しにして新しい家族と戻って来た家族に乾杯」

クラシバル公爵は、右手に持った杯を高々に上げ言った。するとこの広間に居る全員が杯を上げ言った。

「乾杯」

乾杯が終わった後は、川が決壊したよう濁流の如く瑞希達は、質問攻めにされた。特に瑞希とマルチダは、魔術師達に色んな事を沢山聞かれマルチダは、目が回りそうだったと食事の後にぼやく事になる。

瑞希は、質問に出来るだけ答えられるなら答えていた。

質問には、例えば

「いつから魔術やってんの?」、

「なに色なの?」、

「ホワイトドラゴンとブラックドラゴンは、何処で手に入れた?」、

「二匹の名前は、何って言うの?」等々沢山の質問に瑞希は、答えられるだけ答えていった。

その間を縫って瑞希は、質問に答えながら周りを詮索していた。

ブラットの隣には、龍也が居て近衛隊の人々が瑞希の様に質問攻めにさせられていた。他の隊の人を見てもそれぞれ話しているだけだった。公爵を見てみると会った時とは、違い大分砕けた感じで家臣、家族と話していた。瑞希は、そんな公爵を見て

(公爵らしくない人だな)と思った。瑞希は、それから詮索するのを止めた。

朝の宴の為一時間程で終わった。

宴が終わった後瑞希とマルチダ公爵家魔術師隊に連れられて庭の魔術師専用の練習場に来ていた。

「今からマルチダ・ファーウエンさんとその弟子のミズキ・ヤグラさんに魔術を見せて貰いたいと思います」

公爵家魔術師のエヴァがそう言い他の魔術師達は、拍手しながら興味心な顔をしていた。マルチダは、一瞬嫌な顔をしてしようが無さそうにした。そんな空気を読んだ瑞希は、ため息をついた。

《空が曇り恵みが降り注がん 恵雨》

マルチダがそう唱えると急に空が曇り雨が降り始めた。マルチダが唱えた魔術は、複数の魔術師と連携して出来る天候操作の魔術だった。

マルチダが唱えた後すぐに瑞希が魔術を唱えた。

《風よ吹き荒れ全てを巻き込め 竜風》

瑞希が唱えると一瞬のうちに巨大な竜巻が出来て雲を取り込み霧散した。竜巻が消えた後空には、雲一つ無い青空が出来ていた。

エヴァを含む魔術師達は、口をだらしなく開けて瑞希とマルチダを見ていた。

いち早く現実に戻って来たエヴァが目を輝かせながら瑞希とマルチダに詰め寄った。

「す、凄いですお二人さん天候操作の魔術を一人でやってしまうのとそれを吹き飛ばす程の風魔術を唱えるなんて凄すぎます！」

エヴァは、瑞希とマルチダの手を握りながら力説した。マルチダは、（また、面倒臭い奴が居るな）と思っており、瑞希は、そんなエヴァに向けて困った顔をしていた。

エヴァは、瑞希とマルチダの手を握りながら頼み事を言った。

「あの〜お二人に頼みたい事がありましたー？」

「何だ？」

マルチダが答えた。するとエヴァは、後込みながら言った。

「私達公爵家魔術師隊に魔術の手解きをお二人にして貰いたいと思

っているんですけどいいですか？」

エヴァがそう言とマルチダは、二つ返事で了承した。瑞希は、今日何回目か分からない程の溜め息をついた。

第二十八話：エリス・クラシバル

【朝の公爵家館】

あれから数日瑞希は、魔術と錬金術をマルチダと一緒に公爵家魔術師隊に教えていた。

今日も昼過ぎから魔術と錬金術を教えることになっている。

それまで瑞希は、ユキとヤミを連れて一本の気が生えている庭に来ていた。

ユキとヤミは、庭ではしゃいで走り回ったりなど二匹でじゃれあっていた。

瑞希は、そんな平和でのどかな風景を見ていてだんだん瞼が重くなりゆっくりゆっくり瞼は、降りていった。

瑞希は、誰かが近くに居るのに気がついて瞼を開いた。

すると目の前には、白と黒の二匹のドラゴンと少女が戯れていた。

瑞希は、その光景に見とれていた。

瑞希は、物音をたてないで静かにその光景を眺めていた。

瑞希が起きたのに気づいたヤミは、瑞希に向かって鳴いた。するとユキと少女がこちらを向き近寄ってきた。

少女は、直ぐ隣まで来ると口を開いた。

「隣いい?」

瑞希は、直ぐに

「いい」と返事をし少女は、静かに瑞希の隣に座った。

「この子達は、貴方の？」
少女が膝の上に居るユキを撫でながら訪ねた。

「うん、白いのがユキで黒いのがヤミって言うんだ」
瑞希は、自分の真横に居るヤミを撫でながら言った。

「いい名前ね。そう言えば私の名前は、エリス・クラシバルって言うのよろしくね。貴方の名前は、確か……」

瑞希は、エリスの話聞いて（クラシバル公爵の娘さんか。あの時、公爵の横に居た）と考えながら瑞希は、自分の名前を答えた。

「僕の名前は、ミズキ・ヤグラって言うんだ。こちらもよろしく」

瑞希がそう言いエリスは、思い出したのか両手をポンと叩いていた。

「私を呼ぶときは、エリスでいいからその代わりに私は、ミズキって貴方の事呼ぶから」

エリスは、微笑みながら言った。

瑞希は、改めてエリスの容姿を見ていた。

顔は、整っていて綺麗で髪は、蒼穹蒼穹の様に蒼く澄んでいて身長は、余り高くなく百六十センチ前後の高さであり発育は、まだ幼さが残っている感じだった。

エリスは、確実に将来絶世の美女になると近隣諸国にまで密かに広まっっていて有名だった。

その為色んな貴族や他国の国王がエリスを嫁に貰おうとしたがクラシバル公爵は、娘のエリスの意思を第一としてエリスが認めた相手との結婚が一番いいと考えている為、全て断っていた。

エリスは、そんなことも知らずに今まで暮らしてきた。

瑞希もそんなことも知らずにエリスと会話をしていた。

「ねえねえ、ミズキ。ミズキは、少しの間旅をしてきたのよね？私にその時の話を聞かせてもらっていい？」

エリスは、可愛らしく瑞希にお願いをし瑞希は、直ぐに今までの旅の話をした。

瑞希が初めてブラットと会った時の話、それからマルチダと会って魔術の特訓をした時の話、魔獣大進行の話、ユキとヤミの卵を拾い孵化した時の話などを話した。

エリスは、その話を聞いて目を輝かせていていた。

するとエヴァ達に魔術を教えに行く時間になったので別れた。

それからほぼ毎日瑞希とエリスは、庭の中の一本だけ生えている木の下で会うようになった。二人は、時には、笑い合い昔話を読んで泣いたりなど楽しく幸せな時間を過ごしていった。

エリスは、そんな時間を過ごしてだんだん瑞希に惹かれていった。

瑞希は、初めての感情の為戸惑いまだエリスが好きになったのに気づいていない。

そんな二人を見ている公爵家一同や館に住む者達は、温かい目で見守っていた。

瑞希やエリス、公爵や館に住む者達は、この時間が長く永遠に続くと誰一人も信じていた。だが運命の歯車は、刻一刻と周り始め暗い暗い闇が幸せな日常を侵食していった。

そしてグラコニアス帝王魔国始まって以来の重大事件が起こった。

第二十九話：平穏な日常と終りの日

瑞希達が公爵家館に来てからはや一年近く経っていた。今日も平和な一日が過ぎようとしていた。

瑞希は、日課になっっているエリスとの会話に行っていた。

龍也は、ブラット率いる近衛隊と一緒に毎日毎日飽きもせず朝から晩まで訓練している。だが今日は、いつもと違い街の外に出てモンスターや魔獣の討伐に行っていた。

瑞希は、余りそう言うのには、参加せずただ毎日エヴァ達魔術師隊の面々に魔術と錬金術を教えていた。

庭に着くとすでにエリスが木の下で待っていた。瑞希は、小走りでエリスの近くに行った。

「今日は、早いんだね。いつもは、僕の方が早く来ているのに」

瑞希がそう言いながらエリスの隣に座りながら言った。

「いつもより早く起きたからたまには、早く来てミズキを驚かすのもいいかなって思って……」

エリスは、そう言い瑞希に向かって微笑んだ。

「そう言えば今日は、ユキとヤミを連れていないのね？」

「ご飯に夢中そうだったから置いてきた。でもまあ食べ終わったらここに来るでしょ」

瑞希も微笑みながら答えた。

数分すると雪の様に白いドラゴンと闇の様に黒いドラゴンが飛んで

きた。二体のドラゴンは、直ぐに瑞希の横にやって来て丸くなった。瑞希は、横で丸まった二体のドラゴン、ユキとヤミを撫で始めた。ユキとヤミは、気持ち良さそうに喉をならしていた。

ユキとヤミは、この一年でかなり成長した。二体は、両方とも空を飛べるようになっていて大きさも一メートル程まで大きくなった。だが二体は、まだまだ子供で毎日どんどんでかくなっていた。

瑞希とエリスは、静かに話し出した。最近の事や昔の話を……
かなり話し込んでいて気づいたら日が傾きだしていた。

「そろそろ帰ろっか？」

瑞希が話を中断して言った。

「そうね。楽しい時間は、早く感じるね」

エリスがそう言い瑞希は、同意した。

それから二人は、ユキとヤミを連れて館に戻っていった。館に着くと二人は、別れてそれぞれの部屋に戻って行くが今日は、お腹が減ったので瑞希は、自分の部屋に向かわず食堂に向かった。

食堂には、まだ訓練や任務からほとんどの者が戻って来ておらず瑞希は、一人で早めの夕食を食べ始めた。

半分位食べ終わる頃、いきなり肩を叩かれた。叩いた人を見るため後ろを向いたが誰も居なく直ぐ反対側を見ると青年が立っていた。

瑞希は、その人物を見て溜め息をついた。

「何かよう？」

瑞希は、青年を見ながら聞いた。すると青年は、直ぐ口を開いた。

「ミズキさん隣いいですか？」

良く見ると片手で食事が乗ったお盆を持っていた。

「別に良いけど、何で僕の隣？他にも沢山席空いているじゃん」

「そりゃあミズキさんと話が出たかったに決まっているじゃないですか。ミズキさんから魔術や錬金術の手解きをもらっている身だからですよ。後他にも何人が来ますよ」

「そうゆうものなの？」

「そうゆうものです」

青年は、そう答えた。瑞希と青年が話していると青年と近い年位の男女入り混じった四人若者グループが青年の近くまでやって来た。青年とそのグループの何人かが少しの間青年と喋っていると隣に居る瑞希に気づいた。すると若い女の子が瑞希だと認識して驚いていると直ぐ他のメンバーが同じように驚いていた。

「おい！何でここにミズキさんが居るんだよっーかお前いつ知り合ってたんだ」

グループの一番前に居た青年が口を開いた。それを期に一気に瑞希の隣に居た青年は、捲し立てられた。

瑞希は、黙ってそれを見ていた青年は、仲間に捲し立てられ机に伏せている。

「始めまして？私の名前は、アリス・グラス」

テセリナは、そう青年を紹介した途中に笑い出してしまった。
ハルキは、暗くなりながらも話した。

「で、改めて皆と一緒に食べていいですか？」

ハルキは、改めて皆が揃ったから瑞希に隣がいいか聞いた。

「別にいいよ。まあほとんど食べちゃったけどそれでもいいなら？」

瑞希が答えると五人は、皆口を揃えて言った。

「……」別にこちらこそ食事中すみません」「……」

五人は、一言一句間違えないで言った。瑞希は、そんな五人を見て
(息ぴったりだな) と思った。

五人は、席に着いた。席順は、瑞希の右隣にハルキ左隣にテセリ
ナ向かい側の左にから順にアリス、カマカヤ、アスコと座った。

「ミズキさんって何時から魔術始めたんですか？」

左隣に居るテセリナが聞いてきた。

「うん、魔術を始めたのは、たしか二年位前から余り長く魔術
をやってる訳じゃないよ」

「本当ですか！ たった二年でここまで凄い魔術師になるんですか！
？」

アリスが大きな声を出しながら言った。

「かあ、始めたの俺より六年遅いじゃん。俺、自信無くなってきた」

アスコが頂垂れながら言った。

「……俺、自信無くなりそう……」

カマカヤも続いてボソボソ言った。

「まあ、才能の差だな。俺達も地道にやればいつかは、ミズキさん観たいになれるかも知れないんだからさそんなに落ち込むなって」

ハルキが皆を慰める為に言った。

「まあまあ、そんなに落ち込むな。あたし達は、あたし達のペースでやっていけばいいんだから！」

テセリナが明るく言うと

「そうだなテセの言う通りだな。こんな事で落ち込んで居る暇があったら魔術の特訓しなきゃな」

アスコが言いアリス、カマカヤが頷いた。それからの会話は、どうしたら魔術が上手くなるかや瑞希の軽い旅話や魔獣大進行の話などをしてお開きになった。

瑞希がハルキ達と話して居る間ユキとヤミは、料理長や配膳の人から沢山の食べ物ももらい瑞希が来るまで食べ続けていた。

【数日後】

今日は、クラシバル公爵が王都ビノテンにある王城サンサビルカム城まで来るように魔王から呼ばれていた。公爵は、十人位の近衛兵を連れて朝早く王都の王城に向かって出発した。

瑞希は、何時もの様にユキとヤミを連れて朝の食堂に来ていた。すると朝見るのには、珍しい顔がいた。

「朝に会うなんて珍しいですね。ブラットさん」

瑞希がブラットの隣に座りながら言った。

「確かにな。まあ、今日は、何時もより遅く食堂に入ったからな」

ブラットは、瑞希にそう返した。瑞希は、朝食を食べながらブラットに聞きたい事があったので聞くことにした。

「ブラットさんは、クラシバル公爵と一緒に王都まで行かなくていいんですか？」

「俺は、アスク様の護衛じゃなくてエリス様の護衛だから王都まで行かなくていいんだ」

「へえ〜」

それからは、特にブラットと瑞希は、会話を交わさずにいた。今日一日も何時もの様に過ぎていく。

【十日後の夜】

今日も瑞希達は、何時もの様に一日が過ぎていき、明日、明後日も平穏な日常が、平和な時間がやって来ると思っていた。いつ壊れるのか分からない不安定な日々の上で……………。

館の人達が寝静まりそうな時間に王都から早馬が公爵家館の門を潜った。それを境に瑞希達の平和な時間は、終わりを告げた。

第三十話：襲撃

王都から来た情報は、一気に館に知れ渡った。
それは、……………

『グラコニアス帝王魔国の現魔王アルサ・グラコニアスとその家族全員が暗殺された』

と言う情報が届いた。だが更にクラシバル公爵家に悪い情報が来た。

『魔王アルサ・グラコニアス暗殺の重要参考人としてアスク・クラシバル公爵が拘束された』

その二つの情報がもたらされた公爵家館は、次の朝まで情報確認や収集に私兵が駆けずり回った。

魔王暗殺事件は、二日目の朝には、近隣諸国や人族国に拡がっていた。

公爵家館は、今も情報確認で王都とルノーノーツを往復して居る私兵がいて慌ただしくしていた。

瑞希は、今エリスと共に何時もの庭に来ていた。

「ねえ、ミズキ。お父様が伯父様を殺したのって嘘よね？」

エリスは、うずくまり声を殺しながら泣いていた。

「僕には、まだ公爵様がどんな人物かは、知らないから分からない

けどエリスが話してくれる公爵様の話を聞けばそんなことをしないと思うだから哀しまないで公爵様を信じて帰って来るのを待とうよ」

瑞希は、声を殺しながら泣くエリスの頭を撫でながら優しい笑みを向けていた。

「そうよね。お父様がそんなことするわけがない！お父様が無事帰ってきたら笑顔で迎えなきゃ」

エリスは、泣き顔から笑顔に無理やりし瑞希の顔を見た。それから二人は、一言も喋らないで居た。静かな時間は、着実に過ぎていき日が暮れ始めたので二人は、館に戻った。

【深夜】

館は、静まり帰り一部を除いては、夜の闇に溶け込んでいる。館の広間では、各隊の隊長が集まって居た。

「旦那様の様子は、どうだった？」

カシバが先程王都から戻って来た兵に聞いた。

「特に心配しなくて言い思います。一番の問題は、魔王陛下暗殺事件の釈明です。今のところ旦那様が殺した証拠は、無いですがアルバス公爵が旦那様が殺ったと意義を唱えています。王位継承権件がありますし……」

兵士は、そう言った。

「でだアルバス公爵は、旦那様の事で道祐ふうな刑を求めて居るんだ？」

ブラットが兵士に聞いた。

「アルバス公爵は、旦那様の事を国家反逆罪で死刑を求めているよ。うでそれに追隨する爵位持ちが訴えかけているよ。うで罪が認められるのは、時間の問題だと思われます」

「そうか」

ブラットは、溜め息を吐きながら応えた。それからブラットは、兵士を退出させた。

「急いで証拠を探さないと手遅れになりそうだな」

カシバがそう言い他の者達も同意した。

【ルノーノーツ近郊】

夜の闇に紛れて黒一色の鎧などを纏った一団がクラシバル公爵家の館を眺めていた。

黒の一団は、隊長らしき人が手で合図らしき者を送ると静かに館に向かって進み始めた。

【公爵家館】

守備兵は、暗闇の中何時もの様に警護をしていると………急

に石造りの塀が爆発した。
守備兵は、いきなり起こった事に啞然としていたが直ぐに気を戻し館に伝えに行った。

【広間】

ブラット達は、話し合いをし終わり解散仕様とした時、館の外から轟音が鳴り響いた。

「な、何が起こった!？」

カシバが叫んだ。すると広間の扉が壊れんばかりの勢いで開いたと同時に守備兵が入ってきた。

「報告します!!先程西の塀が何者かに攻撃されました」

守備兵が答えるブラット達は、直ぐに行動し始めた。

「直ちに戦闘配備だ!」

「我々、第一隊がそこに向かう副隊長直ぐには、寝ている奴を全員起こして追いかけてこい!」

そう言い第一私兵隊の隊長と副隊長は、広間を出ていった。

「ブラット!」

カシバは、ブラットの方を向いた。

「ああ、どっかのバカが攻めて来たかも知れん俺は、急いで奥様とエリス様の様子を見てくるからここの守りは、任せたぞ」

ブラットは、走って出ていった。

第三十一話：死と狂喜

瑞希は、外から聴こえる轟音によって夢の世界から叩き起こされた。

「な、なに？」

瑞希は、急いで窓の外を眺めると西の方から火の手が上がっているに気づいた。更に館からは、鎧など完全武装した兵士達が出ていった。

瑞希は、何か不味い事が起こっていると思いき直ぐに寝間着から普段戦闘等に着込む服に着替えユキとヤミを連れて部屋を出た。

瑞希の部屋の周りには、まだ人は、居なく。瑞希は、とりあえずエントランスホールへ向かった。

エントランスホールには、見知った魔術師隊の人が居た。瑞希は、とりあえずその人に事情を聞くことにした。

「あ、あの～。何があつたんですか？」

瑞希が聞くと魔術師は、苛立ちながら振り返ったがそれが瑞希だと解ると直ぐに顔を申し訳無いような顔になり答えた。

「ミズキさん、先程西の堀辺りが襲撃されて何人かの守備兵が殺られたので警戒体制で今、お嬢様と奥様の安全の為、屋敷の警護をしています」

瑞希は、それを聞いて少し俯きながら考え直ぐに走り出した。

瑞希が急に走り出すので制止の声をかけたが瑞希は、それを無視して走り去っていった。

【公爵家館・エリスの部屋近く】

ブラットは、息を切らしながら走っていた。エリスと公爵の奥様が無事かどうかを確かめるために走っていた。

広間から数分走り続けやつとエリスの部屋の前まで来た。エリスの部屋までの道筋には、何人も死体が転がっていた。

今回の襲撃事件の犯人グループがエリスや公爵婦人を狙ってきているのは、明白だった。

ブラットは、エリスの部屋にエリス以外の気配があり。館の者では、無いと思ひ扉をぶち破って中に入った。

「おらあぁ」

ブラットは、エリスを連れ出そうとしている三人の男を数秒間で切り伏せた。

エリスは、手と足を縛られていて気絶させられていてブラットが男達を切り伏せる瞬間見ないですんだ。

ブラットは、直ぐにエリスが無事かどうか確認していたら廊下を走って此方に近づいてくる者の気配がして武器を構えた。

ブラットがエリスの部屋に突入した時瑞希は、エリスの部屋に続く廊下を走っていた。廊下の所々には、誰かが切り伏せた死体が何人も転がっていた。その死体の殆どが一振りで切り伏せられているので瑞希は、この先に何かがありエリスに危険が及んでいると考え走る速度が上がっていく。

瑞希は、エリスの部屋の近くまで行くと扉が破られているのに気づき双剣を構えて入った。

ガキイイイン……

甲高い金属音が鳴り響いた。

「ブラットさん!!」

瑞希が驚いた声を上げると

「ん?ミ、ミズキ!!」

ブラットも声を上げた。

それから二人は、武器を下ろした。だが二人は、周りをまだ警戒していた。

「ミズキ脅かすなよな。敵が来たかと思ったじゃないか」

ブラットがそう言うのと瑞希は、エリスにかけより気絶だけだと解ると安堵した表情になりそれから直ぐに引き締まった顔になって答えた。

「それは、こつちの話ですエリスが心配になって来てみたら廊下には、死体が転がっているから……ってそれより!何が起こっているんですか!?!」

瑞希が聞くと

「今のところよく分からないがたぶん公爵様を今回の暗殺事件の犯人に仕出かそうとしている奴等の兵が奥様とお嬢様を捕らえて公爵様を脅そうとしているかもしれない」

ブラットは、苦やし混じりの顔で答え直ぐに瑞希にエリスの事を頼み部屋から出ていった。

瑞希は、エリスの縛つてある縄をほどいただが目隠しは、したままで広間に向かった。瑞希は、余りエリスに悲惨な光景を見せたくなかった。

瑞希は、何事も無く無事に広間に着いた。それからエリスを毛布を敷いた床に寝かした。

外での戦闘は、悪くなる一方だった。先に出た第一隊は、すでに隊長と副隊長が死んで隊も半数が的の兵士に殺され防衛ラインが少しずつ下がって来ていた。負けるのも時間の問題になった。

更に公爵婦人を救出に向かったブラットが戻って来ていたがブラットが部屋に着いた時には、すでにものけの空で誰かが抵抗したあとが残っているだけだった。

「これからどうするんだブラット」

マルチダが聞いた。マルチダは、爆発音を聞いて直ぐに現場について戦ったが敵の量が多く防ぎきれず。魔力や体力が無くなり始めたので今は、館の広間で休憩している。

「たぶんこのまま戦い続けても負けるのは、目に見えている。地下の緊急脱出口から脱出しよう」

ブラットの提案に逆らう者は、居なく皆直ぐに準備をし始めた。エリスを担いで最初に龍也とマルチダが行くことになった。最初は、瑞希がエリスと一緒に行くことになっていたが瑞希が自分から残る

と言いつラットと残って逃げる時間稼ぎに加わる事に決まった。

【緊急脱出口中】

龍也は、エリスを担ぎながら通路を走っていた。龍也の周りには、マルチダの他に近衛隊の兵士が十人位着いてきていた。

数分間走り続け出口に着いた出口の扉は、開いており先に出口周辺の安全を確保している近衛隊が出た跡だった。龍也達は、出口の扉から出てきた。

外は、月明かりに照らされていて静かな空間が広がっていた。だが皆武器を構え始めた。

森が静かすぎるのだ。先に来ている筈の近衛隊の兵士が全く居ない。すると近衛隊の前五人の首が唐突に空高く飛んだ。首を切られた五人は、自分の首無し体があり何が起こったのか解らない顔をしながら死んだ。

地面に首が落ちた瞬間首無し死体の傷口から真っ赤な血が吹き出した。まるで龍也達の周りにだけ赤い雨が降っているような感じになった。

良く五人の前を見ると黒い格好をした奴がいた。最初に気づいたマルチダは、気配を消して他の近衛兵を殺ろうとした黒い兵を腰に下げていた剣で叩き切った。

「グアアアアア」

いきなり仲間の叫び声が鳴り響き黒い兵は、近衛兵から身を引いた。近衛兵は、急いで防御陣を敷いた。マルチダは、森の中に気配を消して敵に奇襲をかけた。戦闘は、小規模ながらも激しい戦いがあり敵は、全滅出来たものの龍也とマルチダ、エリスしか居なくなっていてエリスは、今だのに目を覚まさないでいた。

【館】

館の中や周りは悲惨な事になっていた。公爵家私兵は、結構な数が死んでいった。

ブラットは、これ以上持たないと思い避難しようとしたら入り口が大破していた。ブラットは、急いで広間に生き残った仲間を集めて籠城するため集まったら瑞希に魔術で結界を張ってもらった。

「皆、心して聞け」

ブラットが深刻な顔になり皆静かに聞いた。

「さっき緊急脱出口を確認してきたら通路が崩落していた。通路から出ていくことは、出来なくなった。唯一助かる方法は、敵の包囲陣突破するしかない」

皆、息を飲んでいた。

「俺からは、最後に皆生きて会えないだろうが生きて会おう。そして酒の肴になるように生き延びよう」

皆の目には、絶望の色は、無く皆生き生きとした目をしている。

「それじゃあ行くか」

ブラットが言うと武器を構えて突撃体制になった。そして瑞希が結界を解いて突撃していた。

ブラット率いる最後の生き残り達は、館を出るときには、半数まで減っていた。

瑞希は、部隊の中心で魔術を放ち続けた。館を出たら館の中より攻撃の手は、緩んだがかなりの数の敵が追い掛けてきていた。

瑞希は、一番後ろに下がって行った。ブラット小さな声で話していた。

そのまま走り続け部隊は、門の目の前まで行き部隊が門を抜けるとブラットと瑞希が門の目の前止まり敵に向いた。

それに気づいた後ろの部隊の人達がブラットと瑞希を見たが二人の背中が『このまま行け後で追い付く』と言っている様だった。

瑞希は、隣を走っているブラットに話し掛けた。

「生きて帰りましょうね」

瑞希がそう言うと

「当たり前だ」

とブラットは、返した。

ブラットと瑞希の二人は、かなり怪我をしたが敵の追撃部隊をある程度蹴散らした。二人は、喋る気力もなくアイコンタクトで帰ると

合図し歩いていこうとした。

その時生き残った一人の敵が瑞希に向かって最後の力で矢を射ようとしていた。

瑞希は、気が緩みきっていてそれに気づいていなかった。ブラットは、瑞希に向かって射るよう殺気を送っているのに気づいた。ブラットは、殺気を出している方に向くと今にも瑞希に矢を射ろうとしている敵が居てるのに気づき急いで瑞希に駆け寄った。

矢は、放たれた。

ブラットは、瑞希を吹き飛ばしブラットの心臓近くに矢が突き刺さった。矢を放った奴は、放った後、最後の力を振り絞ったのかそのまま息絶えた。

瑞希は、吹き飛ばされゆつくりと起き上がり吹き飛ばしたブラットの方を向いた。

「何するんですか！ブラットさ、ん？」

瑞希は、ブラットの胸に矢が深く突き刺さっていたのを見て瑞希は、驚いてブラットに駆け寄った。

ブラットは、虫の息で誰が見ても確実に死ぬだろうと判断できる程、弱っていた。

「ブラットさん！今、助けるから！！」

瑞希は、ブラットに言いながら胸に刺さっている矢を抜こうとした。その瞬間、矢を抜こうとした瑞希の腕をブラットが握った。

「ミ、ズキ！ハア、ハア、俺、は、いい、から、逃げる。ゴホッ、ゴホッ」

瑞希は、思考の海に沈んでいった。
敵は、瑞希とブラットが死んだと思い矢を撃つのを止めた。
（矢が止んだ。何故止んだ？）瑞希は、ブラットの体の下から出た。
敵は、生きた瑞希を確認して叫んだ。

「まだ！！餓鬼が生きてるぞ！」

敵の半分程が剣を持ち近づいて来た。もう半分は、弓を構えた。
瑞希は、虚ろな目で敵を見た。

（誰かが近づいて来た。何をしに？何故武器を持って？そうだから
は、ブラットさんを殺した敵だ。じゃあ、今度は何しに来た？そう
人を殺しに来たんだ。誰を殺しに？僕を殺しに来たんだ。殺す？殺
される！殺される殺される殺される殺される殺される殺される殺さ
れる殺される殺される” 僕が死ぬ” 死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ
死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ
死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ
死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死
” 僕は、まだ死にたくない” 死にたくない死にたくない死にたく
ない死にたくない死にたくない死にたくない じゃあ、死なない
為には” 何を誰を殺ればいい？” 何を殺ればいいんだ？何を何
を何を何を何を殺ればいいんだ？ そうだ！目の前の全ての者、
物を消せばいいんだ！）

放心状態の瑞希の前まで敵は、来た。そしていきなり

「あはははははははははははははははははははははははははははは、
あはははははははははははははははははははははははは、あははははははは
はははははははははははははは、あははははははははははははははははは

「は」

狂ったように瑞希が笑い出した。

「な、何だコイツ!!」

「急に笑い出したぞ!!」

「気持ち悪い速く殺そうぜ!!何だか気味悪い!」

「ああ!!」

敵の黒服達は、急に笑い出した瑞希を気味悪がり、速く殺そうと一番瑞希に近い奴をせかした。そして剣を振り上げようとした瞬間、瑞希の笑い声が止んでいた。

「おい、何で急に笑わなくなったんだ?」

「そんなもん知るかよ!!」

「なあ、誰か代わってくれないか?」

「何だよ。そんなんいいから速く殺せ!!」

「お願いだ!!誰か代わってくれ!!」

瑞希が一番近い敵の黒服の奴は、仲間のほつを向いて話していた。

「お、おい!そいつが!!」

一人がそう言いながら瑞希を見ると片手を挙げた。
そして瑞希の意識はそこで途切れた。

【公爵家館の門近く】

逃げ延びた私兵は、二十三人で皆若い者であり未熟者でブラットや瑞希に指揮をしてもらわないと全滅する可能性があった。

その為一向に戻って来ない二人の様子を見に来た兵士は、驚愕していた。

館が無くなっていた。跡が全くない跡形も無かった。塵一つ……

そして唯一残っていた門の下に瑞希が倒れていた。

ブラットは、“影も形”も無かった。

若い兵士は、そのまま瑞希を背負って走り去っていった。

第三十二話：新しい旅の始まり

アスク・クラシバルの反乱

魔王暗殺事件は、暗殺の首謀者アスク・クラシバル公爵が殺った事になりそう名付けられただがグラコニアス帝王魔国建国以来の大事件の為、国民や他国の人からは、魔王暗殺と呼ばれるようになった。アスク・クラシバル公爵は、公開処刑にされた。クラシバル公爵の横には、公爵婦人が並び同時に処刑された。

ルノーノーツに在る公爵家の館に居た私兵とクラシバル公爵の娘を反乱準備をしていたとしてアルバス公爵の私兵と国軍の特殊部隊が殲滅しその時、公爵の娘、エリスは、一緒に死んだことにされた。

そして魔王暗殺事件の犯人と反乱の事前排除の功績で国民の指示を得てグラコニアス帝王魔国の魔王に即位した。

【深緑の森の奥】

エリスと龍也とマルチダは、マルチダの故郷のエルフの里に居た。エルフの里に居るのは、三年前の魔王暗殺事件からここに隠れ住んでいる。

エリスは、暗殺事件から三日間眠り続けていて、起きたときは、その事実には耐えきれなく酷く泣きじゃくった。

【三年前、エリスの里】

マルチダが龍也とエリスを連れてきた。するとアイコスが里の中から出てきた。

「おい！どうした！！」

アイコスが急いで訪ねると

「そんなこと後で話す！取りあえずこの子を診てやって」

「ああ？分かった」

アイコスは、エリスを長老の家に運びアイコスは、エリスを診始めた。

特に酷い症状もなかった薬で深い眠りに付かされていた。あの事件から三日目の昼過ぎにエリスは、目を覚ました。

「お！娘っ子が起きるぞ」

アイコスがそう言つと同じ部屋に居るマルチダと龍也は、エリスの元に駆け寄った。

「ここ、何処？」

エリスは、見知った顔のマルチダと龍也を見て聞いた。

「ここは、オレの故郷のエルフの里だ」

マルチダがそう答えた。エリスは、だんだん頭が起きてきたのか起き上がったのだが頭には、『どうして私は、マルチダさんの故郷に居るの？』てな感じで顔に書いてある。マルチダは、目を少しの間を

閉じ静かに静かに語った。

公爵家館が襲撃されエリスが狙われ眠らされたこと、その襲撃で公爵婦人が拐われたこと、エリスが眠っていた間に公爵と婦人が魔王暗殺と反乱の志望者との罪を被らされ公開処刑になったこと、マルチダと龍也意外の者は、死んだか死んでないか解らないことなど唇を噛みしめて聞いているエリスにマルチダは、丁寧に自分が知っている一連の出来事を聞かせた。

「う、嘘。お父様とお母様が死んだなんて……嘘よ嘘よ嘘よ嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘う、そ、うううううわああああー
ー」

エリスは、叫びながら嘘と言う言葉を繰り返していた。マルチダは、そんなエリスを見て心が痛み静かに優しく包容した。エリスは、マルチダの胸の中で子供のように泣きじゃくり続けた。アイコスと龍也は、静かに部屋を出ていった。

【三時間後】

エリスは、泣き疲れたのか今は、ベッドの中でスヤスヤと寝息をたてている。

マルチダは、エリスの手を握りながら静かに青い髪の毛が生えた頭を優しく撫でている。

「それでこれからどうするんだ？」

アイコスがマルチダと龍也に聞いた。

「取りあえず俺は、エリスが落ち着いたら瑞希を捜そうと思ってる」

龍也がアイコスにそう答えた。

「オレも多分ミズキを探しに行くと思う」

マルチダも龍也と同じ意見らしいが少し曖昧に言った。ちらほらエリスを見ている。マルチダは、親を無くしたエリスがどうも気になるらしい。

【翌朝】

エリスは、朝窓から入る朝日が目に入り起きた。

「ふあゝ、……………此所何処だっけ？」

エリスは、少しだけ考え思い出した。

（そう言えばマルチダさんの故郷の確か……………そうそうエルフの里に居るんだ私）と考えていたらドアがノックの音が聞こえた。

「エリス起きてるか？」

マルチダの声だ。エリスは、起きてると返事をした。

「じゃあ、朝御飯もう直ぐだからさ着替えて食卓に行こう。服は、椅子の上に有るから着替え終わったら部屋から出てきてくれ此所で待ってるから」

エリスは、近くの椅子の上にマルチダが言ったとつりに服があった。エリスは、直ぐに着替え部屋から出た。マルチダは、エリスが居た部屋の反対側の壁に凭もたれながらエリスを待っていた。

エリスは、マルチダの隣まで行きマルチダは、そそくさと歩いていった。エリスは、この家の内部構造を知らないのでマルチダの一步後ろから着いてきている。

エリスは、歩きながら

（昨日ミズキに会わなかったな）と思いながらマルチダの後ろを歩いていった。昨日エリスは、親が二人死んだ事実が大きく哀しく辛かった為にマルチダが話した。

『マルチダと龍也以外の者が生きているかいないか解らない』と言うのを聞いていなかった。

マルチダとエリスは、食卓に着いた。朝食は、パンとスープだった。朝食の席には、アイコスと龍也も居た。

エリスは、食べ終わった後口を開いた。

「ねえ、ミズキやブラット達、館の人達は、何処に居るの？」

マルチダや龍也は、顔色が暗くなった。

誰も話さない時間が経った。そしてマルチダが口を開いた。

「昨日も話したんだがオレとリュウヤ以外の奴等は、生きてんのか死んでんのか解らないんだ」

皆うつ向いているそして龍也が顔を上げて言った。

「俺は、瑞希やブラットさんが死んだなんて信じない。だからある程度準備が整ったら二人を探しに旅に出ようと思ってる。俺は、な

」

「オレは、今のところリュウヤと一緒に旅に出ようと思ってる」

マルチダと龍也は、それぞれ自分がやるうと思っ
ていることを言っ
た。

エリスは、顔を上げて二人の顔を交互に見て言っ
た。

「私もその、ミズキを探す旅に着いていっ
ていい？今は、何も出来
ないけどこれから学んでいくから」

マルチダと龍也は、顔を見合せそし
て

「別にいいぞ。俺は、気にしないし親友が好
きになった人だからな」

龍也がそう言うのと喜び瑞希がエリスを好
きになっていると龍也がい
たら顔を真っ赤にして恥ずかしそうにう
つ向いた。マルチダと龍也、
アイコスは、そんなエリスを見て笑っ
た。

少し笑った後、マルチダがエリスに話
し掛けた。

「エリス取り敢えず自分の身は、ある程
度守れるようにならなきゃ
ならんだから旅には、直ぐに行けんから
な。まあ、ある程度ならオ
レが魔術を教えてやるから」

「ありがう！マルチダさん」

エリスは、マルチダに向かって頭を下げ
たが頭を下げすぎて食卓テ
ーブルに頭を盛大にぶつけた。

マルチダと龍也、アイコスは、またも
笑い。エリスは、涙ぐみなが
ら三人を睨み付けていた。

【二年後】

ようやくエリスは、自分の身は、自分で守れる程に成長した。マルチダは、エリスを教えている間いかに瑞希が魔術、錬金術の才能があつたか思い知った。

そして三人は、準備が整つたのでエルフの里を去り瑞希とブラットを探す旅に出た。

【さらに一年後】

最初は、問題が沢山有つたが今は、特に無く旅を続けていた。

「本当、あの二人は、何処に居るんだよ生きているならさっさと目の前に現れってんだそう思わないマルチダさんにエリス」

「ぶつぶつ文句を言う暇あつたらさっさと歩いて探さんか！今日中に水場を探さんと干からびるぞ」

「まあまあ、二人とも落ち着いて下さい。地図では、もう直ぐオアシスの街サハラに着きますから」

龍也、マルチダ、エリスは、今旅のまさつ最中でグラコニアス帝王魔国の南に位置するガラババ砂漠に居た。今だに瑞希とブラットを探しており今のところ二人の情報は、三人の耳に入っていない。

「それは、本当かエリス！」

龍也が振り向き聞いた。

「はい！後三キロ程進んだところに在るはずです。」

エリスが言つと龍也は、拳を握り……

「やったああああー……これでまともな飯にありつけるううう」

龍也は、叫び上がった。砂漠を旅している間は、普通飯だと腐ってしまったため乾燥させた食べ物ばかり食べていて余り旨いご飯にありつけなかった。それからやっと解放されるとなつて有頂天になっていた。

そして余りにもうるさく跳び跳ねているのでマルチダに頭を思いっきり叩かれた。

「うるさいこのアホタレ！！叫ぶ暇があつたら早く街に行くぞ」

マルチダは、そう言い龍也を急かしたが頭の中には、酒が飲めると大歓迎だった。エリスは、そんな二人を見て微笑んでいた。

第三十三話：砂漠の街

二時間程でオアシスの街サハラに着いた。

「なんか湿気た街だな」

マルチダが言った。

そう街の外には、人が居なく人っ子一人居なかった。

「確かにそうですね。もっと賑やかな場所だと聞いていたの？」

エリスがそう言った。

「まあ、事情があるんだろ。そんな事より飯だ飯」

龍也がそう言い街の中に入って行った。

街の中は、かなり廃れていて所々家が崩壊などしていた。

「なんでこんなに廃れてるんだ？」

龍也が言った。

「さあ」

マルチダが軽く返し近くにあった宿に入って行った。エリスもマルチダの後について行った。龍也は、一人ぶつぶつ言いながら一人残されていた。

「……………て思うだろ二人とも？」

.....

返事がない。

「つて！居ないじゃん！！」

龍也は、叫び。そして二人が入って行った宿に入って行った。中に入るとエリスがフロントで龍也の事を待ってた。

「遅い！リュウヤは、何時もの病気でたんでしょ！」

「俺は、病気じゃなし。そんな事よりマルチダさんは、どこ行ったんだ」

「マルチダさんは、リュウヤ待ってられないらしくて食堂に先行ってる」

そう二人は、会話を交わし話ながら食堂に向かった。

食堂に入ろうとしたら中から怒鳴り声が響いてきた。マルチダの声だ。

「何で酒がないんだ！そこに有るのは、酒じゃないのか！？」

マルチダは、食堂に居るコックの胸ぐら掴んで怒鳴っていた。

「ま、マルチダさん！」

エリスは、悲鳴に近い声を上げコックからマルチダを無理やり離していた。龍也は、素知らぬ顔でただ二人を見ていた。

「そんなに怒ってどうしたんですか？マルチダさん」

「んなことこいつが酒があるのに出さないからだ！！」

マルチダは、コックを指差をしながら今にも殴り掛からんとの勢いで怒鳴っていた。そんなマルチダを見てコックは、ブルブルと震えて額からは、滝のように汗を流していた。

「はあああ」

エリスは、長く深い溜め息を吐いた後ゆっくり口を開いた。

「何でお酒があるのに出してくれないんですか？理由が有るなら聞かせて貰ってもいいですか？」

とエリスは、言いコックは、マルチダに怯えながら口を開き始めた。コック曰く、このオアシスの街サハラは、数日前から 砂漠の亡霊 と名乗る大規模盗賊集団に襲われていて金や食糧、酒などを渡すかわりに街の人に手を出さないと行ってかなりの量を買いでいたらしい。

街の人も最初は、抵抗したが 砂漠の亡霊 は、何匹かドラゴンを飼っているらしく抵抗した見せしめに家を何軒か破壊した。

街の住人は、それを見て”自分達では、太刀打ち出来ない”と考え街の外から傭兵団等を雇う為に幾人かの人を放ったが今だに傭兵団は、現れず三日後の食糧受け渡しの時、量が今までより少ないためかなりヤバイらしい。

マルチダは、それを聞いて諦めたのか一番安い食べ物頼んで黙っていた。

【翌日】

ギルドに行くときルドは、半壊していた。

龍也、マルチダ、エリスの三人は、取り敢えずギルドの中に入った。中は、以外にも綺麗だった。人も以外と居るようだった。

「ほう、以外と人が居るじゃん」

龍也が言った。そして三人は、空いている席に座った。

三人は、余り会話をしないで周りの話を聞いていた。ギルドに居るのは、サハラの盗賊に襲われているとの噂が広がっていて各地から集まって来ていた。

集まって居るハンター達の会話は、世間話が殆どで余り自分達が欲しい情報は、無かった。

三人は、聞き耳をたてるのを止め周りと同じ様に世間話をしていた。暫く話しているとギルドの扉が開いた。三人は、余り気にしないで会話を続けていた。

ギルドに入って来た人達は、四人程のグループでエリス達の隣の席に座ってきた。

やはりエリス達の欲しい情報などは、喋らず世間話をしている。エリス達三人も何も掴めないからそのまま会話を続けていたら四人組の一人が立ち上がりエリス達の机までやって来た。

エリス達は、警戒して龍也は、然り気無く刀に柄に手を伸ばしていた。

立った男は、目を細め静かにエリスの顔を見ている。余りにも長く顔を眺められているのに痺れを切らしエリスは、男に声をかけようとした瞬間。

「エリスお嬢様では、ありませんか！？お久しぶりです。私の顔な

んて覚えていないと思ひますが」

男は、いきなりそう言った。すると他の三人も立ち上がりエリスの顔を見た。

「本当だ！お嬢様」

「生きて居られたんですねお嬢様」

皆、そう言いしまいに泣いていた。エリス達三人は、居心地が悪くなったギルドを飛び出し四人は、それを追いかけていった。

エリス達七人は、人が余り通らなさそうな路地に入りそして立ち止まった。

七人は、全速力でギルドから逃げるように走った為に肩で息をしている。そしてある程度息遣いが整つのでエリスが口を開いた。

「貴方達つて私達の事をなぜ知っているの？」

エリスが四人に聞いた。

「そりゃ俺達四人がクラシバル公爵閣下に遣えて居たからですよ。名前は、ルー・サバサ」

一番右の奴が理由と共に名前を言い右から順に名前を答えていった。

「カール・ナカハ」

「クリミナル・カナアバ」

「カリキナ・テドール」

四人は、順々に名前を応えていった。

「取り敢えず聞きたい事があるんだけどいい？」

エリスが四人にそう問うとルー・サバサがこたえた。

「俺達の解る範囲なら良いですよ」

「ありがとう」

エリス達は、旅を始めてから初の瑞希達に繋がるかもしれない為かなり心の中で喜んだ。

「ブラット近衛隊長と一緒に館に来たミズキ・ヤグラとブラット近衛隊長の行方を捜しているんだけど知らない？」

ルー達四人は、少し考えながら聞いた。

「ミズキ・ヤグラってあの二体のドラゴンを連れた魔術師の？」

「そうそう」

またルー達四人は、考えているが難しい顔しながらエリス達に応えた。

「すみませんエリスお嬢様。俺達は、館が襲われた時王都から帰る途中で館に着いた時には、館が跡形も無く更地が広がっていて生き残った人は、誰一人居ませんでした」

「そうなの」

エリス達は、肩を落とした。ルー達四人は、また話し合って口を開いた。

「余り役に立つかは、分からないんですけど？」

ルーがそう言うとエリスは、ガバッと顔を上げた。

「……それは、本当なのか？」

エリス達三人は、ルーに詰め寄った。

ルーは、たじろいながら応えた。

「はい！？確か・・・五ヶ月前の事なんですけど隣の国アブレス国のケルカ村で聞いた噂なんですけど白いドラゴンと黒いドラゴンを従えている竜騎兵を見た。その者達は、白いドラゴンと黒いドラゴンが重なり合い真ん中に一本の剣重ねた紋様の旗を掲げていたらしい」

「その話本当なの！？」

エリスが聞いた。

「あくまで噂で実際にそうなのか分からないしそんな紋様を掲げた国は、知らないから！」

「そう」

エリス達は、うなだれたが直ぐに前を向き。

「まあ、可能性が出てきたいじゃないか」

マルチダが言い二人は、頷いた。

それからルー達四人と別れまたギルドに戻った。そしてギルドに居るハンター達に『白いドラゴンと黒いドラゴンが重なり合い真ん中に一本の剣重ねた紋様の旗を掲げた集団を知らないか?』と聞いて回った。

すると以外に沢山の情報が集まった。

ハンター達の話に寄るとその集団は、クリムゾン と名乗っている傭兵集団で人数、規模、拠点が総て不明。分かっている事は、白いドラゴンと黒いドラゴンどちらかに乗った指揮官が戦いくの時に居てかなりの魔術や武術の使い手らしいと言う事と数人でAクラス級のモンスターを倒せる実力者集団と言う事だけが分かりエリス達は、始めて瑞希達に近ずいたと思った。

その日は、取り敢えずギルドで夕食を食へ宿に戻り寝た。

【翌日の早朝】

朝早くまだ太陽が登るか登らないか時間外は、騒がしかった。

エリスとマルチダは、その騒音によって安らかな眠りから叩き起こされた。エリスとマルチダは、窓に向かい開けると沢山の武装をした人達が練り歩いていた……。

それは、”傭兵”だった。

第三十四話：竜騎兵

エリス達は、起きた後ギルドに行くとギルドから直接依頼（強制的）をされた。

街の外には、今朝街を練り歩いていた傭兵が沢山居てそこらじゅうにテントを張っていた。傭兵は、だいたい百人位の数が集まって来ていた。

エリス達ギルドハンターは、傭兵達が居る直ぐ横に集められた。

「ギルドハンターの皆さん初めまして私は、ハンターギルドのサハラ支部支部長のカ・バルと言います。この度の戦いの参加してくださいと有り難いと思っています。今回のギルドの依頼は、皆さんが知っていると思いますがここサハラを襲撃してくる盗賊団 砂漠の亡霊 からサハラを護るのと盗賊団の殲滅に有りますこの二つを確実に遂行してください。これで話は、終わりです」

カ・バル支部長の話は、終わり直ぐに代表を決める事になった。代表は、この砂漠地帯を行動範囲としているハンター、ナカル・バルバナと言うハンターが選ばれた。ナカルは、直ぐに傭兵達の団長と今回の戦いの役割分担や配置、戦術などを話し合った。話し合いは、五時間ぶつ通しに続きへ口へ口になってナカルは、帰って来た。

【翌日】

配置は、ハンターが敵正面から左半分、傭兵が右半分を担当し伏兵で後ろから攻撃された時の為に予備のハンターと傭兵合わせて五十人程の兵力を街に残す事になっておりマルチダとエリスが待機組で

龍也が前線組になった。

戦いは、盗賊団が昼から来ると言うことで此方の存在は、余り知られていない事を利用して奇襲をしてから戦いに入る事になった。

【昼】

準備も整い何時でも戦いに行けるようになった。

街は、誰も居なくなつた様に妙な静けさが漂っていた。すると砂漠の向こうから土煙を上げて近づいて来る集団らしき者達がだんだん見えてきた。

集団は、近くまで来たら声を張り上げた。

「約束の日だ！金目の物と食糧を貰おうか！」

.....

盗賊の声が響くだけで返答がない。

「なんだなんだ！用意出来なかつたのか！？なら仕方ないなお前等殺して若い女と金目の物を取りにいったるぜ！お前等突撃だ！」

盗賊がそう言うのと他の盗賊達が武器を構え始めた。そして突撃しようとした瞬間、盗賊達の足元に縄が伸び前に出た盗賊達が一斉に転けた。

そして突撃しようとした瞬間、盗賊達の足元に縄が伸び前に出た盗賊達が一斉に転けた。

そして盗賊達から十メートル程先から二十人程のランスを構えた傭兵達が出てきた。ランスを構えた傭兵達は、転けた盗賊達に向かつて突撃し転けた盗賊達は、たいした抵抗もしないで殺されていった。

盗賊は、先の奇襲で十数人を失い士気が落ちている。龍也達ハンターや傭兵は、その隙を見逃さず一気に畳み掛けた。

盗賊達は、雄叫びを上げながら突撃してくるハンターと傭兵に怯みだした。それを見た盗賊の頭領らしき者が声を上げた。

「怯むな！数は、此方の方が上だ！！たかがハンターどもに嘗められるな！」

頭領らしき者が叫びそう言うのと盗賊達は、叫んだ。

そして右翼左翼にどんどん広がっていった。それを見た傭兵団の团长は、直ぐにハンターの代表と話すためにハンター達が居る所へ向かった。

【サハラ手前戦闘激战区】

龍也が今入って居る部隊は、突っ込んで行ったが敵が広がり始めるのを見てどうすればいいか迷った。すると直ぐに後ろからこの部隊を指揮するハンターから命令がきた。

「敵が展開するのを防ぐ。敵の展開よりも速く敵左翼の側面に回れ。」
「と言う命令で直ぐに敵左翼側面に周り始めた。」

【サハラ手前前線兵駐屯地】

团长とナカルの作戦の立案が直ぐにされた。緊急作戦本部は、傭兵団の参謀やサハラに詳しいハンター等が加わった。だが作戦は、思うように浮かばかった。その原因は、まず敵を盗賊だと甘く見ていた事、

盗賊達が予想以上に連係がとれていてなかなか敵の攻撃陣を崩せな

い事、

等の目測を誤ったためである。

今、前線を保つていられるのは、ハンター側の一番槍部隊が敵を完全に左翼展開させなかったのが言い判断で難とか両兵力バランスを保っているがいずれ破られるのも時間の問題だった。

【敵左翼側面】

龍也達の部隊は、難とか敵左翼が展開しきる前に到着しこれ以上展開するのを食い止めた。

今は、少しずつ部隊を交代させていき難とか引き上げてきた。皆は、サハラ手前の本部に着くと傷を癒すために医療班が居るところに向かったり地べたに座っていたりした。

龍也達部隊は、一刻程するとまた敵左翼側面に向かった。

戦いは、血で血を洗う激戦になっていた。その時ハンター、傭兵は、下がっていった。そして盗賊とハンター、傭兵団との間に土の壁が聳え立った。魔術による土壁だった。土壁の一角は、塞がらず開いたままだった。

盗賊達は、敵が自分達に怯んだと思いい敵に追い討ちをかけようと開いた場所に詰め寄せた。だが盗賊の頭領らしき奴は、考えこんで直ぐに様子を見るように言ったが勢いがついた盗賊は、止まらなかった。

ハンターと傭兵は、軽く防いで少し下がったり押し返したりして相手が押していると思わせた。土壁の中に半分位の盗賊が入ると入り口を塞いだ。

中に入った盗賊達は、自分達が畏にはまったと塞がれてから気づいた。外に居る盗賊達は、中に囚われた仲間を救うために魔術を撃ちまくっているが外見以上に土壁は、硬くびくともしない。

中の盗賊達は、更に土壁で五当分に別けられ土壁の上から魔術を浴びさせられた。その光景は、戦いではなく殺戮だった。そして土壁が崩れると仲間が殺されて周りが見えなくなり盗賊達は、ただ単純に突っ込んで来るだけだった。

戦況は、サハラ側に傾いた。

盗賊の頭領らしき奴は、これ以上仲間を失う訳にはいかない為、狼煙を上げた。

狼煙は、サハラからも見えていたので直ぐに辺りを警戒した。

【二時間後】

頭に血が登った盗賊達の相手は、楽で盗賊達の数は、最初の半分以上減ってしまった。ハンターと傭兵は、どんどん後退していく盗賊達を見て更に勢いが増してきていた。

『このまま一気に畳み掛けるぞ！』

と言う時に最悪の情報がハンターと傭兵達の耳に入った。

反対側から盗賊が攻めてきた。その数ざつと百人以上。

絶望的だった。

今から新しく来た盗賊達を相手に出来る程の戦力は、サハラには、

る全員がその声の主の方向を見た。

本物の竜騎兵が居た。

白いドラゴンと黒いドラゴンが重なり合い真ん中に一本の剣を重ねた紋様の旗掲げている。

クリムゾン

奴等が来たのだ！

一番最初に我に返ったのは、飛竜騎兵達だった。飛竜騎兵は、ハンターや傭兵を襲っていたのを止めて、クリムゾンの竜騎兵に向かった。

エリスを襲っている飛竜騎兵は、行かずその場に残りエリスを連れていこうとした。だが飛竜でエリスを掴もうした瞬間上空から赤いドラゴン、レッドドラゴンに乗る竜騎兵が飛竜騎兵に襲いかかった。飛竜は、レッドドラゴンに呆気なく倒され乗っていた騎兵ごと唯の肉の塊にした。エリスは、たたその一瞬の光景を眺めていた。

竜騎兵は、直ぐに他の飛竜騎兵を倒しに行った。

飛竜騎兵の数は、十四騎居たが、クリムゾンの竜騎兵と飛竜騎兵に五騎倒され分が悪いと思えば、足早に撤収していった。残された盗賊達も逃げたり竜騎兵、飛竜騎兵に倒されていった。

盗賊の頭領らしき男と他、数人の盗賊を捕まえた。他の盗賊は、死ぬか逃げたかで完全に居なくなった。クリムゾンの竜騎兵と飛

竜騎兵がそれを確かめた後地上に降りてきた。

竜騎兵は、二騎居た。飛竜騎兵は、十六騎居た。

レッドドラゴンに乗った騎兵だけが降りた。そして言った。

「我々は、傭兵団 クリムゾン に所属している者だ。我々は、依頼でこのサハラを襲う盗賊を撃ちに来た。盗賊は、もう壊滅したので我々は、帰る。去らば」

ただそう言い クリムゾン の竜騎兵達は、空を飛び東の空に消えていった。

第三十五話：戦い後

【盗賊団からサハラを守った次の日】

捕らえた盗賊達に話を聞くと実は、サハラを襲うように依頼された傭兵団が幾つか混じったのが今回の盗賊団だった。

傭兵達が雇われたのは、一月程前で顔をマスクで隠した怪しい男からの依頼だった。傭兵団団長が何人か集まった席で話されかなり大きな依頼と無謀な依頼な為誰も最初は、首を縦に振ろうとしなかった。男は、更に詳しく危険じゃないかを話した。

男曰く、

サハラを襲っても国軍は、来ない。

飛竜騎兵を幾つか派遣しそいつらを使う。

傭兵団団長達は、驚いた。普通街を襲えば街から救難要請が出て国軍が要請から必ず二日以内に駆け付けてくるからだ。だがこの男が言うには、国軍を越させない程の”権力”又は、”コネ”を幾つか持っている人物だとわかり更に飛竜騎兵まで貸してくれると言うのだ。

だが傭兵団団長達は、まだ首を縦に振ろうとしなかった。そこで男は、依頼の前金に参加する傭兵一人につき金貨二十枚、二万リニオンを払い依頼が終わったら更にその十倍払うと言ったのが団長達の首を縦に振らせた。

そして指定された日にサハラを襲った。

最初の数日は、本当に国軍が来ないかビクビクしながら待っていたが数日経っても国軍が来ないと判り暴れまくった。と言うのが事の真相だった。

依頼した男は、何が目的でサハラを襲い、貴重な飛竜騎兵を貸し与え、エリスを連れ去ろうとしたのかは、今だ謎だ。

戦いで被害は、かなり甚大だった。ハンターと傭兵を合わせて二百十三人居たが百二十五人が戦死し重傷者が五十一人他、軽傷していて戦って無傷の人は、誰一人と居なかった。

戦死した殆んどは、ハンター達だった。やはり対人戦を余り経験しないハンターより戦争等によくでる傭兵のほうが死者が余り出なかった。

エリス達は、特に大きな怪我もなかった。その為今は、傭兵達にクリムゾン の話を聞いていた。

「あの、すみません少し聞きたい事が有るんですがいいですか？」

エリスが十人程固まっている傭兵達に聞いた。傭兵達は、エリス達の方をむいらいきなり美人二人に話し掛けられてにこやかに笑いながら直ぐに答えた。

「別にいいぜ。こんな美人に話し掛けられて悪い気は、しないからな。なあ、いいだろお前等？」

傭兵達は、全員頷いた。

「所で何が聞きたいんだ？」

「あの昨日の戦いで最後加勢に来た クリムゾン っていう傭兵集団の事が聞きたいですけど？今、何処に居るとか。どんな小さいこども」

「彼奴等の事か。 クリムゾン はな三年程前に人族近くの小さな国から出来たって言われていてな。傭兵には、珍しいドラゴンを携

えて居たから直ぐに有名になったがかなり謎が多い傭兵達でな規模、拠点等が判らなくてな。確か今は、……この国の隣の国の……あ！そうだカムイって言う中規模国家とこの国との戦争に出てるって噂だな。まあ、俺達が知ってるのは、これだけだな」

「教えてくれてありがとうございます」

「いいってことよ。それより嬢ちゃん達は、何でクリムゾンの事を聞くんだ？」

傭兵が真剣な顔で聞いてきた。

「知っている人がそこに居るかもしれないから」

エリスがそう決意した顔で傭兵の質問に応えた。

「そうかそいつが見付かると言いな。あとカムイに行くならきおつけるよ彼処は、かなりピリピリしてるからな」

傭兵は、そう言いエリス達に言った。

「ありがとうね」

そう言いエリスは、傭兵に頭を下げその場を去った。

「これからどうすんだ？」

龍也が言った。

「取り敢えずカムイって言う国に行くしかないだろ」

マチルダが龍也の問いに答えた。

「まあ、今から次の町に行く準備をして速く行きましょう」

エリスがそう言い三人は、要る物を買集め直ぐにサハラからカムイに向けて旅だった。

第三十六話：ラゲの街

サハラから経って二週間と三日後、エリス達は、馬車に乗りカムイ隣の国小国バハラに来ていた。グラコニアス帝王魔国側からは、入れない為バハラから入る事にした。

バハラは、カムイとグラコニアス帝王魔国との戦争に干渉しなく中立の立場にいた。その為唯一両国からの人の行き来が出来るのだった。

「この国は、良く中立の立場に居られるな」

マチルダがそう呟きながら外の風景を観ている。

外には、鎧と剣を装備したグラコニアス兵やカムイ兵が居た。だが二つの国の兵士は、近くに居るのに戦わなかった。

「この国は、魔国三大国のサリアナ魔族国の傘下の国ですから下手に手を出すとサリアナ魔族国との戦争になりかねないからですかね」
エリスが律儀にマチルダの独り言に応えていた。

馬車は、順調に進み後、二三時間程度でカムイ側の国境の街に着く位だった。

すると前方に馬車や人の列が出来ていた。エリス達が乗った馬車は、少しづつ速度を落としそして列の最後尾に並んだ。

マチルダは、カムイから来る人に馬車から降りて話を聞いた。

「おい、聞きたい事があるんだがいいか？」

「ん！別にいいけど」

マチルダが声を掛けたのは、旅人だった。腰には、剣を携えていた。

「この先には、何があるんだ？」

「ああ、この先ね。グラコニアスの兵士が検問をやつてな、たしか
……犯罪者を探してるとか」

「ふん、で、どんな犯罪犯した奴なんだ？」

「それをなかなか教えてくれなくてな噂でわな確か……あの魔王
暗殺事件の犯人の娘が実は、生きていたのが判つてな。その娘がこ
の国で見られたらしいからグラコニアス帝王魔国がバラ軍政府に
協力要請を頼んでバラ軍政府は、それを承諾し今、この先で検問
をやっているつて、噂を聞いたぜ」

「そうか、ありがとう」

「どついたしまして」

マチルダと旅人は、別れ。マチルダは、エリスと龍也が待つ馬車に
戻っていった。

マチルダは、馬車に入った後、直ぐに今さっき旅人と話した事を話
した。

「じゃあ、このまま行けねえな」

龍也が言った。

「うん、そうだね。此れからどつする？」

エリスが二人に尋ねた。

「取り敢えず馬車を降りて少し遠回りになるけどあの山から国境近くの街に行こう」

マチルダがそう提案した。

「他にいい方法は、無いから賛成だな」

「私も賛成です」

マチルダは、二人が賛成したのを見て直ぐに馬車から降りる準備を始めた。

荷物は、直ぐに纏まり。三人は、静かに誰にも気づかれ無いうように馬車を降りた。

三人は、気配を消して山に向かった。山には、誰にも感ずかれず入れた。目的の街まで山を三つ越えれば着く位の距離だった。

三人は、そのまま一つ目の山を登り、中腹まで登る頃、日が沈んできた。

「もう日が沈むか。・・・今日は、此所で野宿をしよう。今は、焚き火が出来ないから日が沈みきる前にやることは、全て終わらせなきゃな」

マチルダがそう言い少し拓けた場所に荷物をおろし野宿の準備を始めた。

「何で焚き火が出来ねえんだよ？焚き火が有った方が獣避けになるし明かり代わりになるじゃん」

龍也がマチルダに聞いた。

「それは、だな。まずこの山に今、居るのは、私達だけだ。普通力ムイに行くために国境の街を目指すなら安全な検問をしてたあの道を通ればいい。だがオレ達は、通れないからこの山を登っている。今、此所で焚き火なんかしたら”自分達は、此所に居ます”って言うてるのと同じだからだ」

マチルダは、そう言いながらテントを建て終えていた。

「そんなんじゃない。飯にしよう」

龍也は、そう言いながら食糧を取り出ししていた。

龍也達三人の晩飯は、干し肉に固いパン、水を淹れるだけで出来るスープと長持ちする食べ物ばかりだった。

「それにしても、何時食べても不味いなこの食べ物三流星わ。マチルダさん、もっとましな保存がきく食べ物無かつたんですか？」

龍也は、スープを飲みながらマチルダに言った。

「これ以上贅沢言つな。これは、値段がある程度低くてお手頃なのだ。文句を言うなら今度からリュウウヤのだけ、更に不味い物に変えるぞ」

マチルダは、そう言い。干し肉にかぶり付いた。

「そんな事態は、ごめんこうむる」

龍也は、スープを飲みながら言い静かになった。

三人は、黙々と晩飯を食べ、早めに寝ることにした。

【翌日】

三人は、日が登る前に起きた。そしてテントを畳み袋にしまい直ぐに山を登り始めた。

三人は、黙々坦々と登り日の出前には、山の頂上に着いていた。そして日の出を観ていた。

「綺麗」

「確かに」

エリスが呟き、龍也が同意した。マチルダは、黙って岩の上に座り眺めていた。

三人は、一時間程眺めた後、山を降り始めた。

案外降るのは、速く。昼前には、降り終えた。

昼は、やはり昨日の晩飯と同じ干し肉と固いパン、水で出来るスープだった。三人は、やはり黙々と食べまた直ぐに山を登り始めた。

三人は、すごいスピードで山を登り下りして夜には、国境の街ラグ（カムイ側）に着いた。此所には、余りグラコニアス兵は、居なかったが完全に居ないわけでは、無かった。だがその代わりカムイ国軍兵は、沢山居た。

エリス達三人は、国境の街ラグに入った。

街は、思った異常に賑やかだった。エリスは、もっと荒んだ情景を思い浮かべていたが予想の斜め上、真逆だった。ラグの街は、戦争のお陰でかなり潤っていた。

カムイが戦争をしているお陰で武器や防具、食糧を運び、売りに来た商人、カムイに雇われた傭兵の出入りのせいでラグには、沢山の

お金が落とされていき一気に賑やかになり人が増えていった。

エリスは、そんなラグを見て感嘆していた。

マチルダは、ボーとしているエリスを現実世界に連れ戻すためエリスの頬をつねろうと頬を掴み。

ぎゅうううううう

そんな効果音が付き添うな位いきよい良くエリスの頬をひぱった。

「いひゃい、いひゃい、いひゃい、いひゃい！」

数秒ひぱった後、マチルダは、エリスの頬を離した。

「マチルダさん！何をするんですか！？痛いじゃないですか！」

エリスは、涙目になりながらマチルダに抗議をした。

「だってボーとしてたから」

「マチルダさん！貴方は、ボーとしてたら頬を千切れるぐらいつねるんですか！？」

「何となくだ何となく。そんな事より飯だ飯」

「そんな事って！人の頬をつねっておきながら！」

エリスは、マチルダに怒って怒鳴って説教をしていた。マチルダは、そんなエリスの説教を巧みに交わしながら酒場を探していた。

程無くして酒場は、見付かり。見つけた頃、エリスの説教は、どんなに言ってもまともに聞かないマチルダに言っても意味がない為、

エリスが折れる結果となった。
三人は、久し振りに食べる温かくうまい飯を食べていきよい良く食べた。マチルダは、酒を浴びるように飲んでいった。

【三時間後】

酒場で飲み食いした。エリス達は、宿を訪ってない事に気づき今は、三人で宿を探していた。

「なかなか宿見付かないな」

「もう十二軒目ですよ！どうするんですか！？」

「そんなもんオレに聞くなバカタレ、あははははははは」

「マチルダさん酔っ払ってないで真面目に宿探して下さいよこのままだと俺達、街に居るのに野宿すつよ」

「まあ、そんなん気にすんな！何とかなるさ何とか」

マチルダは、ふらふら歩きながら龍也にのし掛かり顔を肩に置いた。

「そんな自信と根拠は、何処から出て来るんですか！」

「そんなもんオレの勘なのだ。それに昔の人は、こういつときいい言葉を残したぞ」

「なんなんですか？そのいい言葉って」

マチルダは、並んで歩いて二人の間に入って二人の肩に腕を回して顔を自分の顔にちかづけた。

「俺達は、そんな

「私達は、そんな関係、ゼー！たいの絶対有り得ませんから」ない・
・じゃん・・・・」

「ぷっ、あははははははははは、龍也、滅茶苦茶否定されてやんの！」

「エリス流石にそれは、俺も傷付く」

「え！だつて事実じゃないですか」

龍也は、肩を落とした。

「俺、たまにエリスが一番心に来る一撃が辛い」

「え！え？何々？私、龍也に悪いこと言った？」

「それが天然だから怒るも起これないし。はあ」

龍也は、溜め息を吐いた。エリスは、今だに

「え？え？」と言って龍也の顔や回りを見ている。

「まあ、エリスは、ミズキにベタ惚れだもんな」

「な！..！」

エリスは、真つ赤な顔になり。頭からは、湯気が出そうになっていた。

「瑞希かあゝ。生きて会えるといいな？」

「ミズキは、生きてる！それにもしカムイに居なくても必ず私が見付け出す！例え”地獄”だろうが”天国”だろうが」

「お！若い内は、その勢いだエリス！」

エリス達三人は、会話をしながら楽しく夜のラグの街を歩いていた。

数分後、大変な事になるとは、知れず。

第三十七話：追手と再会

エリス達は、グラコニアス帝王魔国の兵士に追われていた。今は、バハマ国の国境の街ラグから東の方角、カムイの国の山奥を走って逃げていた。

何故、三人は、グラコニアス兵士から逃げているのかという数時間前まで遡る。さかのぼ

【バハマ国内カムイ国側の国境の街ラグの大通り外れの宿屋通り】
エリス、マチルダ、龍也の三人は、楽しく会話をしながら歩いていた。

「あははははははははは、取り敢えず早く宿探そうぜ」

マチルダは、酔いながら言った。

「そろそろ離れて下さい！マチルダさん。酒臭いですよ」

エリスがマチルダに言った。

そうして三人は、雑談しながら夜の街を歩き続けた。宿を探し続けた。

「次で確か十三軒目だよな。とれるといいな次で」

龍也は、そう言った。

「確かに次とれなかったら本当に野宿を考えないと」

エリスは、そう言いながら頂垂れていた。

三人は、歩いた次の宿に向かつて。十三軒目の宿屋に向かう途中大きな広場に着いた。三人は、真ん中まで歩いた所で立ち止まった。

「マチルダさん」

「分かっている。酔いは、覚めた」

「何か厄介な事になりましたね」

三人は、話ながら広場の周りに注意を払っていた。すると周りから沢山のグラコニア兵士が出てきた。

「何故分かった？」

一人のグラコニア兵士が聞いてきた。

（（ああ、こいつがリーダー））三人は、同時に思った。そしてマチルダがその問いに答えた。

「そんなもん。着けていた時から殺気とばされ続けたら誰だって分かるっ」の

「そうか私の部下の育て方が悪かっただけか」

「違うな。お前の部下がやくたたずなだけだ」

マチルダがリーダー各の兵士に言った。

「部下の悪口は、いただけないな。私の部下は、優秀だ」

リーダー各の兵士からのハンドサインで一人の兵士がマチルダに切りかかってきた。

ギイイイイイン

甲高い金属音が広場に鳴り響いた。マチルダは、その場から一步も動いていなかった。だがその代わりにマチルダの隣に居た龍也が敵兵士の剣を刀で受け止めた。敵兵士は、直ぐに剣を引き元の位置に素早く戻った。

「なかなかやるようだな」

リーダー各の兵士がそう言い武器を構えた。そしてリーダー各の兵士が武器を構えると他の兵士も構えだした。マチルダ達三人は、敵に聴こえないように小さい声で話し始めた。

「このままだと不利ですね」

エリスが小声で言った。

「確かにな。直ぐに倒される事は、ないと思うけど長引けば唯の消耗戦になるだけだな」

龍也が敵をじっくり見た後、言った。

「取り敢えずオレが敵の目を眩ます魔術を放って敵を止めてからカミイに入ろう。もうすでに正規ルートの国境の検問所は、既に閉まっているから別のルートで行こう」

「私、マチルダさんに賛成」

「俺も賛成」

「じゃあ、よし！いくぞ！！」

エリスと龍也が敵を惹き付け始めた。龍也が近づいてきた敵を斬り捨て、エリスは、龍也が届かない敵や矢を射ってくる敵を適当に魔術と弓で翻弄していく。

マチルダは、広範囲魔術を使いながら一つの魔術を展開していった。

「よし！準備出来た！目を瞑れ！」

マチルダがエリスと龍也が声を掛けた瞬間二人は、目を瞑った。

そしてマチルダが叫んだのを聞いたグラコニアス兵士達は、マチルダを見た。その瞬間マチルダからかなりの眩しい光がグラコニアス兵士の目を襲った。

「ぐああああー！！！！」

「目があ、目があー！！！！」

グラコニアス兵士の殆んどが目を押さえて喚いていた。

「今の内に逃げるぞ！！」

マチルダが叫び三人は、走ってカムイ国に入った。

【カムイ国バハマ国側の国境付近の山脈群】

カムイ国に上手く入れたが山の中にグラコニアス兵士が待ち受けていた。そして今、最初に戻る。

「何でカムイにグラコニアスの兵士が居るんだよ!？」

龍也が走りながら言った。

「知らん!そんなこと言っていないで足動かせ足!追い付かれるぞ!」

マチルダが龍也に怒鳴った。

「二人ともイラつかないで静かにそして冷静になって下さい。それと後少しで追い付かれますよ」

「そうそう、そのお嬢ちゃんの言うとうり」

エリスが言った後、エリス、マチルダ、龍也の三人以外の声が聴こえた。

「そうだな、エリスの言う、と、お、り?って貴様、何者だ!？」

マチルダは、聞きながら距離を少し取り。叫んだ瞬間、龍也は、いきなり現れた奴の喉に刀を引き付けた。エリスもマチルダと同じ様にそいつから距離を取った。

「怪しい者じゃない、と言っても信じて貰えないけど一様、君達の敵では、無いよ」

いきなり現れた男は、そうへらへら笑いながら言った。

「そんなものが信じれるとお前は、思っのか？」

龍也が刀を引き付けながら言った。

「でも、そんな事言ってる暇無いよね。速くしないと捕まるよ」

男は、なおもへらへら笑いながら言った。

「それにさあ、もし敵だったらすぐその場で殺すかすると思っんだよなあ」

「ん、確かに。だがお前が敵じゃないとして、何故オレ達と関わった。普通、国の正規兵に終わっていた奴等と接触は、避けるはずだろ？」

マチルダは男に聞いた。

「ああ、そるはね、頼まれたからだ。っと敵がマチで近くに来た。取り敢えず着いてきて騙されたと思ってさ」

マチルダと龍也、エリスは、考えた。そして直ぐに結論を出した。三人は、それぞれアイコンタクトをしたあと代表してマチルダが男に言った。

「分かった。騙されたと思って着いて行く事にする」

「よし。じゃあ、着いてきて」

そう言い男は、走り出した。

四人は、それから沢山の場所を通った。滝の裏側、小さい自然洞窟、木の上、など通りそして村としては、大きく町にしては、小さい村に着いた。

「ここに来てどうするんだ？」

「取り敢えず着いてきて。着けば分かるからさ。」

そう言い村の中では、かなり大きい酒場ぼつい所に入っていった。中には、沢山の人が居て酒を飲んだり喋ったりしついた。

「おい！カルキノが女を連れてきたぞ！」

「ああ、本当だ！カルキノが女の子連れてきてる。」

「俺の女じゃない！こいつらは、頭領に言われたから連れてきたんだ！つてそんな事より、もうすぐグラコニア兵が来るから何とかして！？」

「おう！任しておけ。追いつ返してやる！」

「取り敢えずこつちに来い！カルキノ！」

カウンターに居た男にカルキノと呼ばれている男は、反応した。

「取り敢えず三人は、あのカウンターの後ろに隠れてね。」

そう言いカルキノと中に居る人達にカウンターの後ろに押し込まれた。

そしてエリス、マチルダ、龍也の三人がカウンターの後ろに隠れて直ぐにグラコニアス兵が入ってきた。

バツン！！

「おい！キサマラ。此所に男と女が二人づつの四人組が入って来なかったか！？もし、隠したら唯では、済まんぞ！」

入って来たグラコニアス兵士は、いきなり酒場全体に聴こえる大声で叫んだ。

中に居た人達は、その言葉を聞いて怒り出した。

「おい！キサマラこそ何考えてんだ！此所がどこだか分かってんのかグラコニアス帝王魔国兵士さんよ！」

「そうだ！そうだ！！テメーラさっさと帰りやがれ！此所は、カムイ国だぞ」

「キサマラ〜！どうしても隠しだてするなら。この酒場に居る全員を殺してから捜させて貰う！」

そう言いグラコニアス兵士は、剣を抜き今にも斬りかからんとした目をし出した。それを見た酒場の人達は、静かになった。

「何だ！何だ！先までの威勢は、どうした！恐くなって何も出来ないのか？」

それを聴いていた酒場に人達は、肩を震わせた。それを見ていたグラコニアス兵士は、勝ち誇った顔になったが直ぐに苛立つことになる。

そう言われ指を指した方向を見たグラコニアス兵士は、驚愕した。今まで誰一人武器を持って居なかったのに一人だけ武器を持っていた。そいつは、女性で髪は、短く明るい感じの女性でさっきから率先して喋っていた人。たが、そんな事よりも気になるは、その女性が持つている武器だった。真つ黒で不気味な輝きを放つ、命を刈り取る形をした大鎌だった。

大鎌から血は、ついていないがその女性が殺ったと、グラコニアス兵士達は、自分の直感が告げていた。

「何だ！何だ！怖じ気づいたのか！？だからグラコニアス帝王魔国兵士は、駄目なんだ！質が、悪い、金泥棒！」

「コッコッコッコッなっ！！」「」「」「」

「言わしておけばキサマラ。今すぐ叩斬って殺る！！」

「殺れるもんなら殺ってみろ！屑兵士！！」

グラコニアス兵士と酒場に居る人々が武器を持ち始めた。酒場は、静かになった。

聴こえるのは、外から聴こえる虫の鳴く音しか聴こえない。すると二階から足音が聴こえてきた。

コッ、コッ、コッ、コッ

そして降りてきた。すると酒場に居る人々の顔がどんどん青くなっていた。

足音は、増えていて複数の人が歩いていて来るのが分かった。そして階段を降りて来る。

【カウンターの後^{うしろ}】
エリス達三人は、カウンターの後ろに隠れていた為、降りてきた人や酒場の人達がどうなっているか、分からなかったが隣にいるカルキノと呼ばれた男を見るとこの世の者では、ないような者を見た感じに顔が真っ青をになっていた。

【酒場】

二階から降りてきたのは、八人程の男女合わさった集団だった。

「キサマラ。何をやっている。騒いでいいと言ったが限度があるだろ」

冷めた声で言い放たれた。その声を聞いた酒場に居る人の何人かは、武器を手から落とした。

「と、頭領！べ、別にお、お、俺達が悪いわけでは、ないんだ。その向こうの奴等が先に武器を出したからで、あの、その、この・」

「いいから静かにしろ。後で聞くから」

頭領と呼ばれた若い男は、言った。

【カウンターの後】

エリスは、今の声を聴いてかなり驚いた。一瞬自分の今、置かれている状況の悪さを忘れてカウンターから出そうになった。それをマチルダに止められた。

(あの声は、たぶん……)

【酒場】

酒場に居る人は、全員武器をしまった。

「すまないが武器を収めてくれないか？出来るだけ話し合いで納めたい」

そう言いグラコニアス兵士に言ったら兵士の中から一人のリーダーぽい男が出てきた。

「こちらこそすまない。怒りで我を忘れていて、どうも我々は、怒りぼくってな」

「いえ、いえ。こちらも似たような者です。取り敢えずこちらの椅子に座って下さい」

「ありがとうございます」

そう言い合い二人は、酒場にある椅子に座って話し合った。

「取り敢えずお聞きします。何故、グラコニアス帝王魔国の国軍兵士がカムイ国の中に居るんですか？一様今は、そちらの国と戦争中だと思えますが。事と内容に寄っては、そちらを駆逐しないといけ

「なくなりませんが」

「いえ、こちら、カムイ国に入ったのは、とある重罪人がこちらに逃げ込んだためです。魔王陛下からは、生死を問わずと。そこで本題なのですがこちらにエルフ族で金髪の女と魔人族まじんで青い髪の女と髪が黒く種族は、解らないが人形をした男と意味不明なへらへらした男の四人組がこの村に来たと思うのだが？」

「さあ、知らないな」

「なら、中を見せて貰ってもいいかな？」

「それは、了承出来ません。我々は、一様カムイ国に雇われこの戦に関わっている。中を見られて情報が漏れたりしたら大変ですから」

「どうしてもですか？」

「どいしても駄目です」

そう言い二人の冷たい視線が混じり合った。

「力づくでも」

「やってもいいですけど・・・死にますよ。それでもいいなら？」

頭領と呼ばれた男は、にこやかに微笑みながら答えた。だが男が発した言葉には、言い様がないプレッシャーがあった。

するとグラコニアス兵士のリーダーっぽい男は、立ち上がった。

「出ていくぞ」

唯、仲間にそう言いグラコニアス兵士は、酒場から去っていった。

【酒場外】

酒場の外は、バハマに去っていくグラコニアス兵士が居て、先程酒場で頭領と呼ばれていた男と喋った男が居た。すると遠くからその男に近寄ってくる若い兵士来て話し始めた。

「隊長！何で退いたんですか！？あんな奴等、直ぐに殺れますよ！」

「相手を嘗めるな。もしあの場で戦っていたらこちらは、一瞬で全滅しただろうな」

「なっ！あつらは、そんなに強いんですか！？」

「知らなかったのか！彼処に居た連中は、たぶん クリムゾンの奴等だ」

「ク、 クリムゾン ってあの傭兵集団の！」

「そうだ。さっき戦ったらあの場に居た奴等は、全員肉塊になっていたな」

そう言いグラコニアス兵士は、夜の闇に溶けていった。

【酒場】

グラコニアス兵士が去ってから直ぐに酒場に居た人々は、平謝りをしていた。

「す、すみません頭領」

「すみませんで許されると思ってたのか!？」

頭領と呼ばれた男と一緒に降りてきた一人の女性が言って更に皆を攻めだした。

「あれほど何時も何時もハメを外しすぎるなど、言っていたのに。何だ!この状況わ!床には、死体が転がっているわ。何か口論しだすわ。最終的には、何だ生死問わずの乱闘騒ぎか!?!ああっ!」

酒場に居た連中は、泣きそうな顔になったり、肩を震わせている者達が多数出てきた。

「まあ、まあ、そう怒るな。唯、ハメを外しすぎただけだ。それより、カルキノ」

名前を呼ばれたカルキノは、いきよいよく立ち上がった。

「ちゃんと、連れて来たんだよなあ」

「は、はい!ちゃんと連れてきました」

「よし。カウンターに隠れてる三人、出てきて貰えますか?」

そう言いエリス、マチルダ、龍也の三人は、カウンターの後から出

てきて初めて頭領と呼ばれている男の顔を見た。
そいつは、・・・・・・・・

「ミ、ミズキ？やっぱりミズキなんだよねえ？」

「ああ、そうだよ。久し振りだね。三年振りぐらいかな？会いたかったよエリス」

そう瑞希の口からエリスの名前が呼ばれた瞬間。エリスは、瑞希に抱きついた。

「ミズキ、ミズキ、ミズキ会いたかった！ミズキに何時も会いたかったよ〜う。グス、ミズキィ〜。ウワワワアアアアン！！」

そう言いながらエリスは、瑞希の腕の中で泣きじゃくった。そんな泣きじゃくるエリスを瑞希は、頭を撫で続けた。

第三十八話：過去と決意

エリスが泣き止むのには、二時間程の時間がかかった。

「じゃあ、エリスも泣き止んだ事だし。ミズキ、今まで何をしていた聞こうか？」

マチルダが瑞希に向かって言った。

「そうですね、話しましょう。取り敢えず二回の一番奥の部屋まで行ってきてください」

瑞希は、マチルダ達にそう言い自分は、酒場に居る人達に指示を出していた。

「取り敢えず今日俺は、何も言わないから。さっきみたいに騒ぎ過ぎるなよ俺の客人が来ているからな。後は、好きにしている」

瑞希は、そう言いマチルダ達三人の所に行った。

瑞希達四人は、何も喋らないで一番奥の部屋に着いた。

「取り敢えず適当に座って」

瑞希は、三人にそう言い椅子に座った。三人も近くの椅子に座り瑞希は、話し出した。

「何から話そうかな？まあ、エリス達三人と別れた後の話からしようか」

そう言い瑞希は、エリス達が館を逃げた後の話をし始めた。

【三十分後】

瑞希は、あの日の事を全て話した。

「そうか、ブラットが死んだか」

マチルダは、そう言い。龍也は、俯いたまま黙り込み。エリスは、また泣き始めた。

部屋に重い空気が流れているとドアが開いた。

エリス、マチルダ、龍也三人は、ドアの方を見た。部屋に入ってきたのは、一人は、黒い服を着た女性で髪と肌が雪の様に真っ白だった。もう一人は、白い服を着た女性で肌は、浅黒く髪は、漆黒の様に黒い人だった。

「ミズキ誰だ？その二人は？」

そう言いマチルダは、二人の事を指をさしながら言った。

「ああ、その二人。マチルダさんも知っていますよ。ユキとヤミです」

「はあ！ユキとヤミって、あのよくお前の頭に乗かっていた！」

「そうそう、その二人です。ビックリしたでしょう」

瑞希は、少し楽しそうにしながらマチルダや龍也、エリスが驚いて

いた顔を見て昔に戻った感じに、懐かしい思いになった。

「久し振りです。こんな姿になっていてビックリしたでしょう」

ヤミがそう言った。

「ヤミ。いきなりドラゴンから人になっていたら誰だってビックリする」

とユキがヤミに言っていた。

「そろそろ続きを話したいから二人も適当に座れ」

瑞希に言われユキとヤミは、瑞希の両隣に座った。それを見た瑞希は、苦笑いになりながら話し出した。

【三年前】

公爵家館の襲撃があつてから一ヶ月と十三日瑞希は、寝たつきりな状態が続いた。次の日の朝瑞希は、目を覚ました。

「ミズキさん！おい！皆、ミズキさんが目を覚ましたぞ」

瑞希の直ぐ近くに居た男が部屋に居る人達に声をかけた。すると部屋で寝ていた者や外に居た人が瑞希が寝ている所まで駆けつけた。

「ん、んん〜。……………此所、何処？」

瑞希は、部屋の中を見回した。

部屋は、木で出来ていてあまりいい造りとは、言えなかった。部屋の中には、何人もの男女がおり全員瑞希の周りに来て瑞希を心配そうな顔で見ている。

「ミズキさん。俺の事解ります」

最初に瑞希が起きた事に気づき他の皆を呼んだ男が瑞希に話し掛けた。瑞希は、見たことが有ると思ひ脳内の記憶に当てはまる人物を探した。適合する人物は、直ぐに見付かった。それは、ハルキ・パーパーだった。

その他にも知っている人物が居た。アリス・グラスとその双子の姉のテセリナ。アスコ・クルーパーとカマカヤ・サーストル他もちろほら見たことがある人が沢山、瑞希の周りに居た。

「ああ、君達か。所で此所は、何処だ？」

瑞希は、冴えない頭で考えた。

「此所は、ルノーノーツから南東に進んで十日程の距離にある森の中の山小屋です。あの襲撃からもう一ヶ月以上たちました」

「・・・襲撃・・・」

瑞希は、呟いた。

（そうだ。あの夜に・・・ブラットさん）と思った。

「ハルキだったけ。どれだけ生き残ったんだ」

「あの時逃げた奴等は、今、此所に居る全員です。人数は、二十七人です。他の隊の隊長や副隊長、指揮がとれる人は、皆死んじゃっ

て取り敢えず此所まで逃げてきたです。敵も俺等が生きているのに
気づいていて追っ手が来るのも時間の問題で……ミズキさん
の力が必要なんです。どうか俺達を助けてください」

そう言いハルキは、瑞希に頭を下げた。すると周りに居る人々は、
頭を下げ始めた。

瑞希は、皆を見回しそして口を開いた。

「一つ聞きたい事があるエリスは、エリスは、生きているのか？」

「エリスお嬢様が生きているかは、分かりません。館が跡形もなく
吹き飛んでいて生死を確かめる事が出来ませんでした」

「……そうか……」

瑞希は、そう呟いた。そして顔を上げ皆を見回しハッキリ宣言した。

「よし！分かった。僕、いや。俺がお前達の上に立つてふりかかる
火の粉を打ち払おう」

瑞希は、皆の前で宣言した。

「ほ、本当ですか！？ミズキさん！」

「ああ」

「やったー！。これで希望が見えてきたー」

ハルキを中心にかなり喜んでいた。

瑞希は、そんな様子を眺めているといつの間にかユキとヤミが

擦り寄ってきていた。そんな二体を瑞希は、優しく頭を撫でてやった。

【夜中】

瑞希達二十八人は、静かに夜の森を東に進んでいた。

瑞希達は、取り敢えず東の小国が乱立している人族国家と魔族国家が境の一国家に逃げる事にした。

敵が追い掛けて来ている可能性が有る為、闇夜に混じって目的地を目指していた。瑞希達の進行は、取り敢えず基本は、夜の闇に紛れて進み、昼は、食糧や仮眠、資金調達などをして進み続けた。

【東の魔族国家バルハラン】

一ヶ月で東の諸国群の一つバルハランに着いた。その頃には、ユキとヤミは、急成長して十代後半位の魔人の姿になれるようになっていたがその間、瑞希は、魔力不足による疲労に悩まされた。

この一ヶ月かなりのハイペースで進んだ為、皆には、疲労の色が見とれた。

瑞希は、疲れている皆を労い宿をとって休む事にした。この国で過ごしていくため瑞希とハルキ、他数人は、部屋で今後の事を話し合っていた。

【翌日】

瑞希達は、傭兵ギルドに来ていた。瑞希達二十八人は、全員で登録に来ていた。

「取り敢えず此方に全員の名前と傭兵団団名を記入して下さい」

受付嬢は、そう言いながら紙を瑞希に渡した。

瑞希達は、紙を貰って集まった。

「取り敢えず名前を書いけ」

瑞希は、そう言い皆は、名前を書き始めた。

全員の名前が書き終わった後、自分達の傭兵団の団名を何にするか考えていた。

「書き終わったな。団名どうする？」

「どうするって言われても」

瑞希達は、考えていた。

「クリムゾン」

瑞希が呟いた。

「クリムゾン？なんですか？」

「昔に読んだ本に クリムゾン って言う騎士団が出てきたんだ。

その騎士団は、国や家族、仲間を救う為に無理難題な任務をこなす最終的には、国の為に死んでいったんだ。その騎士団の名前」

「最後死ぬのは、嫌だけど無理難題な任務をこなす程強かったってところは、いいと思う」

「そうだな、他にいいやつ無いしな」

皆、賛成の意を唱えそして記入欄に書いた。

クリムゾン

と。

その日、アビアル第三大陸に名を響かせた傭兵団が設立された。

第三十九話：クリムゾン

【クリムゾン 設立から一年後】

クリムゾンは、この一年で沢山の依頼をこなし東の諸国群の中でかなり有名になっていた。

瑞希達 クリムゾンの最初の人数は、二十八人だったが今では、二百人を越え更にドラゴンやワイバーンを沢山持っていた。なぜそこまで沢山持っているのかと言うと団長である瑞希がドラゴンと念話が出来る為である。

瑞希は、ユキとヤミにドラゴンがモンスター等にすると念話を教えた。瑞希が念話をマスターするのに時間がかかったが完璧に使えるようになった。

その為、その他にもモンスターを沢山持っていた。

だが更に瑞希達を驚かせたのは、この地の諸国群の人族国家と魔族国家の関係だった。人族と魔族が争っておらず、その逆の仲良く貿易等をしていた。その事実、他の国。五大国は、その事実を知られていない為、平和にやっていた。

瑞希達傭兵団は、人族に友好的で人族国家にもよく依頼されて出入りしていた。その為、東の諸国群では、クリムゾンの事を尊敬しだす国民や王が居た。

【更に一年後】

瑞希達率いる クリムゾンは、規模が更に大きくなり東の諸国群の人族、魔族関係無く全ての傭兵団を傘下に治め。若者は、国の兵士よりも クリムゾン に入りたがる程の人気になった。

だが東の諸国群に悪い知らせが入ったそれは、『東の諸国群の人族国家と魔族国家が友好関係にある』との情報が他国、更に魔国三大

国の一つ最も人族国家に近く血の気が盛んなガリアス国に知られた。東の諸国群は、急いで国の人王、魔王を集め仲介人に クリムゾンの団長を選んだ。

【人族国、魔族国国境中心の街アメダス】
街の中心には、大きな会議場がありそこに人王、魔王がま集まっていた。

「大変な事になった」

「そう、このまま我々の関係が露見でもしたらガリアスの事だ他の大国に知らせ、攻めてくるぞ」

「そんな事は、分かっている！ガリアスをどう対処するのかが問題なんだ！」

「それこそ分かりきった事だ！だがガリアスと他大国二国に攻められて我々諸国が生き残れると思っっているのか！」

会議は、混乱し泥沼化。内容は、纏まらず時間だけが過ぎていった。

【会議開始から二週間】

瑞希の耳に大変な事（情報）が入ってきた。
その情報は、他の諸国には、まだ知られていなかった。

「今から軍を派遣し、ガリアスを追い払えばいい！」

「そんな事をしたら他の魔族国家を敵に回す事になるぞ！そんな事になったら我々は、終わりだ！」

会議は、どんどん熱をおび始めた。

「静粛にー」

瑞希の声が会議場に響き一斉に静かになった。

「今朝、私の部下から入った情報によりますとガリアスの密偵が侵入しようとしたところを捕まえたとの事です。ですが何名かの密偵は、既に侵入をしている可能性があります。速く決断をしないと手遅れに」

全員がその事を聞いて会議場は、静まりかえっていた。

瑞希は、それを見てまた静かに口を開いた。

「私に提案があります」

そう言った瞬間会議場は、少し騒ぎ出したが直ぐにおさまり一人の大王が口を開いた。

「ならその案を言ってみよ」

「先ず我々 クリムゾン がガリアスとアメリカ、ラファニアに偽情報を知らせ臨戦体勢に三国にすれば先ず此方に構っている暇がなくなります。その時間を利用して諸国群を一つの国家に纏め人族、魔族の両方が生きる国、を作り中立国となればいいと思います」

「だがそう上手くいくか？更に統合したとしてガリアスに対抗できるのか？」

「出来るでしょう。先ず国自体の規模は、ガリアスよりも上ですそれに人族、魔族からもあまりこの東の地に利用価値が無いと思っ
ているでしょう。下手に戦争をし国力を落とせば他の大国の餌食になつて国が陥落してしまいます。時間も二、三年以上稼げます。その内に国の基礎、国民の同意を得られれば実現します」

皆が静かになつて考えた。

もしも瑞希が言った事が出来れば国の主、王として嬉しい事だ。ガリアスがこの関係を知つて攻めてきたら東の諸国は、全て壊滅し残酷、無慈悲な国のガリアスな為、諸国の関係を知っていた国民は、女、子供関係無く全てが処刑され人族国側もガリアスに攻められ虐殺される事など安易に予想できた。

だがもしも統合が可能として新しく統合した国の王は、誰になるか？貴族は？貿易は？と色々な問題が山積みである。

だがガリアスをもし追い返すのに成功したとしても他の大国が攻めて来たら諸国の寄せ集めの軍隊では、時間がたつにつれ綻びがでて滅んでしまう。瑞希が言う方法でしか最善の策は、無かった。

皆が悩んでいると東の一の国の王、人王カルメ・イスラルカ王が提案を出した。

「皆、私の話を聞いてくれ」

あまり声は、大きくないが会議場全体に響き皆、カルメ・イスラルカ王の方を見た。

「私は、ミスキ殿の提案に賛成だ。我々東の人族国家は、他の地方国家の人族とは、違い魔族を恨んだり憎んだりしない。どちらか

と言つと友好的、平和的に過ごしたい。

だが今、東の諸国の我々が危機に陥っている。人族、魔族どちらの種族の国民の血が流れるのは、私は、嫌いだ。だが戦は、戦争は、もう避けられない。抵抗しなければ虐殺され戦えば戦場で兵士が沢山死にどちらにせよ沢山の命が失われる。なら少しでも国民、この東の地に住む人々を少しでも多く生き残れる方を選ぼうではないか」

イスラルカ王のその演説により自分の保身よりも国民の為に人王、魔王は、全員覚悟を決めた。

イスラルカ王は、覚悟を決めた各国の王を見て更に口を開いた。

「私は、新しき国の王を皆の多数決で決めたいと思っている。我々を統べる器があると思う者は、前だよ」

イスラルカ王が言い放ったが誰一人前は、出てこなかった。この場にいる各国を統べる王達は、分かっているのだ。自分が統べれる程器が大きくないことを……。

「誰かいないのか？」

イスラルカ王が聞くと一人の魔王が手を挙げた。

「発言宜しいかな？イスラルカ王」

イスラルカ王は、構わないと意思表示をした。

「我は、自分の国を治めるの手一杯だ。だから誰か我々を治められる統治者を我等の中の誰かを推薦しその者でいいか皆で決めよう」

「その意見に反対だと思つる者は、拳手を」

瑞希がそう言ったら誰一人手を挙げなかった。

瑞希は、辺りを見回し誰一人手を挙げないのを確認したら次に移行した。

「では、新しい国の王でこの者を推薦したい者は、挙手を」

瑞希が言い何人かの人王、魔王が手を挙げた。新しい国の王にいいと何人かをのべた。

名を挙げられた人は、四人居た。

- ・カルメ・イスラルカ王（人王）
- ・カリーヌ・ラ・クラメス女王（人王）
- ・ジルギス・ダイラス王（魔王）
- ・ブブ・ド・ラサハラス王（魔王）

の四人の名前が挙がったがその四人は、険しい顔をしていた。何故なら四人の王達は、回りの国の王から上手く治めているように見えるが、実際は、優秀な家臣に支えられギリギリ国の状態を維持しているのだ。それがいきなり国が大きさ、国民の数が何倍にも膨れ上がる為、さばききれなくなり新しい国が内部分裂しだし崩壊する事をわかっているためである。

そしたらイスラルカ王が立ち上がった。

「我々は、皆が思っているよりいい王では、ない。その為、辞退させてもらう。その代わり新しい候補者を挙げたい」

イスラルカ王は、皆の前で言いそしてその者の名前を言った。

「私は、 クリムゾン の首領”ミズキ” 殿を新しい国王に推薦す

る」

この場にいる多数の王達の顔が驚いた顔になった。

「イスラエルカ王。何故あなたは、ミズキ殿を新しい国の王にしたいのですか？」

イスラエルカ王の話を冷静に聞いていた一人の王がイスラエルカ王に質問した。

「私は、ミズキ殿に一目置いている。ミズキ殿は、最初たったの三十人しか居ない傭兵団をたかが一年で東の国の子供から大人まで誰でも知るほどまでに大規模な傭兵団にし、更にもう一年で東に拠点を置く傭兵団全てを傘下に置いていてなおも傭兵団は、規模が大きくなっていく。それに負け無しと言われる程に強く、知略にも長けている。今や東の国の中の国よりも大きく大量の人を部下にしている。そんなミズキ殿が首領をしている。クリムゾン は、一国の大國程の規模を有している。ならばそんな大國並の傭兵団を治めているミズキ殿に頼むのが妥当では、ないか」

皆、イスラエルカ王の話を聞いて納得した顔をしているが一人納得していない人物が居た。それは、新しい国の王候補に挙げられた瑞希である。

「何故、関係無い私が新しい国の王にならなくては、ならないのですか!？」

それを聞いたイスラエルカ王は、残念そうな顔をし、そして最初に候補として挙げられた四人と内緒話をし始めた。

そして直ぐに話終わると四人は、瑞希に笑顔のまま近づいていった。

「ミズキ殿少し私達話を聞いてもらえないだろうか（強制）」

四人は、なおも笑いながら近づいて来るが後ろには、どす黒いオーラが漂っていた。

「な！な！そ、そろそろ私は、休ませて貰おうかな。それでは、皆さんこれにて」

瑞希は、逃げようとしたが

「逃がしませんぞミ〜ズ〜キ〜ど〜の〜」

瑞希は、イスラルカ王とダイラス王の二人に捕まった。

「クラメス王女は、お優しいから哀れな私を助けて下さいますよね」

瑞希は、弱々しくクラメス王女に聞いたがクラメス王女は、笑いながら止めを刺した。

「もう決まった事です諦めなさい」

瑞希は、固まりそのままずると会議場の外まで引きずられ途中もとに戻り他の国の王に助けを求めたが殆んど王に目線をそらされ、瑞希を哀れに思い助けようとたが四人の静かな沈黙とプレッシャーに気圧されてあえなく撃沈され。それを見た王達は、瑞希を哀れな生け贄として無事を祈りながら見捨てた。

そして四人の王と一人哀れな生け贄は、扉の奥へと消えていった。

数分後、アメダスの街全体に瑞希の悲鳴が響き渡ったとか無かったとか。

第四十話：新国家

【あれから一時間後】

瑞希とイスラルカ王の五人は、会議場に戻って来た。

イスラルカ王は、入って皆が席についているのを確認したら口を開いた。

「ミズキ殿は、我々四人の説得（脅迫と拷問）のかいあって快く（嫌々）新しい国の王になってくれる（無理矢理）そうだ。この事に反対な者は、拳手を」

本当は、瑞希がやることなどだが、瑞希は、死体の様に動かないのを見ていて誰一人手を挙げなかった。もし挙げでもしたら次は、挙げた本人が瑞希の二の前になるのを避けたかったからであるし、瑞希の人を操る術すべや国民からの人気を考えると反対する理由が見つからないためもある。

「反対は、ないな。これにて今日の会議は、終了させて貰います」

各国の王達は、瑞希にあわれ皆、視線を送りながら足早に会議場から出ていった。

【翌日】

瑞希は、昨日の事を思い出しながら会議場に向かっていた。

（ああ、昨日は、酷い目に遭った）

瑞希は、そう思いながら会議場に入った。

会議場には、既にイスラルカ王、クラメス王女、ダイラス王、ラサ

ハラス王他、半分近くの王達は、会議場に集まっていた。

瑞希は、定位置に座り全員が集まるまで待った。

瑞希が来てから一時間程で全員揃い。瑞希は、全員揃ったのを確認すると立ち上がった。

「昨日、会議の結果私が新しい国の王になることが決まりました。取り敢えず私が話すことを聞いてください」

瑞希は、坦々とこれからの国の体制、ガリアス対策等を話し始めた。

クラメス王女、ダイラス王、ラサハラス王他、半分近くの王達は、会議場に集まっていた。

瑞希は、定位置に座り全員が集まるまで待った。

瑞希が来てから一時間程で全員揃い。瑞希は、全員揃ったのを確認すると立ち上がった。

「昨日、会議の結果私が新しい国の王になることが決まりました。取り敢えず私が話すことを聞いてください」

瑞希は、坦々とこれからの国の体制、ガリアス対策等を話し始めた。

新しい国の体制は、出来るだけ早く整える必要があった。まず最初に東の諸国を纏めて一つの国になることをガリアスや周辺諸国に知られないため町や都市、街道なのに兵士や傭兵を配置し旅人や商人などが入ってこないようにするため、見張らせその間に国の領土になるところと他国の境界線に城壁を建てる事にした。城壁は、他国

に張れないようにするため風系魔術の目眩ましで張れないようにする事になり、決まったその日から着工が始まった。更に瑞希は、新しい国の中心部に新しい首都を置くことにしその開発は、瑞希達 クリムゾン が行うことになった。

瑞希は、更に各村、街、都市等を結ぶ街道の整備、港の改築、新しい防御拠点の新築等の様々な事を同時に進めた。

新しい貴族は、区域を四つに分け、その四区域のトップを公爵にしその下に侯爵、伯爵、子爵、男爵という風に爵位をつけていった。公爵は、すでに決まっております東の港側をダイラス王がなることに東の公爵に、

西の魔国、人国両方の国に接するところをイルラルカ王が西の公爵に、

北の人国側は、クラメス王女が北の公爵に、

南の魔国側は、ラサハラス王が南の公爵にそれぞれなった。

公爵に割り振れた場所にどれだけの貴族を置くかは、四人の新公爵に任せた。

取り敢えず会議は、終わり一気に作業に取りかかった。

【一年後】

国境付近の城壁は、沢山問題があったが無事完成し、瑞希達 クリムゾン が作った首都は、たった半年に出来、今では、百万人が住むこの国一の大都市になった。

他、瑞希達が作ったのは、北領にある山脈の一つの山の天辺に作った。空都クラン。

東領の港中心に船を使った貿易の中心と水軍の中心になるように作った。軍都ラゲナル。

西領にある四本のいりくんだ大河の中にある小島を繋げて作った。水都ミラミス。

南領は、広大な平原の中心に六本の高い塔とそれを繋げる六角形、段々式の五集の城壁に護られる壁都ガンダロス。

の四つを作りその四ヶ所をそれぞれの東西南北領の公爵が治める事になった。

瑞希は、首都、後の龍王都グランコクマの中心にある王城オーファンの王執務室にて書類を処理していた。すると扉が開いた。

「失礼します。会議の準備が整いました」

「わかった。下がれ」

「はい」

瑞希は、一連の動作を行った後、ため息を吐いた。すると部屋からため息を見た人が瑞希に声をかけた。

「そんなため息を吐いてないで早く会議の準備しましょうよ。頭領」

「こら！サラ。ここで皇帝陛下の事を頭領と呼ぶなと言っているでしょ！何回言えばわかるの！」

サラと呼ばれた女は、瑞希を頭領と呼び。瑞希を頭領と呼んだサラは、別の女に怒られていた。

二人の名前は、サラ・サール、カリエ・サールの姉妹で、二人は、瑞希をサポートしている王の付き人で、今は、三人で事務処理をしていた。

瑞希が二人に会ったのは、クリムゾン 結成から一ヶ月ほどたったときだった。

【 クリムゾン 結成から一ヶ月後】

瑞希達は、毎日毎日こつこつと依頼をこなしていた。

その日は、三日前から依頼のために山に増えた魔物の討伐が任務でちょうどその帰り道中だった。

「今回も楽勝だったすね。ミズキさん」

話しかけてきたのは、ハルキ、テセリナ、アリスの三人と他、十名、計十四人でその依頼を済ませていた。

「そうね、早く終わったわね。これもミズキのお陰かしら」

そう瑞希は、皆と共に行くとした時に弱くは、追っ手が来たときに逃げ切れなかったりすると行けないのでかなりのスパルタで魔術や武術など瑞希が知っている知識を詰め込ませた。

その様子は、地獄絵図で初めて瑞希の本気の訓練を受けた物は、トラウマに成る程厳しかった。

そんな毎日の訓練を乗り越え瑞希達 クリムゾン は、メキメキと力をつけて今回の任務は、予想以上の速さで終わった。

「そりゃあ、あの地獄の訓練をやって力がつかなかったら俺、死んじゃうし」

「そうですね。私もあの訓練には、おどろい、て……」

ブルブル、ブルブル

ハルキと話していたアリスは、瑞希の地獄の訓練を思いだし震えだ

した。それを見たテセリナは、アリスに抱きついて慰めた。

「よしよし、今は、訓練じゃないよ」

「い」

「い？」

「いやああああ、助けてー！。もう訓練したくない！いやだああああ」

アリスは、完全に過去の記憶（瑞希との訓練）に捕らわれテセリナの腕の中で暴れだした。

「こ、こらアリス！」

「ごめんなさいもうしませんからこれ以上は、やめて下さいー」
テセリナが声をかけたが今だに暴れている。
それを見かねた瑞希がアリスに近づき頭を思いつきり殴った。

ゴン

痛そうな音が周りに響きアリスは、一瞬気を失って直ぐに起きた。

「あ、頭が痛い。あれ？何でテセお姉ちゃんが私に抱きついてるの？」

アリスは、起きた時、抱きついているテセリナの顔を見てハテナマーカーを浮かべていた。

そんなくだらなあ会話を続けながら一行は、あるものを見つけたそれは、商団が何かに教われた後だった。

「み、ミズキさん！あ、あれ！」

「わかつてる。全員散開」

瑞希達は、二人一組に別れ周りを散策しはじめた。

「ミズキさん！生存者発見しました！」

その声を聞いて瑞希は、直ぐに駆け寄った。

「大丈夫ですか！俺の事わかりますか！？」

瑞希は、顔を軽く叩きながら生存者の安否を確かめた。

「うう」

生存者の男は、生きていた。

「大丈夫か！何があつた！？」

生存者の男は、掠れながら瑞希に応えた。

「と、盗賊に、襲われ、てゴホッ、ゴホッ、女、子供が、ゴホッ、拐われ、た、ゴホッ、ゴホッ、助けてやってくれ」

男は、そのまま息絶えた。

「取り敢えずここら辺を探せ！何としても拐われた人達を救出するんだ！散開」

瑞希の掛け声で皆、森の中に入っていった。

【十五分後】

瑞希とハルキは、盗賊の隠れ家らしき洞窟を見つけた。瑞希は、ハルキにハンドサインで指示を出し、指示を見たハルキは、急いで他の仲間にこの事を知らせに言った。

瑞希は、ハルキが言ったのを確認すると洞窟の中に入っていった。洞窟の中は、以外に広く頑丈だった。拐われた人を捜す途中いくつもの部屋を見た。全ての部屋の中を確かめたが一っ子一人見つからなかった。

瑞希は、どんどん進んでいった。すると奥の広間から笑い声や話し声が聴こえてきた。

中を覗くと大きな広間に二十人程の男達が酒を飲みながら笑い合ったり、罵ったりと楽しそうに宴をしていた。瑞希は、ほしい情報がないか聞き耳をたてた。

すると商団を襲った時の話が瑞希の耳に入ってきた。

「にしても、今回の獲物は、楽だったな」

「ああ、そうだ！楽だった」

「でも、あの女二人は、強かった。だって俺達が八人も殺られるなんて思っても見なかった」

「あの時は、人質取って正解だったな。あのままだともしかしたら全滅したかもな」

「確かに、あの時人質取ってなかったら今頃全滅してたかもな」

「じゃあ、人質取って正解だったな。取らなかった今頃、死体になっっていたな」

「そう言えば、女の話で思い出したんだがよ。あの女やらねえ」

「いいな、あの女二人かなりの美人だったしなあ。仲間の恨みってとかなんとか言ってたな」

「あの生意気な女二人が泣き叫ぶところを想像すると興奮してきたぜ」

「あの女捕らえてる部屋って何処だったけ？俺、その時見張り番だったから知らねえんだよな」

「確か一番奥まで行って左に曲がって……奥から……三番目の部屋だったかな」

五人の男は、今日この後する事を話していた。

瑞希は、話を聞いて一気に駆け出した。

瑞希は、直ぐに男が言った部屋についた。部屋からは複数の気配があり男が言っていたことが事実だと確認した。

扉は、鉄製でカギがかかっていた。瑞希は、少し離れ魔法を唱えた。

《我が願ウ物、原初ノ砂トナレ 変砂^{へんさ}》

扉は、音もなく砂となって崩れた。

瑞希は、直ぐに部屋に入り中を見たすると十九人の女子供がいつしよくたになって寝ていた瑞希は、一番手前の女性を起こした。

「ん、んん。キ」

起きた女性は、瑞希を見て悲鳴をあげようとしたが瑞希に口を押さえられ叫べなかった。

「俺は、味方です。助けに来ました。今から貴女は、俺の指示に従って下さい。わかつたら首を縦に降ってください」

女性は、首を縦に降った。其を確認した瑞希は、ゆっくり手を離した。

「取り敢えず皆を起こしてください。なるべく静かに」

女性は、また首を縦に振り他の人を起こし始めた。

瑞希は、唯一両手足を縛られた二人の女性を起こした。

二人は、直ぐに起き瑞希は、縄を解きながら言った。

「俺は、傭兵ギルドに所属する傭兵団 クリムゾン の団長ミズキ・瑞希は、どんどん進んでいった。すると奥の広間から笑い声や話し声が聴こえてきた。

中を覗くと大きな広間に二十人程の男達が酒を飲みながら笑い合ったり、罵つたりと楽しそうに宴をしていた。瑞希は、ほしい情報がないか聞き耳をたてた。

すると商団を襲った時の話が瑞希の耳に入ってきた。

「にしても、今回の獲物は、楽だったな」

「ああ、そうだ！楽だった」

「でも、あの女二人は、強かった。だって俺達が八人も殺られるなんて思っても見なかった」

「あの時は、人質取って正解だったな。あのままだともしかしたら全滅したかもな」

「確かに、あの時人質取ってなかったら今頃全滅してたかもな」

「じゃあ、人質取って正解だったな。取らなかった今頃、死体になっっていたな」

「そう言えば、女の話で思い出したんだがよ。あの女やらねえ」

「いいな、あの女二人かなりの美人だったしなあ。仲間の恨みつてとかなんとか言ってたな」

「あの生意気な女二人が泣き叫ぶところを想像すると興奮してきたぜ」

「あの女捕らえてる部屋って何処だったけ？俺、その時見張り番だったから知らねえんだよな」

「確か一番奥まで行って左に曲がって・・・奥から・・・三番目の部屋だったかな」

五人の男は、今日この後する事を話していた。

瑞希は、話を聞いて一気に駆け出した。

瑞希は、直ぐに男が言った部屋についた。部屋からは複数の気配があり男が言っていたことが事実だと確認した。

扉は、鉄製でカギがかかっていた。瑞希は、少し離れ魔法を唱えた。

《我が願ウ物、原初ノ砂トナレ 変砂^{へんさ}》

扉は、音もなく砂となって崩れた。

瑞希は、直ぐに部屋に入り中を見たすると十九人の女子供がいつしよくたになつて寝ていた瑞希は、一番手前の女性を起こした。

「ん、んん。キ」

起きた女性は、瑞希を見て悲鳴をあげようとしたが瑞希に口を押さえられ叫べなかった。

「俺は、味方です。助けに来ました。今から貴女は、俺の指示に従つて下さい。わかつたら首を縦に降ってください」

女性は、首を縦に降った。其を確認した瑞希は、ゆっくり手を離した。

「取り敢えず皆を起こしてください。なるべく静かに」

女性は、また首を縦に振り他の人を起こし始めた。

瑞希は、唯一両手足を縛られた二人の女性を起こした。

二人は、直ぐに起き瑞希は、縄を解きながら言った。

「俺は、傭兵ギルドに所属する傭兵団 クリムゾン の団長ミズキ・ヤグラと言います。たまたま依頼の帰り途中に襲われた商団を見つ

け生き残りに自称を聞いて助けに参りました」

瑞希は、そう言い縄をほどき終わった。すると二人の女性は、口を開いた。

「私の名前は、カリエ・サール。こつちが妹のサラ・サール助けてくれてありがとう助かったわ。それと貴方に聞きたいことがあるんだけどいい？」

カリエが瑞希に聞いてきた。

「別にいいけど短めに」

「女、子供は、ここに連れてこられたけど。他の人は、大丈夫なの？」

「生存者は、いない。俺達が駆け付けた時には、虫の息なのが一人居たがこの事を俺達に伝える為に最後の力を振り絞って死んだ」

瑞希は、簡潔に答えた。

「そう。・・・ありがとう。取り敢えず早くここから逃げましょう」

「でも、カリエねえ。武器がなのはどうするの」

サラが武器がない事をカリエに言った。

「武器ならこの部屋の二つ隣の部屋に沢山あったぞ」

瑞希は、そう言った。

「じゃあ、武器を取って速くここから逃げましょう」

そう言い全員で部屋を出た。瑞希は、唯一武器を持っているので先頭に立ち、カリエ、サラは、瑞希の後ろを歩いた。

二つ隣の部屋につき、二人は、自分に合った武器を選んだ。

カリエの武器は、ランスでサラの武器は、ハンマーだった。

それから出口までは、瑞希が先頭、サラが最後尾、カリエが真ん中でどちらのサポートに行きやすい陣形を取った。

出口までは、盗賊に会わず無事に隠れ家から逃げてこれた。出て直ぐのところ二十人近くの人が居たカリエとサラは、前に出て武器を構えたが瑞希が二人の前に手を出した。

「外の状況は？」

瑞希は、ハルキに聞いた。

「特に何もありませんでした。見張りも既に殺りましたし後は、中に居る奴らだけです」

「そうかならお前達は、この人達の護衛をしている。中の雑魚は、俺が片付けておく」

「わかりました」

瑞希は、そう言い隠れ家にまた向かった。

【一時間後】

日も沈み辺りが暗くなった時、瑞希は、洞窟の中から出てきた。

「ミズキさん、終わりましたか？」

「ああ、全員殺した。もう辺りに盗賊は、居ないだろう」

「じゃあ、取り敢えず近くの街に行きますか？」

「そうだな」

瑞希達は、そう話し皆に伝え、街を目指した。

街には、直ぐにつき瑞希達は、傭兵ギルドや街の警備兵などに伝え自分達の傭兵団の本拠へ帰っていった。

【イルラルカ王国】

瑞希達の本拠地は、街を少し外れたところに建っていた。

今日は、何の任務も入っておらず皆は、部屋でゴロゴロしたり、訓練したり、買い物行ったりと思いい思いの場所に向かって休息を楽しんでいる時、玄関の扉が開いた。

「すみませ〜ん」

女の人の入ってきた。入ってきた女の対応は、ホールにい居る団員が対応した。

少し話し込みそし、て瑞希が居る部屋まで案内してきた。

「ミズキさん、失礼します。面会したいと言う人が居るんですけど？」

「いい、連れてきて」

「はい、わかりました」

そう言い直ぐに部屋に入ってきた。最初に団員が入ってきて次に二人の女性が入ってきた。

「あ！」

「久しぶりです。」

入ってきた二人は、カリエとサラだった。

「今日は、お願いがあつて参りました」

カリエが瑞希に言った。

「何かの縁だし、俺に出来る範囲ならいいよ」

「ありがとうございます。実は、・・・私達、
クリムゾン に入
れて欲しいんです！」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

少し長い沈黙が続いた後、瑞希は、口を開いた。

「別にいいけど弱音を絶対はかない」

「大丈夫です。そのくらい乗り越えてみせます」

「私も頑張つてやります」

二人の言葉を聞いた瞬間、瑞希と団員の顔が黒い笑みに歪んだ。

「地獄（訓練）に二人ご案内〜」

そう言った瞬間、執務室に建物に居る団員全員が群がり二人を連れて行った。

その時二人は、困った顔で

「な、なに、地獄ってなに？」といい続けていた。

数分後イルラルカ郊外に二人の女性悲鳴が鳴り響いた。

【王執務室】

「陛下どうかしましたか？」

瑞希は、カリエの一言で現実に戻ってきた。

「いや、何でもない。速く会議に行くぞ」

瑞希は、そう言い王執務室を出て会議室に向かった。

「待たせたな」

瑞希は、そう言いながら会議室に入って行った。

「いやいや、そこまで待つてないですよ陛下」

イルラルカ西公爵が瑞希に言った。

「にしても大分、国王らしくなってきたね」

クラメス北公爵が瑞希に向かって言った。

「取り敢えず会議を始めよう」

そう言い会議が始まった。

会議の内容は、ガリアスと他国の状況、動向。経済等々の議題が会議された。

「近々、少し国から離れるから」

「「「え！」「」」

「それじゃあ」

瑞希が席を立とうとした瞬間、イルラルカ西公爵が瑞希の腕を掴んだ。

「いきなりどうした。何で国から離れるんだ」

「最近、探していた人が見つかったかも知れないんだ。この世界で一番大切に愛してる人が」

四人は、黙り込みそして

「よし、言ってこい。ここは、俺達が守ってやるから」

イルラルカ西公爵

「その人見つかったら私にも見せてね」

クラメス北公爵

「陛下が帰って来たら舞踏会だな」

ダイラス東公爵

「絶対見つけて帰ってこいよここは、お前の家なんだからな」

ラサハラス南公爵

それぞれ言葉を送り瑞希は、それを聞いて直ぐに部屋を出ていきカリエとサラに命令した。

「クリムゾン を召集しろ。これからカムイに行くぞ」

「はい！」

二人は、返事をし、急いで皆を集めカムイに向かった。

第四十一話：戦いの報

瑞希は、目を瞑りながらも今までの事を話した。

「まあ、だいたいこんな感じかな」

瑞希は、そう言い終わった。

「なあ、瑞希。今、かなり凄い話しが混じってなかったか？」

龍也は、瑞希に聞いた。

「何のこと？」

「お前が一国の王になるってこと！」

「ああ、それね。別にやることは、今まで クリムゾン でやってきた事とあまり変わらないし特に何ともないな」

「おいおい、大者発言かよ。瑞希、俺は、お前の頭が少しずれてい
ると思っただけだ。改めてお前は、ずれてるをとうりこして外れ
てる」

瑞希の発言に龍也は、呆れながらそう言った。

六人は、思い出話や今までの事などを話していた。

瑞希達が話していると、この部屋に向かって誰かが走って来る音が

した。足音に気づいた瑞希は、話を中断した。ちょうどその時足音は、部屋の前で止まった。足音の主は、幾分か息を整えそして部屋をノックした。

「ミズキ様、お伝えしたい事があります」

「わかった。入れ」

そう言われた者は、部屋に入り瑞希を探し見つけると瑞希の耳元で何かを囁いていた。話が終わり二人は、離れた。

「全員に戦闘準備、あと誰が情報を持ってきた」

「はい、影隊第五席アルス様です」

「わかった。アルスには、隣の部屋に来るように言っといてくれ」

「わかりました」

傭兵は、直ぐに出ていった。瑞希は、マチルダ、龍也、エリスの順に顔を見て口を開いた。

「今から俺は、やる事が有るから三人は、この部屋でゆっくりしてて」

瑞希は、そう言い部屋を出ていこうとしたらマチルダに止められた。

「何ですか？マチルダさん」

「何かオレ達にも手伝える事は、ないのか？」

マチルダが瑞希に聞いた。

「今は、無いから。取り敢えずこの部屋でゆっくりしていて」

「わかった」

瑞希は、マチルダの返事を聞いてから部屋を出ていった。

部屋を出た瑞希は、今は、隣の部屋で影隊の一人、アルスから報告を聞いていた。

「ミズキ様、グラコニアス帝王魔国は、極秘に兵をカムイ国国境砦カマライに進軍していた模様で一時間前程にカマライ砦が陥落しました。更にグラコニアス帝王魔国は、これを気に一気にカムイ国を侵略しようとしているとの事です」

瑞希は、渋い顔をして考えていた。今までの情報の中にグラコニアスが極秘に兵をカムイに進軍しているとの情報は、瑞希の耳に入っ
てこなかった。

影隊の失態では、ないと瑞希は、思った。何故なら影隊の情報収集能力は、大国の特殊情報収集部隊よりも高いと思っ
ているし自分が鍛えた部隊でもある。

「カムイとグラコニアスは、どんな対応をしている？」

「はい、カムイ国は、約一万五千程の兵力でカマライ砦から手前二百キロ程離れた場所に拠点を置く模様です。グラコニアス帝王魔国は、三万三千程の兵力でカムイに対してカマライ砦に一万程の兵を置き、残りをカマライ砦を中心に展開しています。」

「カムイとグラコニアスの総指揮官は、だれだ？」

「カムイ国は、国王直々に指揮をする模様です。グラコニアス帝王魔国のほうは、今だわかりません」

「わかった、下がっていい。それとアルス、そのまま情報収集に行け何かわかったら報告しに來い」

「はあっ、仰せのままに」

アルスは、瑞希に頭を下げて部屋を出ていった。瑞希は、アルスが出ていったあと直ぐに一階酒場に行った。

「お前等！準備が出来たか！？」

「何故なら影隊の情報収集能力は、大国の特殊情報収集部隊よりも高いと思っているし自分が鍛えた部隊でもある。」

「カムイとグラコニアスは、どんな対応をしている？」

「はい、カムイ国は、カマライ砦から手前二百キロ程離れた場所に拠点を置く模様です。グラコニアス帝王魔国は、カムイに対してカマライ砦を中心に展開すると思います」

「カムイとグラコニアスの総指揮官は、だれだ？」

「カムイ国は、国王直々に指揮をする模様です。グラコニアス帝王魔国のほうは、今だわかりません」

「わかった、下がっていい。それとアルス、そのまま情報収集に行
け何かわかったら報告しに來い」

「はあっ、仰せのままに」

アルスは、瑞希に頭を下げて部屋を出ていった。

瑞希は、アルスが出ていったあと直ぐに一階酒場に行った。

「お前等！準備が出来たか！？」

瑞希が声を張り上げた。

「いえ！まだです。後、少しで全て整います」

酒場にいる一人が瑞希に返した。

「わかった。何時でも行けるようにしとけよ」

瑞希は、そう言い二階に上がって行った。

二階には、クリムゾン に所属する幾つかある隊の隊長が何人か
居た。

瑞希達は、カマライ砦周辺の地図を出し作戦会議を始めた。

作戦は、特に決まらず取り敢えず戦場に行く事になった。

第四十二話：移動

カマライ砦周辺までの移動方法は、ドラゴンやワイバーンに籠をつけた竜籠と呼ばれるもので移動している。食糧などは、近くに居る別部隊が集め一足速く野営の準備をしている。

マチルダ、エリス、龍也の三人は、竜籠にのり、瑞希は、ユキに乗り先頭を進んでいた。

何度か村に降りて休憩し次の日の夜には、野営地に到着していた。

瑞希達 クリムゾン が野営している場所は、カマライ砦から五十キロ離れた崖の上だった。野営地に居る クリムゾン の数は、五百人を越えていたが更に倍近くがこの後、到着する予定だ。

瑞希は、第一に戦況確認をした。

戦況は、やはりグラコニアス帝王魔国がカムイ国を数で圧倒しジリジリと後退していつていた。

「このままいけばカムイが危ないな」

瑞希は、顎に手をつけながら呟いた。

「確かに、ミズキさんが言う通りですね」

瑞希と話していたのは、最初にこの野営地に着いて野営準備をした部隊 クリムゾン 魔弓兵隊だった。その隊長は、ハルキが勤めていた。

「まあ、今は、何を言ってもしょうがないな」

「そうですね」

「後、大ニユースだ」

「何ですか？大ニユースって」

「マチルダさんとエリス、龍也が見つかった。今は、取り敢えず俺のテントに居る」

「まじっすか！エリスお嬢様とマチルダさん、リュウヤが生きてたなんて！」

ハルキは、喜んでた。今まで生きていたという情報は、不確かで実際生きているなんてわからなかった。自分達が暮らして愛していた家族と仲間と暮らしていた国から終われているのだ実際生き残ったクラシバル公爵私兵達は、捕まり処刑されてった。

ハルキ達自身は、追っ手が来る前に国を出たから逃げたものの、やはり同僚が殺されるのは、耐え難かった。助けに行こうと思ったが今行っても自分達が死んで助けに行く意味がなくなる。そんな情けない自分達が、助ける力が無い自分に苛立った。

もうあの時の仲間は、クリムゾン に所属する自分達と数人しか確認出来なかった。

最初は、五十人近く居たが、今では、両手で数える位しか居ないことに絶望しエリス達が生きているなど思ってもいなかった。やはりあの襲撃の時に死んだと諦めていたが生きていたことが今、自分達を景気付ける感じがした。

「でも、今は、あまりゆっくり話して居られないですね」

「そうだな、取り敢えず今は、休め明日の昼ぐらいに全隊集まるだろっ」

瑞希とハルキは、そこで別れ自分達のテントに戻って行った。

【次の日】

予想よりも速く残りの部隊も着き今は、全部隊がグラコニアス帝王魔国とカムイ国の戦闘を観ていた。やはりグラコニアス帝王魔国が優勢に進めている。

押されているカムイ国は、上手く土地を利用してグラコニアス帝王魔国からの攻撃ゆ何とか防いでいた。

「行けー！カムイの兵士など蹴散らし殺し尽くせー！！」

グラコニアス帝王軍指揮官が今、カムイに向かう自軍の兵士に向かって大声で鼓舞しまくっていた。それを見付けた瑞希は、

「バリスタ用意」

と、言い傭兵の何人かがバリスタを準備した。

「用意できました」

「アニエス、真ん中で叫んでいるグラコニアス帝王兵の頭を撃ち抜けるか？」

瑞希は、アニエスにそう聞いた。

「余裕ですよ！お釣りがかえってくる位です！」

「よし、わかった。あのバカの頭を撃ち抜け」

「わかりました」

アニエスのバリスタチームは、矢をセットしアニエスが風速などを計り角度を調整し

「放て」

アニエスの短い言葉に従ってバリスタを撃ち放った。

矢は、指揮官の頭に吸い込まれる様に貫いた。

【バリスタ】

四人以上の人数で扱う超巨大なボウガン状の巨弓で鋼鉄で出来た矢を打ち出す兵器。攻城兵器としてよく使われる。

第四十三話：大戦

グラコニアス帝王魔国とカムイとの戦いは、時間がたつにつれてどんどん激しくなっていた。

「突っ込めー！敵は、もう崩れた！一気に畳み掛ける！」

グラコニアス帝王軍の一人将軍アスタロス・ラーラの右腕、カルササル・ハーバ将軍補佐は、アスタロス将軍の命で今は、前線指揮をしていた。

カルササル将軍補佐は、声を張り上げ味方の指揮を上げていた。カムイの前線は、後少いで崩壊しそうでこのままいけば確実に勝てると思ひ指揮上げを集中的にやった。

「後少いで我々の勝利だ！」

そう後少いで圧倒的大勝利のはずだった。

「行けえー！叩き『グシヤ』……………」

何かが盛大に潰れる音がカルササル将軍補佐から響いた。

近くに居た兵士は、全員カルササル将軍補佐を見た。そこに居たのは、胸から上半身無いカルササル将軍補佐だった。

兵士達は、何があったのかわからなかった。さっきまで自分達を指揮し指揮を上げる為に大声で叫んでいた。カルササル将軍補佐が死んでいるのだ。

その周辺だけ別世界の様に静まり返っていた。

「…………カ、カルササル様……………」

一人の兵士が声を出したとたん辺りが冷静に今の事態を理解した。周辺の兵士全員の手を横切ったのは、”誰かがカルササル將軍補佐を殺した”と、いうことだった。

「だ、誰がカルササル様を殺したああー！！！！」

兵士達は、怒り狂った。
だから探した殺した奴等を。

【クリムゾン 野营地】

瑞希は、当たった事を確認し指示を出した。

「マチルダさんとエリスは、魔術師隊と一緒に後方支援をしてください。龍也は、第一歩兵隊と一緒に行動。一番槍は、短足竜隊が空から強襲、第一歩兵隊は、短足竜騎兵隊突撃後、三つ班に別れて波状攻撃、魔術師隊は、短足騎兵竜隊と第一歩兵隊の後方支援。土竜騎兵隊は、カムイ国軍方面の地下から奇襲して押し返せ！第二歩兵隊は、土竜突撃後、カムイ国軍兵と連携取りながら確実に殲滅させる、魔弓兵隊は、左翼、右翼、中央の三つに別れて援護、飛竜騎兵隊は、ここに待機している！わかったか！」

「はっ！」

全員自分達の戦場に別れていった。

「ユキは、ここに残ってマチルダさんとエリスを守ってやってくれ」

「わかった」

ユキの返事を聞き、瑞希は、ヤミに乗り何処かへ行ってしまった。

カルササル將軍補佐が死んで興奮したグラコニアス兵は、短足竜の鳴き声でそちらを向いた。

「短足竜騎兵だ！」

グラコニアス兵は、慌てた。

短足竜は、飛竜で数体ならある程度の犠牲を出せば倒せるレベルだが、数が違った百体程の短足竜が空を飛んでこちらに向かっていた。

「槍を構えろ！」

冷静な兵士が叫んで槍を持っていた兵士は、短足竜に向かって槍を構えた。

短足竜騎兵の後方に控えている魔術師達が槍を構えている兵士に向かって魔術を使って排除をしていた。

短足竜騎兵は、魔術師隊の援護により何事もなく敵に突撃していった。それを確認した歩兵隊は、素早く三つに別れて波状攻撃をし魔術師達は、その援護をした。

【カムイ国最前線】

「くそー！このままじゃ押しきられる」

カムイ国軍は、確実に押され敗戦秒読みな位な不利だった。最初よりも半分以上の兵士が死んでいった。

「行けー！一気に畳み掛けるぞー！」

グラコニアス帝王軍兵の一人が叫び更に行き良いが増した。

「防げー！これ以上行かせるなっ！！我々の後ろには、力なき民が居るんだー！」

カムイ国軍兵も国民の為、家族の為に必死に防いだが防衛ラインが破られた。

「敵は、崩れた！皆殺しにしろ！」

グラコニアス帝王軍兵が雪崩れのように押し寄せようとした瞬間・・・

ドカアアアアン

轟音と共に地中から沢山の土竜が出てきた。両軍の兵士は、慌てふためいた。

地中から何故土竜が出てきたのか？わからなかった。だが土竜の上に人が乗っており更に掲げた旗を見てカムイ国軍兵達は、歓喜した。

「ク、クリムゾン だぁー！ クリムゾン が増援に来てくれたぞー！」

カムイ国軍兵の一人が叫び皆の目は、絶望から希望へと変化した。

「武器を取れー！ クリムゾン と共に敵を押し返すぞー！」

カムイ国軍兵達は、それを聞いた瞬間、皆、武器を持ち直した。

「カムイ国軍、左翼に回ってくれ！俺達は、右翼と中央を殺る！」

「わかった！」

カムイ国軍は、クリムゾン の声を聞き急いで左翼に回りセラコニアス帝王軍兵を押し返し始めた。

【カマライ砦】

前線から一人の兵士が馬に乗ってカマライ砦に戻ってきた。兵士は、前線から急いできたのか砦に着いた瞬間、馬から崩れ落ちた。

「おい！大丈夫か！？」

近くに居た兵士が倒れた兵士に駆け寄った。

倒れた兵士は、小さな声で必死に何かを伝えようとしている。駆け寄った兵士は、倒れた兵士の口元に耳を近づけ内容を聞いた。

聞いたとたん兵士は、驚愕な色に顔を染めて近くに居る仲間の兵士に倒れた兵士を頼み、急いで砦の中に入って行った。

砦の会議室には、今回のカムイ国攻略作戦の総指揮アスタロス・ラーラ将軍が戦況の報告を待っていた。

「將軍、至急報告をしたいと言つものが居ますがどうしますか？」

会議室の中に入ってきた一人の兵士が頭を下げながら言った。

「どんな内容だ」

「前線からの報告でかなり重要な事とだそうです」

「よし通せ」

アスタロス將軍は、直ぐにそう言い。それを聞いた兵士は、会議室を出て報告に来た兵士を呼んだ。

「で、どんな事があつた」

「はっ！先程前線から物見の兵士が戻つて参りまして着いた瞬間、倒れてしまい急いで報告を聞いたところ將軍補佐カルササル・ハバ様が敵軍傭兵団 クリムゾンのバリスタによる攻撃にて即死、前線も クリムゾンの短足竜騎兵、土竜騎兵等の強襲、奇襲により第一大隊が壊滅、第二大隊がかろうじて前線を保っていますけれども、時間の問題との事で至急援軍とのことです」

それを聞いた將軍は、いきなり机を叩いた。

部屋には、轟音が鳴り響き机は、ぺしゃんこになり唯の木屑に成り果てた。

「アスタロス將軍このまま指揮をしていたカルササルが居なくなり指揮系統が混乱しこのままでは、一気にこの砦まで押し戻される可能性があります」

「出陣」

アスタロス将軍の掛け声で砦に残る大隊以外の兵士達は、戦場に進軍し始めた。

【カムイ国、 クリムゾン 最前線】

前線は、押し返し今では、二つに別れていた クリムゾン の部隊も繋がった。

戦場の配置は、

左翼カムイ国軍、中央 クリムゾン 土竜騎兵隊、第二歩兵隊、魔弓兵隊、右翼 クリムゾン 短足竜騎兵隊、第一歩兵隊、魔術師隊に別れあと少しで前線に居るグラコニアス帝王軍兵は、居なくなるどころまで追い詰めた。

だが戦場は、そんなに甘くなかった。カマライ砦から残りの残存兵力の殆どが向かっているとの情報が入った。このままグラコニアス帝王軍に砦から援軍が来たらいくら飛竜騎兵が居ても数の暴力による攻撃で全滅してしまう。

急いで前線に居る敵兵士達を倒し迎え撃つ体制をとりたいが敵兵士は、完全に防御体制入り援軍が来るまでの時間稼ぎをし始めた。

「防げー！あと少しで援軍が来る！それまで何としてもここを保つんだー！」

グラコニアス帝王軍兵は、鬼気迫る勢いで攻めてくるカムイ国軍とクリムゾン の猛攻を防ぎとっしていた。その守りは、固く容易に攻め崩せず殲滅した頃には、援軍があと少しまで来ていた。

カムイ国軍と クリムゾン は、迎撃体勢が整えられない事を悟り。このまま戦うのでは、なく一度退いて直ぐに迎撃体勢を整える事に

敵が目の前まで攻めてきた。するとハルキが手を挙げ敵に向かって降り下ろした。その瞬間、一斉に魔弓がグラコニアス帝王軍に向かって放たれた。矢は、グラコニアス帝王軍に直撃したが進軍速度は、緩まず更にスピードを増したように見えた。

それを見た兵士達は、全員死ぬ覚悟を決め、刺し違えても敵軍を退けようと思った瞬間、空高くに爆発音が鳴り響いた。

その音は、音を通り越して軽い衝撃波が来るほどの威力だった。

その爆発音は、両軍の兵士達を啞然とさせたが一つだけ動いていた。そう傭兵団 クリムゾン だった。だが動きが変だった。

混乱に乗じて敵を討つのでは、無く。逃げ始めた。

「逃げろー！彼奴等が来るぞー！」

「ここに居たらとばっちりを喰らう！」

そう言い傭兵達は、カムイ国軍を無理矢理その場から退かせ、退かせている途中から我に戻ったグラコニアス帝王軍が追撃しようとしたが空から降ってきた複数の”者”に邪魔された。

そしてそれが地獄の戦争の始まりだった。

第四十四話：恐怖と絶望

グラコニアス帝王魔国軍兵士、カサルド・ガバレー二中隊長は、地獄を見ている様だった。

カムイ国みたいな弱小中国などに負ける筈がない、負ける要素がないと思っていた。だが現実には、違ったカムイ国が雇った クリムゾン と呼ばれる傭兵団のせいで思っていたよりも侵略が進まなかった。

敵の傭兵団は、情報戦をし、こちらの進軍を混乱させて来た。それに気づいた時には、情報戦に完全敗北していた。

その為、一部の五百人程度の精鋭でカムイ国の国境防衛の最重要、最大の拠点のカマライ砦を落としたのだ。

そして直ぐに近く別のところを進軍するふりをしていたアスタロス・ラーラ將軍の軍を砦に引き入れた。

それから、直ぐに本国から援軍が来ることになり、見事カマライ砦を落としたアスタロス將軍は、カムイ国進行作戦の総指揮官になった。

援軍が到着するのとはほぼ同時にカムイ国軍がカマライ砦を取り戻すために軍が集まってきた。だが敵の数は、一万五千ほど。こちらは、援軍合わせて三万三千、約二倍の以上の戦力差だった。

一日目は、にらみ合いで、目立った戦いは起きなかった。だが二日目は、激しい戦闘になった。敵は、三千程の連隊で攻めてきた。

最初の方は、やはり敵に地の利があり苦戦したが時間がたつにつれて押し返した。

三日目には、勝利していると思っただがイレギュラーが発生した。

クリムゾン が参戦してきたのだ。数は、千人近く이었다。だがたかが千人増えただけで戦局は、変わらない筈だった。

でも奴等は、違った。飛竜騎兵を数多く持ち大国と競り合うことができる程だった。

敵は、強襲と奇襲を上手く使い クリムゾン 前線をひっくり返した。

アスタロス将軍は、直ぐに敵を討つ必要があると思えば全軍を使い攻めた。敵もヤバいと思ったのか引いていき目の前で追い詰め
た時、数で押しきれると勝利だと思った瞬間、爆発音が鳴り響き、
それを啞然と見ていたら敵は、逃げ出した。それを追おうとした瞬間、
複数の”者”が降ってきたせいで勝利の二文字は、無くなった。

第四十五話：降ってきた者

空から降ってきた”者”は、静かに立ち上がった。そして直ぐに落ちてきた”者”の近くに”武器”^{もの}が同じ”者”数だけ落ちてきた。

土煙が舞い上がり視界が塞がれた。グラコニアス帝王軍兵は、直ぐに距離を取り様子見をしていた。

だがあまりにも沢山の土煙が舞い上がったせいで何をやっているかわからなかったが急に空気を切り裂く様な音が鳴った。

その音に少し遅れて土煙が霧散した。霧散したのと同時に近くに居たグラコニアス帝王軍兵が引き千切られる様に胴から上が中に舞った。

吹き飛んだ体は、地面に落ち死んだ兵士の顔は、何故死んだかわからないような顔をしていた。

「な、何が起きたんだ!？」

兵士達は、後退り仲間を切り捨てた者を見た。

「き、き、鬼人族」

兵士達は、その鬼人の姿に恐れをなして後ずさった。そして、短く長く感じる沈黙が辺りを支配した。

「う、うあああああ!」

この静かで重苦しい雰囲気をだす空間に我慢出来なかった一人の兵士が叫びながら鬼人に突っ込んで行った。だが鬼人は、兵士に向かって軽く大剣を振るった。

突っ込んできた兵士は、上半身を大剣の面で叩かれた。鬼人族が振るった大剣は、神速の域に達しており上半身がぐちゃぐちゃになり辺りに飛び散り辺りのグラコニアス帝王軍兵に降りかかり、下半身は、取り残され一拍置いて膝から崩れ落ちた。それを見た他の兵士達は、無意識のうちに二、三步後ずさった。

「何をやっている！そいつを倒さんか！！」

アスタロス將軍は、臆した兵士に激怒し、叫びまくったが空からの咆哮によって叫ぶのをやめた。

空には、二十騎以上の飛竜騎兵が舞っていた。

「くそーおお！全軍撤退ー」

アスタロス將軍は、飛竜騎兵を見た瞬間、直ぐに撤退命令を出した。グラコニアス帝王軍は、カマライ砦まで後退していった。

クリムゾンやカムイ国軍兵は、後退するグラコニアス帝王軍を攻めて来なかった。

グラコニアス帝王軍は、直ぐにカマライ砦近くまで来たが砦を見た瞬間、グラコニアス帝王軍兵は、絶望した。

出陣していった時は、まだ自軍の旗が立っていたが今、砦には、白と黒のドラゴンと剣が交わった旗　クリムゾンの旗が掲げられていた。砦の前には、クリムゾン　が待ち構えていた。

「う、嘘だ」

「そんな馬鹿なことがあるのか？」

誰かがそう呟いた。兵士達は、ほぼ戦意がなくなっていた。

アスタロス将軍は、それを見て何故、敵が追ってこなかったのか理解した。逃げるグラコニアス帝王軍を追えなかったのではなく追わなかったのだ。どちらにせよグラコニアス帝王軍は、退路が塞がれていたのだから。

「俺達は、負けたのか」

一人の兵士がそう言いながら武器を落とした。すると落とした者から連鎖的に兵士達が武器を落としていった。

アスタロス将軍は、それを見た瞬間、この戦に負けたことを理解し、白旗を上げた。

この瞬間、グラコニアス帝王魔国とカムイ国との最大の戦いが終わった瞬間である。

第四十六話：別動隊

時間を遡りカルササル・ハーバ將軍補佐を討ち取った後、瑞希は、各隊の隊長に指示を出して直ぐにヤミに乗ってある場所に向かった。その場所は、グラコニアス帝王魔国とカムイ国の国境の間にある森の中だった。

瑞希は、森の少し開けた場所に降り立った。

森の中には、沢山の クリムゾン 兵士が居た。

「ミズキ様」

蒼い鎧を着こんだ一人の兵士が瑞希に近寄ってきた。

「首尾は、どうなっている?」

「はい、蒼隊あおたい、紅隊あかたい、白黒隊びやくくろくたい、何時でも戦闘に入れます。後、影隊が戻ってきています」

「わかった。直ぐに各部隊長と副隊長、影隊を呼べ」

「はっ」

蒼い鎧を着た兵士は、去っていった。瑞希は、唯一建てられているテントの中に入っていった。

【三分後】

直ぐに各部隊の隊長、副隊長は、集まった。

「では、報告を頼む」

瑞希が影隊の兵士にそう言った。

「報告します。グラコニアス帝王軍の総指揮は、豪腕滅鬼、アスタロス・ラーラ將軍と判明しました」

それを聞いた各面々は、渋い顔をした。そんな中紅い鎧を着た軽薄そうな男が口を開いた。

「おいおい、マジかよ。豪腕滅鬼って言ったら一人で特Aクラスのモンスターを倒したグラコニアスの猛将じゃあないすつか！」

そう言った瞬間、隣の同じく紅い鎧を着た女性が拳をかたく握りそのまま軽薄そうな男の頭に落とした。

ゴッソ

「ツツ!!」

鈍い音がテントに鳴り響きそれと同時に殴られた軽薄そうな男は、頭をおさえ声にならない悲鳴をあげていた。

「アルサ・ラーク副隊長！ミズキ様の前でそんな口を聞くんじゃない！」

紅い鎧を着た女性は、叫びながら軽薄そうな男、アルサ・ラークを怒鳴り付け、アルサは、目尻に涙を為ながら紅い鎧を着た女性に抗

議の声をあげた。

「アリサ隊長強く殴り過ぎです。頭が陥没するかと思いましたよ」

「うるさい！」

アリサは、一言でアリサを黙らせた。すると瑞希が口を開いた。

「アリサそんなイラつくな、今は、敵を倒すことだけを考える」

瑞希にそう言われたアリサは、直ぐに瑞希に向き返事をした。

「まず作戦を説明する。まず今、戦場で戦っている部隊が敵を引き付けている。今は、優勢だが援軍が来たら確実におされ始める。そのため、一度カムイの本陣皆まで下がり敵の大半を引き付けてもらうその間に蒼隊、紅隊、白黒隊でカマライ砦を攻めいるが白黒隊を一部カムイ本陣に向かわせ敵をカマライ砦まで下からせる。その間にカマライ砦を攻め落とし敵を迎え討つが数が足りないからゴーレムで数を誤魔化し敵の戦意を無くす。たぶん敵は、敗けを悟り降伏してくる。だが、もし敵が攻めてきたらゴーレムを前面に置いて時間を稼ぎ後ろから殲滅魔術を使う。以上だ」

瑞希の作戦内容が説明され皆、頷いた。

「後は、戦場の状況がうまく此方に傾くのを待つだけですな」

蒼い鎧を着た青年は、そう言いテントに居る全員は、静かに待った。

「そりゃあ、そうだったってカムイと俺達とは、兵の質も量も違うからな」

「あんな雑魚居ても居なくてもかわんね。カムイの兵なんて俺らの軍じゃあ生きた盾だな」

「あはははは、そうだ、そうだ唯の盾だなあいつらは」

四人は、カムイの兵士をバカにした話で盛り上がっていた。

「そういや、厄介な奴等がカムイに雇われていたな」

四人の中の一人がそう言った。

「ああ、俺も聞いたことある。ここ、二、三年東から急に成長してきた傭兵だろ」

「ああ、確か名前は、・・・クリムゾン」

「そうそう、最近話題の傭兵団。でも余りいい感じがしないんだよな」

「何でだだって、あいつら東の方から来たんだぜ。今、東は、変な動きをみせているからさ」

「そうだな、ここ最近の東の国は、変だな。いきなり国交を制限し出したり。入国禁止にしたりと変だがそこまで思い悩むことでは、無いと思うぞ」

「そうかな？そうだよな、あんま気にしないほうがいいよな」

そう言い四人は、 クリムゾン の話を止め別の話をし始めた。会話は、盛り上がり自分達の監視の任務を忘れて話していたため、近づいてくる自分達の敵に気づかなかつた。そしていきなり何か羽ばたく音が聞こえたと思い四人がその方を見た瞬間、黒いドラゴンから漆黒の黒炎を見て声をあげること無く灰になって死んだ。

【カマライ砦近くの上空】

瑞希率いる総勢四百人の クリムゾン の竜騎兵や飛竜騎兵は、低いところにある雲の中を飛んでいた。

(もう直ぐカマライ砦に着くな)

瑞希は、目を凝らしハンドサインで近くに居る仲間以降下と伝え雲の下に出た。

丁度カマライ砦上空で瑞希は、ヤミに監視塔に向かってブレスを吐くように指示をだした。ヤミがだした漆黒の黒炎は、監視塔の岩を溶かし敵の兵士を灰にした。

【カマライ砦、会議室】

爆音が砦中に鳴り響いた。その音に砦のグラコニアス帝王軍兵士は、驚き。この砦を任された大隊長は、直ぐに敵が来たと理解した。

「クソ！！敵襲だ！監視の兵は、何をやっていたんだ！全軍通達、

急いで迎撃準備だ！」

大隊長は、直ぐ伝達兵に指示を出し、自分は、武器を取り部屋の外に行った。

こうしてカマライ砦の戦いが始まった。

第四十七話：カマライ砦

カマライ砦は、大騒ぎになっていた。クリムゾンによる奇襲で二十分程で半数近くのグラコニアス帝王軍兵士が死んでいった。

グラコニアス帝王軍は、信じられない顔をして戦っていた。どうしても信じられないのだ。自分達が属する国は、この大陸、アビアル第三大陸の二百七十三ヶ国の頂点に位置する五大国の一つだ。それに自分達を率いているのは、実力主義で有名な豪腕滅鬼の二つ名を持つアスタロス・ラーラ將軍で自国では、精鋭として知られている自分達が、たった数百人の敵兵に二千人以上居るカマライ砦がおとされそうになっているからだ。

アスタロス將軍にカマライ砦を任せられた大隊長は、唯立ち尽くしこの一方的な、戦いと言う名の殺戮の光景を眺めながら狂った様に笑い続けていた。

【カマライ砦上空】

瑞希は、最初に先制攻撃した後、カマライ砦の上空に上り唯、眺めていた。

瑞希が攻撃した後は、直ぐに蒼隊、紅隊、白黒隊の降下兵が降り砦の中のグラコニアス帝王軍兵を殺しに行き、空に残った竜騎兵、飛竜騎兵は、城壁の上に居る弓兵を相手にしていた。

カマライ砦は、唯、グラコニアス帝王軍兵の断末魔が響き渡っていた。

瑞希は、もう十分程でカマライ砦がおちると判断した。

瑞希の目は、鋭く冷えきつており雰囲気は、エリス達話していた時と違い近寄りがたい雰囲気を漂わせていた。このギャプの激しさに初めてこの二つの顔を見た人は、殆どが別人に見える程だった。戦いの時の瑞希は、唯、冷徹でいた。すると一騎の飛竜騎兵が瑞希に近付いてきた。

「ミズキ様、カマライ砦城壁に居た弓兵の掃討が終わりました。まもなくカマライ砦内も制圧し終わるとのことです」

「わかった。竜騎兵、飛竜騎兵は、作戦通り配置に着け、降下兵は、制圧完了しだい作戦通りに配置に着くようにしろ」

「はっ」

飛竜騎兵は、直ぐに瑞希から離れ作戦の第二段階に以降することを各兵に伝えに行った。

クリムゾンの兵は、直ぐに動き陣形を作り、遅れて砦内に居た降下兵が配置に着いた。

瑞希は、上空から強化魔術を使い目を強化し森向こうのカムイ本隊とグラコニアス帝王軍本隊の戦鬪を観ていた。今現在、両軍は、拮抗しているが時間がたつにつれ数で勝るグラコニアス帝王軍が押し始めていた。

旗色悪くなり始めたカムイ国軍は、士気が下がり逃げ腰になっている。それをなんとか繋ぎ止めているのは、クリムゾンの傭兵が必死にグラコニアス帝王軍を食い止めているからだ。だが、それも長続きは、しなくついに押され始めた。

その時上空から落とされる鬼隊を確認した。鬼隊が投下されて上空に二十騎以上居る飛竜騎兵が空を旋回すると直ぐにグラコニアス帝王軍は、後退し始めた。

瑞希は、後退を確認した後、直ぐに降り作戦を開始伝えた。

そして直ぐにゴーレムを作ったその数三万近く作ったのだが数重視のため、余り性能が良くなく盾にしかならない物だが焦っているグラコニアス帝王軍には、有効と瑞希は、考えた。

案の定敵は、砦を落とされたのと数の多さに絶望し武器を捨て降伏した。

第四十八話：カムイ戦後

アスタロス・ラーラ將軍率いる総勢三万三千以上居たカムイ進行軍兵士は、一万七千まで落ち、重傷者を除くと一万千人程で死者だけで半分近くを失って事実上壊滅まで追いやられた大惨敗だった。

だが一方、勝ったカムイ国側も被害は、甚大だった。兵の生き残りは、五千程と少なく一万人近くの兵士が死に、他にも前線に出ていた五人の將軍が三人戦死したなど無視できない程の被害があった。カムイ国は、降参したグラコニアス帝王軍將軍アスタロス・ラーラ將軍を捕虜とし、残りを武器、防具などを奪いカムイから追い出した。

敵は、グラコニアス帝王魔国の国境砦に着くまで山がありその中を撤退して行った。指揮は、將軍補佐官の二人の内生き残った者が撤退指揮した。山の中、武器、防具更に食料、医療費など何一つ持たない軍は、餓死者、怪我などする兵士が大量に出た。

そして怪我人や着いてこれない者を置いて行くしかならなかった。下手に怪我人などに運んで時間がかかると更に餓死者を出す確率が上がるためだった。

結果から言うと最終的に国境砦に着いたのは、三千人程しか居なかった。

国境砦は、直ぐにこのことを報告するため緊急の早馬を出した。

早馬は、三日程でグラコニアス帝王魔国首都ビノテンに到着、直ぐに城に報告された。グラコニアス帝王魔国上層部は、この被害の甚大さや、アスタロス・ラーラ將軍が捕虜になったことや、更にこの戦いの最も重要なのは、傭兵団 クリムゾンの兵力だった。たかが傭兵の癖に竜騎兵、飛竜騎兵など五大国までは、いかにが大国の近衛隊程の戦力があるなどのあり得ない情報が入って来て混乱し至急 クリムゾンの情報偵察、事実確認などの偵察兵を出した。

【戦場後】

この戦いで クリムゾン も二十三人の死者を出した。直ぐに生き残った クリムゾン 全員で死者への手向けをし死体は、直ぐに東に送られ埋葬された。

【その後】

大きい戦いは、これ以降無く小さな小競り合いを何度かしたあと、大量の戦死者を出したグラコニアス帝王魔国は、これ以上戦って勝つても戦後処理や何だのかんだので割りに合わないということで停戦条約の申し出がされた。

カムイ国は、これを受理した。カムイ国も被害が甚大でこれ以上の大きな戦いは、資金的、戦力的に不可能な状態だった。

停戦条約は、中立国のバハナ国内で結ばれることになった。

アスタロス将軍は、賠償金をカムイに払うことでグラコニアス帝王魔国に送還されることになった。

後にカムイ国や周辺諸国からは、カムイの奇跡 と呼ばれ、グラコニアス帝王魔国では、帝王魔国始まって以来の大敗と呼ばれた。

第四十九話：帰途

グラコニアス帝王魔国とカムイ国の戦争終結後、この戦争終結に繋がった戦いの一番功労者、傭兵団 クリムゾン は、カムイ国から多額の報酬を貰った後、直ぐに東に向かって今は、傭兵を連れて地上をゆっくり帰路についていた。

「なあ、瑞希。行きは、竜籠つてので来たのに帰りは、何で竜籠を使わないんだ？」

瑞希と一緒に馬車に乗っている龍也が聞いてきた。

「ああ、それには、ちゃんとした理由がある。まず一つに竜籠の特性がある。竜籠は、四角い箱の両端をドラゴンやワイバーンに吊るすタイプと四つ端を吊るすタイプの二つがある。この二つの利点は、多くの兵士を速く戦場に運んだり、出来るが大きな欠点がある。それは、運んでいる最中に攻撃されたらなす術が無いんだ」

「どうしてさ、ドラゴンやワイバーンってのは、かなりの戦力じゃないか？」

疑問に思った龍也は、聞いてきた。

「確かに、ドラゴンやワイバーンを乗りこなし操ることが出来る兵士を竜騎兵、飛竜騎兵と呼んで大戦力としている。竜騎兵や飛竜騎兵を何れだけ保有しているだけでその国の規模や戦力がわかるとまで言われる程だがそれは、兵が一人乗って竜籠を運んでいないときだけだ。竜騎兵や飛竜騎兵のドラゴンやワイバーンには、剣や矢を通さない硬い鱗に守れ、大量の魔力を保有しているが最大の武器は、

スピードや小回りのきくところだ。どんなに硬い鱗覆われ、大量の魔力を持っていようかのろまだったら直ぐに討ち取れるが更にスピードや小回りがきいたら攻撃が当たらなくなかなか倒せない。そんなスピードや小回りの最大の武器が竜籠を付けることにより阻害されなす術も無く殺られるからだ」

「へえ、そうなんだ」

龍也は、瑞希の説明を聞いて何となくだが理解した。

「まあ、他にもあるだがな」

瑞希は、そう言いながら馬車の外を指差した。

その先には、カムイ国とグラコニアス帝王魔国との戦いで最前線で何時も戦っていた短足竜が馬車の後について進んでいた。

「あの確か短足竜だっけ、あれが何なんだ？」

龍也は、頭に？を浮かべている。

「短足竜は、なあ。長距離を飛ぶのが苦手なんだ。基本は、地上を歩き回るタイプのワイバーンなんだ。だから空を飛んでの長距離移動は、できないんだ。それに大量の食糧がいるんだ。運ぶにしても移動にしても空より地上を進んだ方が安全やその他もろもろ含んでも効率的なんだ」

「へえ」

それから、軽く話ながら気楽に過ごした。

【十日後】

朝霧がまだ漂い視界をふさぐ時間、瑞希達は、進んでいた。この十日間野宿したりしながら東に向かって進み続けた。

「棟梁、もうすぐ着きます」

馬に乗った人が馬車の中にいる。瑞希に報告しにきた。

「わかった」

瑞希は、短くそう応えた。

するとエリスや龍也、マルチダが起き出した。

エリスは、目を擦りながら眠そうに口を開いた。

「ミズキ、もう直ぐ着くの？」

「ああ、もう直ぐ着く。まあ着くって言っても入り口に着いただけで王都に着くのは、まだまだ先なんだがな」

瑞希は、そう言い朝霧が漂う外を眺めた。

数分すると空高く聳^{そび}え立つ真っ白な壁があった。

「うわあゝあ、何だあれ」

「こんなのを一、二年で建てたのか」

「……………」

龍也、マルチダ、エリスの順に言った。
壁には、途中突き出た場所があった。

「よしよし我らの国へ」

第五十話：白壁

瑞希達は、巨大な壁の中にある街に来ていた。

「凄かったな！あの白い壁！」

龍也は、あの白い壁を見てからずっとはしゃいでいた。

「確かに、あれは、凄かったな。おい、ミズキあの壁は、何処まで続いているんだ？」

マルチダが瑞希に軽く聞きたかったことを聞いた。

「詳しい長さは、測って無いけどこの国の国境から一繋ぎになって続いているかな」

それを聞いた三人は、啞然とした。普通敵の進行から守るための城壁は、街を囲む位の規模なはずなのに、今、目の前に聳え立つ壁は、その常識を逸脱している。

「今、見えてる壁の後ろにもう二つ壁があるから。」

三人は、空いた口が塞がらないほど驚いた今、見えている壁の後ろにはほぼ同規模の壁が二つもあると聞いたからだ。

啞然している三人と瑞希の他の人の声が聞こえてきた。

「この壁は、私達の国を守る盾ですから、これを造るのにかなりの人や金をかけましたし、それに・・・空高く聳え立つこの壁は、今やこの国の象徴と誇りの一つですから」

そう言いながら薄鎧を身に纏った男が馬車に入ってきた。

「ねえ、ミズキこの人誰？」

エリスは、入って来た男に指を指しながら瑞希に聞いた。

「ああ、そいつは、カリエ・サールって俺の副官兼秘書」

瑞希は、そう言い。カリエは、軽くお辞儀をしながら自己紹介を始めた。

「初めまして先ほど陛下から紹介がありました。カリエ・サールです。以後、お見知りおきを」

「いえいえ、此方こそよろしくお願ひします。私の名前は、エリス・クラシバルです」

「龍也・日下部っんだ。よろしくな」

「マルチダ・ファーウェンよろしく」

順々に名前を言っていた。

「はい、皆様よろしくお願ひします。」

カリエは、お辞儀したまま応えた。

「それよりカリエ何しにきた？」

「リベロ白壁門都市につきました」

「わかった、直ぐに向かうと言っておけ」

「はっ！」

カリエは、直ぐに馬車から降りていった。

「まあ、そういうことだから三人は、馬車の中で待って」

瑞希もエリス達にそう言くと馬車から降りていった。

第五十一話：リペロ

この国には、国境にそって三本の白い壁が聳え立っている。この壁は、国民達に白壁はくへきと呼ばれ今や国の誇りと言われるまでに美しく頑丈なかべだった。

その白壁には、八つの門とその門を中心に八つの白壁門都市がある。白壁門都市は、壁の内側と外側と別れていて内側にある都市を内都、外側にある都市を外都と呼んだ。外都は、その門を守る守備兵とその家族、外から来る商人が居る。内都は、国内から来る商人や城壁の上や中から門を守る守備兵とその家族が暮らしている。

何故、内側と外側に別れているのは、理由が二つある。

先ず一つ、防衛のためである。白壁門都市は、名の通り大きな門、大門が有るがこの門は、余り使われていない。基本、都市内に居る国民は、大門より小さい門を使い内と外と出入りしている。大門は、大部隊が出撃したりするときにはしか使われない。

もう一つは、今、この国の状態である。

魔族と人族は、二つに別れて争いあっている。時に例外的な人間が魔族と共に生きていたがそれは、ごく少数の人間だけで時にどちらにも受け入れられない人間もいた。だがこの国は、魔族と人族が手を取り合い助け合って生きていこうとしていた。

それを気に入らない国が複数出てきても少なくは、ないのだ。代表的な国は、五大国の一国、ガリアス国が人族撲滅派でありこの事がガリアス国の耳に入ったら全軍出して来たら大変であるため情報を漏らさないように徹底している。

そのため国の中に入るのも通行書、通行手形が必要であり大門をあける程の部隊や軍隊は、総指揮官が持っている通行書と開門書があって初めて大門が開き、部隊や軍隊が通れるのである。

【リベロ第四白壁門都市内】

瑞希は、馬車を降りてから直ぐにリベロ第四白壁門都市交通・大門管理所に向かっていた。

武装した部隊や軍隊は、大門を開けてもらって通ることになっている。

そのため通行書と開門書の二つを持って管理所に申請し通るためであった。

瑞希達は、管理所の受付にきていた。

「はい、通行許可書と開門許可書をお見せください」

瑞希は、懐から通行書と開門書の二枚を取りだしカウンターにいる管理官に渡した。

「はい、この二枚ですね。本物確認のため少々お待ちください」

「わかりました」

瑞希は、承諾し管理所内にある椅子に座った。

少しすると瑞希の隣に男が座った。男は、顔の半分を眼帯で隠れており、表情は、うまくわかりそうになかった。服装は、そこら辺にいる守備兵の格好だった。

そして管理所待合室にある新聞を広げ周りの人に悟られないように小さい声で瑞希に話しかけた。

「報告がございませ、陛下。」

「ガリアスについての報告は？」

瑞希も小さい声で応えた。

「はい、ガリアスは、ただいま当初の予定通りアメリカ、ラファニアとの臨戦体制で両軍ともに平原の両側に展開しておりこのままいくと陛下の思惑通り進む確率が高いと思われます。ですが少し気になることが」

「何だ？詳しく話せ」

「サナリナからの間諜の数が増えています」

「何時からだ？」

「一月前から急激に増えました。それに伴いグラコニアス、ガリアス他、数国が少しずつですが間諜の数が増えています。今のところ白壁のことなど知られておりませんが時間の問題かと」

「感ずかれたか。……今までとおおり他国からの間諜からこの国の存在を知られない用頑張ってくれ、それと間諜を数人捕まえ情報聞き出せどんなことをしてもだ。わかったな」

「この命は、陛下のために、この命、必ずしや成功させてごらんにみせます。影隊隊長の名に賭けて」

そう言い眼帯の男は、席を立ち、去っていった。

男が去った後、直ぐに受付の者に開門許可と通行許可がおりた。

第五十二話：白壁内

瑞希が馬車から降りていってから数分、馬車の中は、静まり返っていた。

話題が見つからないのだ。

エリスは、つまらなくて寂しく感じた。せつかく三年ぶりに会えたと思ったのに瑞希は、余り喋れなくて、そして気づいたら遠く感じる位の存在になって置いて置かれていかれている感じがして妙に虚しく感じていた。

そんなふうにエリスが考えている馬車に誰が入ってきた。

「あつ！カリエさん。どうかしたんですか？」

「いえ、少し国内に入るのに時間がかかるので少し皆様とお話をしたいと思ひまして」

カリエがそう言うと龍也が直ぐに反応した。

「じゃあこの壁や国のこと教えてくれよ」

「目の前にある壁は、白壁と呼ばれていて高さは、約五十メートル程あります。白壁には、八つの門とそれを取り囲み守るようにある八ある白壁門都市と呼ばれる都市があります。白壁は、国境にそって築かれているため八つの白壁門都市だけでは、敵が白壁を破壊して進軍してきた時に対処できません。そのため一定の間隔で監視塔があり、敵をいち速く見付けれるようになっています。この白壁は、他国から攻められた時の第一防衛線になります。そのためできるだけ他国に攻められても大丈夫なように高さが五十メートル程の壁を三枚造ったのです」

カリエは、一旦話すのを止めて一息ついた。

「はあ、話を聞いて更に凄いなこんな高い壁は、今まで見たことがない」

マルチダは、声を出して言った。

「それは、そうです。今も昔もこの白壁より高い城壁などは、無いはずですから」

「……………」

マルチダは、啞然としていた。今、目の前に聳え立つ白い壁は、この大陸の歴史上最高峰の高さと言われたのだ。

「白壁意外ことは？」

エリスがカリエに聞いた。

「では、この国の都市や町のことを話しましょうか。この国には、沢山の都市がありますがその中でも一際規模が大きいのは、五つあります。その都市を五都と呼んでいます。その五都の中でも一番大きいのは、この国の中心の位置にある王都グランコクマです。またの名を龍王都とも呼ばれドラゴンやワイバーンが数多くいます。次にジルギス・ダイラス公爵が統べる 東領の港を中心に船を使った貿易と水軍の指揮系統の中心になるように作った軍都ラグナル。カルメ・イスラルカ公爵が統べる 西領にある四本のいりくんだ大河の中にある小島を繋げて作った水都ミラミス。ブブ・ド・ラサハラス公爵が統べる南領は、広大な平原の中心に六本の高い塔とそれを

繋げる六角形、段々式の五重の城壁に護られる壁都ガンダロス。カリーヌ・ラ・クラメス公爵が統べる北領にある山脈郡の一つ山の天辺に作った空都クラン。と王都を中心に四つの大都市があります。この四つの都市は、有事の際王都を守る盾になるよう軍事的にも充実しています。大まかに説明しますとこんな感じですよ」

「へへ、凄いな山の上の都市か。一度見てみたいな」

マルチダが呟いた。

「なあ、王都のこともっと教えてくれよ」

龍也が言った。

「それは、着いてからのお楽しみだ。龍也」

瑞希がそう言いながら馬車の中に入った。

「そんなこと言わずに教えてくれよみぎずきちゃん」

龍也がくねくねしながら瑞希にお願いしてきた。

「うう、あ、気持ちわる吐きそう」

「瑞希ひどい」

.....
.....
.....

「ふ、あははははは」

瑞希と龍也の二人は、いきなり笑いだした。

「こんなやり取りやるのは、久しぶりだな瑞希！」

「ああ、そつだな龍也」

二人は、楽しそうで懐かしそうな顔をして話していた。マルチダは、そんな楽しそうに話す二人を見て笑いエリスは、龍也を羨ましそうに見ているとカリエが小声で話してきた。

「エリス様は、陛下のことが好きなんですわね」

「／／／なっ！えっ！あ、その、あの！／／／」

カリエの話聞いた瞬間エリスは、顔を林檎のように真っ赤にし慌てふためいた。そして三人に顔が見られたくないのかエリスは、もじもじしながらうつむいた。そんなエリスを見たカリエは、静かに語りだした。

「本当は、カムイとグラコニアスとの戦争に介入するつもりは、無かったんですけど、急に陛下は、カムイ側に着いて戦争に介入すると言ったんです。私には、陛下の本心をわかることができませんが、何か大事なことがあったのだと私は、思います」

カリエは、そう言い終わると瑞希に一礼してから馬車を降りていった。

エリスは、それを聞いた瞬間心が暖かくなった。

三人は、相変わらずふざけて笑い合い楽しそうにしていた。エリスは、そんな光景を眺め、三人の奏でる笑い声に耳を傾け静かに聴いていた。

一頻り笑いあつた後、瑞希が口を開いた。

「門の開門許可がおりたから一時間程したら王都に向かつて出発だから。俺は、部下を指揮しなからエリス達は、馬車の中で待つて」

瑞希は、エリス達三人にそう言いました。また馬車の外に行つた。

【一時間後】

馬車が動き始めた。馬車は、この列の真ん中で護られるように進んで行く。

リベロは、大門が開くとのことだからかなりの数の野次馬がいた。そして歓声が聴こえてきた。

「おおー、カリエ様ー！」

「グラコニアスを手玉にとつたて凄いで！クリムゾン」

「ハルキ様ー此方を向いてー！」

エリス達も瑞希が乗り込んだ龍籠に乗った。
全員が乗った後、王都に向かって飛んで行った。

第五十三話：王都グランコクマ

リベロから龍籠に乗って約三日間かけて王都に向かった。途中何度か街に降りたが特に問題は、無く快適な空の旅ができた。

「皆、もう直ぐ王都に着くから降りる準備をしよう」と

瑞希は、三人に言った。

「わかったわ」

それをかいしたのは、エリスだった。

【二時間後】

瑞希達が乗った龍籠は、王都グランコクマ上空を飛んでいた。グランコクマの空には、沢山の龍籠を取り付けたドラゴンやワイバーンが飛び交っておりエリス達が思っていたより壮大な風景だった。ドラゴンやワイバーンは、瑞希達が乗っている龍籠を見ると上空で止まったり飛ぶ道をあけたりしていた。それを窓から見ていたエリスは、それを疑問に思い瑞希にきいた。

「ねえ、何で他の龍籠は、私達が乗っている龍籠を避けていくの？」

「ああ、それはね。今、俺達が乗ってる龍籠は、王宮直属の龍籠だね。重要人物や緊急時などあるから避けるように法律で決まってるんだよ」

「へえ」

エリスは、そう瑞希が言うと感じた声を出しながら窓の外を眺めていた。

瑞希は、それを見た後、席を立つて言った。

「俺は、今から着替えてくるから」

「わかったわ」

エリスは、瑞希の方を向いて微笑んだ。瑞希も微笑みかいた龍籠の中にある別の部屋に入っていた。

瑞希達が乗った龍籠は、王城オーファンに着いた。

龍籠は、オーファンにある龍籠専用の発着所に降りた。発着所は、広くとられており発着所の隅には、使われていない龍籠と竜舎があり何時でも直ぐに龍籠が飛び立てることができるようになっていた。瑞希達の龍籠は、ゆっくりと地に着いた。

着くと直ぐに発着所に居る兵士がドラゴンやワイバーンから龍籠を吊るす金具を外した後、瑞希達が乗っている龍籠の扉を開けた。

「お降りください」

兵士は、短く言った。

それを聞いたエリス達は、龍籠から降りた。

エリスは、周りを見渡した。周りには、エリス達と同じ様に兵士達が龍籠から降りてきていた。

降りた兵士達は、エリス達が降りた龍籠の前に整列し、更に城から出て来た兵士もそれに加わっていた。
エリス達は、龍籠の近くに並ばされ、カリエは、龍籠の扉の横に立っていた。

「全員！構え！」

カリエが大きな声でそう叫んだ。すると、並んでいた兵士全員が統率された動きで腰から剣を抜き自分達の前に剣を構えた。エリスと龍也は、その迫力に圧されたただ眺めていた。マチルダは、平然としていたが内心その統率された動きに冷や汗を流していた。
カリエは、それを少し眺めた後、龍籠の扉に手をかけゆっくり開けた。

扉が完全に開くと中から白と黒を基準にした法衣を身に纏い頭に黒い被り物をし顔は、薄い布があり隠れており臙おぼろけ気に見える程度だった。

その人は、ゆっくり龍籠から降り数歩前に出て整列している兵士を眺めた。

エリス達は、その者が出て来た瞬間、膝をつきそうになったが何とかその衝動を抑えたがその者が数秒間兵士達を眺めている間、数時間そうして居るような錯覚に陥った。法衣を身に纏っている者のプレッシャーが尋常では、なかったからだ。

満足したのかその者は、眺めるのを止め声を出した。

「皆、迎えご苦労である」

その声は、大きく無いがここに居る全員の耳に届くような声だった。それを聞いたカリエは、更に叫んだ。

「全員！左右に開け！」

兵士達は、剣を構えたまま真ん中を基準に左右に開き道の方を向いた。

「剣を掲げ！」

更にそう叫ぶと整列した兵士達は、空に剣を掲げた。その掲げられた剣の道を法衣を着た者は、歩いていきカリエは、一步後ろについて歩いていた。

エリス達も少し待ったら直ぐに兵士に案内されながら道を通っていた。

エリス達は、客間に案内された。

「あの法衣着てた人凄かったね」

エリスが客間にある椅子にかけながら言った。

「ああ、そうだな。何かこうズシーてくるような。俺、想わず膝つきそうになっただぜ」

「うん、私も。膝つきそうになった。ああ、言うのを無言の圧力って言うんだよね」

エリスが言い籠也がそれに頷いていた。

マチルダは、窓の近くにある椅子に腰をかけ外を眺めている。

「あっ！」

エリスが声を出した

「どうしたんだエリス？」

龍也がエリスの声に気づき聞いた。

「そう言えばミズキって何処行つたの？」

「確かに、何処行つたんだろうな。俺達と一緒に降りなかったもんな」

「降りてなかった。お城に着く前に着替えてくるって言ってたけどミズキらしい人は、出てこなかったしな何処行つたんだろ？」

二人が頭を抱えて悩んでいると

「ミズキならさっき会つただろ」

「「え！」」

二人が驚いた顔をしていた。

「何処で会いましたか！？マチルダさん」

エリスが驚きながらもマチルダにきいてきた。

「何処で会つたって、今お前等二人が話していたいただろうが」

「え、え！嘘！」

「マジで」

エリスが驚愕した顔になり龍也は、信じられないと顔に書いてあった。

「はあ、ミズキが話していただろうが一つの国の王になったってマチルダがため息しながら言った。

「確かに言うてだけど私達と話していた時と雰囲気全然違う」

「それは、違うに決まっているだろう。ミズキは、今この国、見た感じ五大国に匹敵する程の国の舵取りを任されているんだ国のトップとしての威厳や尊重、力を示さなきゃならないんだ。この人なら自分達の命を預けていいと思わせないと新興国なんて中から内部分裂して崩壊しちゃうからなオレ達と話してい時みたいな雰囲気だといけないんだ」

マチルダは、呆れながらエリスと龍也に説明した。

二人は、それを聞いて納得したが何と無く寂しく感じた。ほんの三年前までは、館に居た皆と身分も関係なくただ楽しく過ごしていたが今の瑞希は、五大国に匹敵する程もしかしたらそれ以上の大国の長になったのだ今までみたいないな気楽な関係では、いられない。それほどまで今の瑞希との身分の差は、大きかった。

龍也は、親友として、

エリスは、愛する大切な人として、

これからは、話すことも会うこともできなくなるのでは、無いかと思うとエリス目から涙が出て来た。

そんなエリスを見て龍也は、何か声をかけようと思ったが上手く慰めれる言葉がなかった。どの言葉をかけても安っぽく聞こえると思いきり黙ってただくエリスを見ているだけだった。

マチルダは、そんなエリスを全く見ずにただ窓の外を眺めていた。

するといきなり客間の扉が開いた。入ってきたの先程の服装の瑞希だった。

「やあ、待った？ 思いの外色々あつて皆のところに来るのが遅れちゃったって・・・あれ？ 何でエリスが泣いてるんだ？」

瑞希が頭に疑問符を浮かべながら聞いた。

「あのね、ヒグツ、ミズキが偉い人になって私と話ができなくなると思うとこ、ヒグツ、悲しくなってきた」

エリスが涙ぐみながら瑞希にいった。

「はあ、そんなことは、無い。これから先もどんなに偉くなって俺たちの関係は、変わらないし話だって昔みたいにできるさ皆生きて会えたんだから」

瑞希は、エリアの頭を撫でながら言った。

「本当？ 本当に昔と同じように話ができる？」

「ああ、できる。俺は、少しできない時があるけどもう何時でも話せるよ」

瑞希は、頭の被り物を取りエリスに微笑んだ。

「うう、ミズキイヤー」

エリスは、瑞希に抱きつき泣きじゃくった。

【数分後】

エリスは、泣き止み顔を赤くしていた。熟れたトマトのように赤い。

「とりあえず少しの間は、客人として扱って貰えるけどそう長くは、客人として扱えなくなる」

「ふーん、それでオレ達に何をやらせたいんだ」

マチルダが言ったら瑞希は、苦笑いになった。

「ズバツときますねマチルダさん。」

そう言いながら苦笑いから直ぐに真剣な顔になった。

「三人には、新しい国を立ち上げると説明したよね。東にある国家総勢百二カ国からなる集合国家それが俺が納めることになる。百二カ国もの国家を纏めるにはかなりの労力があるんだ。今は、五大国のガリアス国が敵としているから国中が纏まっているけど敵が居なくなつたよかなることを企んでくる奴が出てきたら他国につきいられることになる。そんなことになつたらこの国は、終わってしまう。だから信用できる人材が欲しいんだ。」

瑞希は、少し暗い顔をしながらエリス達に言った。

「俺は、いいぞ瑞希、協力するぜ。親友に頼まれたんだし俺は、いく宛がないからな。」

龍也は、そう言った。

「私も協力する！だってこれ以上ミズキと離れ離れなのは、嫌だから」

エリスも龍也に続いて言った。

「まあ、オレも特に行くところ無いからな。それにお前が何処に行くのか見てみたいしな。」

マチルダも承諾した。

「ありがとう。役職や細かいことは、後から説明するから。部屋に案内するから今日は、休んでください」

瑞希は、嬉しそうに言い部屋を出ようとした。

「おい、瑞希。何処に行くんだ。」

龍也が聞いてきた。

「いや、これから仕事があるんだ。少しの間居なかったから政務が溜まっていて今のうちに処理とかないとね」

苦笑いになりながら瑞希は、部屋を出ていった。

瑞希が城を空けていた間にも国は、動いていて瑞希にしか処理できない政務が山のように溜まっていたのだった。これを明日にすることもできるが急ぎの案件が混ざっていたりするので今日中に片付けなくてはならなかった。

「瑞希いつちまったな。どうする？」

龍也が言った。

「まあ、取り敢えず今日は、ミスキが言ったように休もう」

マチルダが龍也に言い。三人は、案内されて各自部屋で休むことになった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5995g/>

魔と人との物語

2011年6月7日23時12分発行